
流星のロックマン 連鎖する運命

冬の結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 連鎖する運命

【Zコード】

N4263W

【作者名】

冬の結晶

【あらすじ】

メテオGの事件から数ヶ月後、スバル達は6年生になり平穏な
生活を送っていた。そんな中FM星では、アンドロメダの鍵の設計
図を盗み再び地球侵略を企むFM星人達が、地球に向かってきて
いた。陰で糸を引く者達から、スバル達は地球を守ることが出来るだ
ろうか？

プロローグ

- ? ? ? -

カタカタ・・・暗闇の中キーボードを打つ音が部屋に響く。影が画面と向き合いキー ボードを叩いている。音は休むことなく続いた。そんな中ドアが開き暗闇の中に光が差し込んだ。

「こんな遅くまで計画の確認？ 体調崩すよ？」

ドアから入ってきた人物は、キーボードを叩いている影に言った。
「・・・計画の最終確認だ。そつちこそこんな遅くまで起きていたら体調崩すぞ。」

影はそう言いながら手を止めた。

「最終確認つて『核』を集めるだけじゃなかつた？」

「ただけど・・・失敗は出来ないからな。それより例の件つまくいつたか？」

「バツチリだよ。うまくいった」

「分かった。俺はもう少し起きとくけど、お前はもつ寝ろよ

ドアから入ってきた人物は、「分かった。無茶はするなよ」というと外に行つた。

部屋に残つた影は、再びキーボードを叩き始めた。

- FM星 -

現在時間は午前零時。ここに住むFM星の人々も寝ているようで電波体の気配がほとんどない。そんな中FM宮殿では、警報が鳴り響いていた。

「なに」とだ

緑色の電波体が現れた。彼の名前はケフェウス。FM星の王であり、かつて地球侵略を企んだ。しかし、その戦いでスバルと出会い絆の大切さを知った。今は過去の罪を償うために過去に滅ぼしたAM星の復興を手伝っている。

宮殿の扉が開き一人の兵士が入ってきた。

「大変ですケフェウス様。FM星人の数名が、アンドロメダの鍵の設計図を盗み地球に向かっています。」

「何、地球との連絡は？」

「電波がジャミングされていて連絡が出来ません。」

報告を聞くとケフェウスは、宮殿の出入口へと足を運んだ。

「ケフェウス様どちらへ」

「地球の民達にここのことを行えに行く。」

「…ダメですケフェウス様。今あなたがFM星を離れては、FM星の民達の信頼をなくしてしまいます。どうかここにしてください。」

「

「我々も同じ意見ですFM王」

突然後ろから声が聞こえたため反射的にケフェウスは振り向いた。そこには、AM星の三賢者ペガサス・レオ・ドラゴンがいた。兵士は三賢者を見ると一礼をして外に出て行つた。

「地球には、すでに我々の使者が向かっています。」

「ですからFM王は、ここを離れずするべき」としてください。」

「

ケフェウスは、「…分かった」といつて承諾した。

「…お主達も離れるわけにわいかないのか?」

「はい、AM星の復興が忙しいため我々も離れるわけにはいきません。しかし、大丈夫でしょう。地球には、星河スバル達がいます。彼らならやつてくれるでしょう。」

ケフェウスは「そうだな」といった。しかし、そこにいた四体の電波体は嫌な胸騒ぎを感じていた。

プロローグ（後書き）

初投稿のうえ僕は国語能力が欠けているため、いろいろおかしなところがあると思いますが、これからがんばっていこうと思います。
感想・アドバイス等お願いします

いつもの朝

・ ハダマタウン・

現在AM8:10 ある青い屋根の家で、叫び声が聞こえる。

「いい加減起きろ————！」

「あ～もう、うるさいよ。ウォーロック」

「何がうるさいだ。今何時だと思つてやがる」

「ん～えっと・・・・・・」

布団の中にいた少年は、近くにあつた時計を見るなり飛び起きた。
「8時過ぎてるよー！ウォーロック何で起こしてくれなかつたの！？
？遅刻するーー！」

「俺がお前を起こすために何回叫んだと思つてるんだよーーー！」

少年は学校の準備をすると部屋を出て階段を降りて行つた。

彼の名前は星河スバル。彼はロックマンになつて、『FM星人』
『地球侵略』『ムー大陸の事件』『メテオGの事件』の三つの大きな
事件を解決し地球を救つた英雄である。他にも平行世界でアポロン
フレイムとブラックホールサーバーでシリウスと戦つている。

朝スバルを起こそうとしたのが、スバルの相棒であるウォーロック。彼は元AM星人だったが、今はスバルのウィザードとして生活している。スバルと電波変換することで、シューティングスター口ツクマンになれる。

「おはよ、母さん」

「おはよ、スバル。朝食は机の上にあるから速く食べなさい。ルナちゃんたちたち来てるわよ。」

彼女は星河あかね。スバルの母親で、優しく料理が得意。

「あれ、父さんは？」

「大吾さんならもう仕事に行つたわよ」

星河大吾。スバルの父親で、行方不明だったがメテオGの事件後、ウォーロックと共に地球に戻ってきた。今はWAXAで働いている。

スバルは異常な速さで朝食を食べた。

「『』馳走さま」

その後、荷物を持って玄関に向かった。

「行つてきます」「いつてらつしゃい」の会話を交わすとドアを開け外に飛び出た。

「あつそーい！今何時だと思つているのー？」

「じゃめんなさいー・委員長」

スバルが謝った彼女の名前は白金ルナ。高飛車な面がある。ウィザードはモードで礼儀正しい。

「おっせーぞ。スバル」

「ゴンタ君が言えること」とではないと思しますよ。」

「うう・・・」

牛島ゴンタ。単調だが喧嘩には強い。ウィザードは元F.M星人のオックス。電波変換でオックスフヤイアになれる。

メガネを掛けた背の低い彼は、最小院キザマロ。ウィザードは計算が得意なペティア。

「とにかく、時間がないわ。走るわよ」

ルナを先頭に四人は学校へ走り出した。

いつもの朝（後書き）

感想・アドバイス等待つてます。

転校生（前書き）

「プロローグ」と「いつもの朝」を編集しました。
注意、アドバイスありがとうございました。

転校生

—コダマ小学校—

あれから全力で走った結果時間ギリギリで間に合った。

「ギリギリセーフ。疲れた！」

「誰のせい？」うなつたのかしら？」

ルナがオーラを放ちながら聞いてきた。

「（ま、まよい・・・、コンタ、キザマ口助けて！）」

スバルが一人に視線を送るが、とばっちりをくらわないようにするため二人は視線をはずし授業の準備をしていた。スバルが長い説教を覚悟したとき、教室のドアが開き先生が「ホームルームを始めるぞ、みんな席につけ」といいながら入ってきた。

ルナは「次からは速く起きるように」といつて席に着いた。スバルは「（助かつた）」意外何も思っていなかつた。

「よし、みんな席に着いたな。今日は知っている人もいると思うが転校生が来るぞ。」

周りを見ると確かに席が四つ空いていた。周囲が騒がしくなり「どんな子が来るんだろ」「楽しみだね」などのお決まりの会話が聞こえてきた。

「まあ、みんながよく知っている人たちだからすぐに仲良く出来るだろう。じゃ、入つてくれ」

先生がそういうと教室のドアが開き二人の転校生が入ってきた。転校生を見るなりクラスのみんなは、言葉を失った。なぜならその転校生は・・・・・

「双葉ツカサです。みんな久し振り、のぼうが会つてるのかな?」

「ジャックだ。元気にしてたか」

「ベイサイドシティーから転校してきた響ミソラです。よろしくお願いします。で、いいのかな?」

双葉ツカサ。幼い頃、親に捨てられたため、親への憎しみが大きくなつた。その結果もう一つの人格ヒカルが生まれた。FM星人侵略のとき、FM王の右腕ジムニーと電波変換してジェミニースパークになりFM星の最終兵器アンドロメダを復活させた。しかし、スバルに阻止され、スバルと接することで親への憎しみが薄れていきヒカルと向き合つて生きていくため、和解の旅に出でいた。

ジャック。ディーラーの元幹部で、キングのメテオG計画を手伝つていたが、その計画を利用しメテオGを地球にぶつけようとするが、スバルに止められた。今は罪を償うためにWAXAで働いている。

響ミソラ。幼い頃父親を事故で、母親を病氣で亡くしつらい日常を送つっていた。しかし、スバルと出會つことでつらかつた日常が変わつていった。国民的歌手で、スバルの始めてのブラザー。ウイザードは元FM星人のハープで、電波変換することでハープノートに

なれる。

「あと一人いるんだが、用事ができたらしくてあえるのは明日になるな。さあて、三人はどこの席がいいかな？」

先生が言つたとたん教室の男子（スバル以外）が人気アイドルのミソラを自分の隣にしようとあちこちから「ミソラちゃんは僕の隣に」と言ひ声が聞こえ始めた。

「ツカサ君、ジャック！」窓に立てるけど、どう？』

男子生徒がミソラを自分の隣にしようとがんばっている中、スバルはツカサとジャックに声を掛けた。そんな中、ミソラが希望を言った。

「先生、私スバル君の隣がいいです。」

「うーん、星河はいいか？」

「え、いいんですけど・・・」

その瞬間クラスの男子（ツカサ、ジャック以外）から、殺氣のこもつた視線を向けられた。ルナはそれに加えて不気味（嫉妬？）なオーラを放っていた。

「（・・・なんかみんなからの視線が痛いし、委員長がすごい怖いんだけど）」

そんな空氣を気にせずミソラがスバルの隣の席に来ていた。

「これからようじくね。スバル君」

「へ、うそ。」「ちがうよ。」
「スバルはさうに殺氣のこもった視線を向けられていた。

「響の席は決まったな。ツカサとジャックはどうがいいか？」

「僕はどこでもいいです。」

「俺もどこでもいいぜ」

先生が一人の席を決めた後、今日の予定を言うと「よ～し、これでホームルーム終了。みんな授業の準備しとけよ」と言うと教室から出て行った。授業の準備が終わるとスバル、ミソラ、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックの七人の雑談が始まった。

「ツカサ君帰ってきてたんだね」

「うん、一週間ぐらい前に戻ってきたかな」

「それにしても驚きましたよ。転校生がツカサ君にジャック君、ミソラちゃんだったとわ

「本当よ、三人とも何の連絡もなしに来るんだから

「それよりも、ジャックやミソラちゃんは何でコダマ小に転校して来たんだ?」

「俺は曉に『お前はまだ小学生だから学校に行け』って言われて、強制的にこしをされた。」

「私は勉強を長じに間ほとんどやつてなかつたから、そろそろ勉強しないといけないかなと思つて転校してきたんだよ。」

「あれ、ミソラちゃんってベイサイドシティーの学校に通つてたんだから無理に転校しなくてもよかつたんじやないの？」

「そりゃええばそりゃね、何か理由があるの？」「ソラちゃん

「え、ええ～と・・スバル君やみんながいるからだよ。」

ミソラは答える間少しへスバルを見た。それにきずいたツカサはミソラとスバルを見てくすくすと小さく笑つていて、ルナは再び不気味なオーラを放つてゐる。他の四人は話に夢中できずいていない。

「（・・なんか委員長が怖いんだけど、なんかやつたかな）」

「でも、学校に行き始めたら仕事がやつづくなるんじゃないのか？」

？」

「ツカサ君の言つとおりなんだよね。だから、次のライブが終わつたらじぱりへの聞仕事を休むつもりなんだ」

「ええ、じゃあミソラちゃん歌手やめたりうのかよ」

「じゅうべの聞つて聞いたでしょ。」

「じゃあ、みんなでミソラちゃんのライブに行かない？」

スバルの提案にほとんど全員賛成したが・・

「俺はいかねえぞ、騒がしいところ嫌いだから」

「だめよ、ミンラちゃんの引退ライブなんだから拒否権ないわよ」
ルナの言葉にいいかえそうとしたが、後がうるさいのでしぶしぶ承諾した。

「とこりとこりで、全員行けるぞうよ。」

「分かった。全員分のチケット取つとくね」

そんな会話をしているとクラスの男子がスバルを呼んだ。スバルは「（何だり）」と思いつながら行くと、スバルの周りを囲んだ。

「え、な何？」

「お前//ソリちゃんどうつ関係なんだ？」

「え、ブロガーだけど・・」

「なんだとー詳しく述べもりおつか、スバル？」

「（な、なんかみんなの目が怖いんだけど・・）」

助けてもらおうとみんなのまつに視線を送るが、ライブの話に夢中で誰も気がついていない。クラスの男子による尋問（？）が始まるとしたとき、再び教室のドアが開き先生が「おーい、なにして

る。授業始めるや〜〜」と言いながらはいってきた。スバルを囲んでいた男子は悔しそうに席に着いた。

「（た、助かった・・なんだか今日は良い一日でもあって、ひどい一日だな）」

スバルはそう思いながら席に座り、授業が始まった。

転校生（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

大量発生（前書き）

投稿遅れてしましました。これから気をつけようと思います。では、どうぞ。

大量発生

- 屋上 -

今ここには僕^{スバル}とウイザードのウォーロックしかない。え? どうしてかだつてそれは・・

みんなが昼食を食べ終わると、ミソラがコダマ小に転向してきたことをかぎつけたファンの人でクラスの中がいっぱいになった。ツカサとジャックも「今まで何していたんだ?」などと質問される。委員長たち三人は教室にきたミソラのファンの対処で忙しいようだ。スバルは教室にいるとクラスの男子にいろいろ問い合わせられ、そのうえ誰もいないと思われる屋上にいる。

そんな訳で屋上に来たスバルは芝生の生えたところに座つて空を見上げていた。

「にしてもツカサ君やジャック、ミソラちゃんが転校して来るなんて驚いたね。」

「俺にとつてはいい迷惑だけどな」

「え、なんで?」

「ハープのやつがいるだろ」

「・・何でウォーロックは、ハープが苦手なの?」

「前にいろいろあつてな」

「ふうん

スバルはそういって話を止めて再び空を見上げた。

「・・・なあ、スバル」

「うん? 何、ウォーロック?」

「暇だ〜何か事件とか起きないかな〜」

「暇ならハープの所に行けば?」

「いや、それは無理。それよりウイルスとかをぶっ倒すほうが良い。」

「え〜、僕は嫌だよ。戦つたりするの。それに、それに事件なんてそう簡単に起きないよ。」

スバルはウォーロック意見にそりと答えるとまた空を見上げた。

「・・・事件起きる」

「え?」

「事件起きる、何でもいいから事件起きる・・・」

「ちよつとウォーロック、物騒なこと言わないでよ。それにそん

な」と言つたつて事件が起きるわけが

そのとき町に爆発音がなつた。

「お、 おいスバルウイルスが大量に出てきたぞ」

「ウォーロックがあなことを行つてたからだよ」

「俺のせいにするなよ。 それより、 速く行かなくていいのか?」

「もう、 行くよウォーロック。 電波変換」

そういうとスバルはロックマンの姿になり、 ウェーブロードに乗つてウイルスがいるところに向かつていった。

「ウェーブロードー

「スバル君」

スバルがウェーブロードで移動していると後ろから声を掛けられた。 そこには、 ハープノートがいた。

「ミソラちゃん、 どうして」

「教室でみんなと話していると、 外から爆発音がきこえてハープがウイルスが出たつて言つたから急いできたの。 それから・・・

「スバル（君）」

声がした方を見るとジエミースパークとジャックコーヴァスも来ていた。

「ツカサ君、ジャックそれにヒカルも、三人ともどうして電波変換ができるの？」

「その話はまた後で、それより」

「おい何話してんだ。さつさと行つてかたづけるぞ」

「う、うん。行こ。」

五人は、ウエーブロードを使い現地に移動し始めた。

-コダマ公園-

「うわ

「な、なにこれ

四人の目の前には、百体をゆうに超えるウイルスの大群が暴れていた。

「どうあすかひとつ終わらせよっぜ」

「久し振りに暴れるぜ

「ヒカル、ほどほどにね」

五人は手分けしてウイルスを倒し始めた。

「ブレイクサーべル」

「パルスソング」

「フェザーシックル」

「Hレキソード」

「ロケットナックル」

五人の攻撃によりウイルスの大群は減る・・はずだつた。

「ねえ、もうずいぶんウイルスを倒したよね。」

「うん、でも」

「数が減つてないね」

「逆に増えてきてるな」

「ねえ、それになんかウイルスの動きが速くなつてきてない」

「僕もミソラちゃんの言つてるとおりだと思つ」

「そう、ウイルスの動きが速くなり当たつていた攻撃が少しずつ当たらなくなつてきた。」

「...ミソラ後ろ」

ミソラが目の前のウイルスを倒すと残っていたウイルスがミソラを後ろから攻撃しようとしていた。しかし、そのウイルスが突然真っ一つになりテリー一トされた。

「ミソラ、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよハープ。ありがとうヒカル君」

「口を動かす暇があつたら手を動かせ」

「いくらなんでも数が多くすぎる」

このままだと、体力が減つていくスバルたちが不利なのは明らかだ。スバルは広範囲攻撃のバトルチップを使うが、ウイルスたちは一向に減る様子がない。

「！おい、スバル。何か変な周波数があるぞ」

「え、ウォーロック場所は？」

「目の前のウイルスの中だ」

「分かつた。ソードファイター」

バトルチップを使いウイルスを倒すが、残ったウイルスが邪魔をしてスバルの行く手を遮っている。

「どうしよう、これじゃ何があるのかが分からない」

「スバル、少し離れてろ」

声が聞こえたほうを見るとジャックが空にいて両手からは紫色の炎が出ていた。スバルはジャックのすることが分かると上にあったウォープロードに移動した。

「ペインヘルフレイム」

すると無数の炎がウォーロックの言った場所にいたウイルスを半分以上燃えた。燃えている炎の中からは奇妙な光を放つ装置が現れた。その装置の周りを中心に焼き払ったウイルスが出現していた。

「あれは！」

「どうやらあの装置を壊さないとこのウイルスは消えてくれないみたいだね。」

「そうみたいだね。行くよツカサ君、インパクトキヤノン」

「ロケットナックル」

二人の攻撃は装置にあたり音を立てて壊れた。装置が壊れた瞬間ウイルスたちの動きが始めの速さに戻った。

「すべてあの装置のせいだったってわけか」

「そうみたいだね。けど、もう増えることはない」

「よーし、ショックノート」

「ジエミー・サンダー」

「ペインヘルフレイム」

「ジャイアントアックス」

スバルたち五人の一斉攻撃でさつきまで減ることのなかつたウイルスがほとんど消えていった。残りのウイルスをかたづけるのにそんなに時間は掛からなかつた。ウイルスがかたずくとスバルたちは電波変換を解いた。

「やつと終わつた」

「さすがに疲れたね」

「俺とツカサがいなかつたらお前らやられてたな。」

「そりいえば気になつてたんだけど、なんで一人は電波変換が出来るの? ジエミーとゴヴァースがいないのに」

「それはね」

スバルの質問にツカサが答えようとしたとき、スバルのハンターが鳴つた。

「スバル電話だ」

「分かつた。ありがとう、ウォーロック」

スバルはウォーロックにお礼を言つと「誰だれ?」と思いながら

ハンターを操作してエアティスプレイを出した。そこにいた人物は・・・

「ひさしふりね。スバルちゃん」

「ヨイリー博士」

ヨイリー博士。WAXAの科学者。メテオGの一件で、スバルに力を貸してくれた人だ。

「あ、おひさしふりです。ヨイリー博士」

「ひさしふりね、博士」

「あら、ミソラちゃん」「ハープちゃんひさしふり。二人とも元気にしてた?」

「はい、元気にしてます」

「そうよかつたわ」

「ところで博士、何かあつたんですか?」

「ええ、ちょっとそっちで妙な周波数を感じしてね。そっちで何か起きてない?」

「つこつこ今までウイルスが大量に発生していました。」

「もう、俺たちが倒したけどな」

「そう、そのことでちょっと話があるから、そうね、学校が終わったらWAXAに来られる?」

「あ、学校があつたの忘れてた。」

「あ、私も」

「じゃあ、まず学校に戻つて、話はWAXAでつてことになるね」

「そうだね。学校が終わつたらWAXAに行かせてもらいます。」

「ええ、分かつたわ」

マイリー博士はそつまつと電話を切つた。

「学校に戻るわぜ」

「うん」

四人は再び電波変換をして学校に向かつた。

大量発生（後書き）

戦闘描写を書いて見ました。
アドバイス、感想等よろしくお願いします。

じゅりあ

- ロダマ小学校 -

「よーし、ホームルーム終了。気をつけて帰れよ」と言つと先生は教室から出て行つた。

あれからヨイリー博士と話し終わり、スバル達が学校に戻ると六時間目の授業が始まっていた。なぜいなかつたのかと理由を聞かれて素直に「電波変換してウイルスを倒していました」なんて言えるわけがないため、「保健室に行ってました」などと適当な理由を言つて授業に参加した。

「で、スバル君たちは、私たちに向も言わずに戦いに行つたってことね

「はい、そうです

今は教室でさつきのウイルス戦のことをルナ、ゴンタ、キザマロに説明していた。

「それで、今からWAXAに行くの？」

「うん、ヨイリー博士に学校が終わったら行くって言つてあるから

「分かったわ。ゴンタ、キザマロ、私たちもWAXAに行くわよ

「

「え、委員長たちも来るの？」

「当たり前でしょう。それにゴンタだって電波変換できるんだから私たちも話して参加させてもらひつわよ

「そうですよスバル君。僕たちもついていきますよ。そうですよね、ゴンタ君

「え、ああ、そうだぜスバル」

ゴンタは、何か考え事をしていたので、キザマロに声を掛けられたとき少し驚いていた。

「ねえ、スバル君。速く学校を出ないと出られなくなるよ

「？ 何で、ツカサ君

「スバル、あれを見てみる」

ジャックが外を指したので見てみると、そこには大勢の人方が校門の前にいた。

「・・なんなの、あれ」

「多分ミソラちゃんのファンの人たちじゃないの」

「ミソラちゃんってすじいね」

「そんなこと言つてる場合ですか、あれじゃ WAXAまで行くの

に時間が掛かりますよ

「あそこでいる人たちとは、ミソラのファンなんだろ」

「多分そうだろうね、それがどうかしたのジャック」

「それなら、ミソラが電波変換してWAXAに行けばいいんじゃねえの？」

「確かにそうね、それでいかじらミソラちゃん」

「うーん、それだつたらスバル君も一緒に行こうよ」

「ちょっと待ちなさい。何でスバル君もなのよ」

「だって、みんなは一緒に行つて私だけ一人で行くのって嫌なんだもん」

「僕は別にいいけど」

「本当?スバル君。じゃあ速く行こう

そういうとミソラはスバルを引っ張つて教室を出て行つた。そのさい、ミソラと一緒にいるスバルを目撃した男性陣が「スバル、何してやがる」などと叫びながら一人の後を追つていつた。

「ミソラちゃん教室出るの速かつたな

「スバル君逃げきますかね」

「スバル君も大変だね」

「なあ、委員長のやうのがマジで怖いんだが、何とかしてくれないか？」

ジャックの隣には話しかけただけで怒りそうなルナがいた。

「ううん、多分無理。ウェーブライナーに遅るといけないから先に駅行っておくね。」

ツカサは笑顔で言つと教室を出て行つた。残された三人はルナに声を掛けるが「何？」と恐ろしい目で見られたが、「駅に行きますよ」というとツカサの後を追つていつた。ルナは、自分が置いていかれたことにきずきさらりに機嫌が悪くなつていた。

— ウエーブロード —

「はあ～疲れた」

「大丈夫？スバル君」

教室を出た後スバル達を追いかけてきた男性陣たちから逃げるため、全速力で走り何とか逃げ切つた。今は電波変換してウェーブロードにいる。

「それにしてもすごい人数だったね。スバル君って人気者なんだね」

「いや、僕じゃなくてミソラちゃんだと思うよ

ね」

ミソラはスバルの言つた事が聞こえてないようでウホーブロードのつえを歩いている。

「どうしたのスバル君。おいでいくよ」

「あ、まつてよミソラちゃん」

スバルはミソラのところまで走つていった。それから少しの間二人はWAXAに向かつて歩いた。

「それにしてもこうしてスバル君と一人でいるのって久し振りだね」

「そういえばそうだね」

「ああ、なにいつてんだ、俺も・・グハ！」

ウォーロックがウイザードオンして出てきたところをハープが一発KOにしてしまった。気を失つたウォーロックをハープが「ごめんなさいね。このガサツは私が預かつておくわ」と言いながらウォーロックを引きずつてどこかに行つてしまつた。

「ウォーロック、大丈夫かな?」

「大丈夫なんぢゃない、それよりスバル君もう少しうつくり行かない?」

「え、いいけど」

スバルはそういうとペースを落とした。それから一人はWAXAまで楽しそうに会話をしながら向かった。

「WAXA前」

WAXAの前に青とピンク色の一人の電波体が現れた。一人は電波変換を解き周りを見渡した。

「みんなまだ来てないみたいだね」

「そうみたいだね」

スバルとミソラがルナたちより先についたようだ。（当たり前だが）

「あ、スバル君来たみたいだよ」

ミソラがそういうとウェーブライナーが駅に止まり。ツカサ、ゴンタ、キザマロ、ツカサが出てきた。しかし、ツカサ以外のゴンタ、キザマロ、ジャックはウェーブライナーから出でると同時にその場に倒れた。

「一ちょっと、どうしたの三人とも

スバルはそういつとミソラと一緒にツカサ達に近づいた。

「スバル・・牛丼あるか？」

「スバル君、僕はもうダメです」

「スバル・・お前らがいることはやつとついたか

ゴンタは、スバルが近づくなり好物の牛丼の事を聞き、キザマロは消えそうな声で一言いい、ジャックは何とか立ち上がった。

「ねえ、ツカサ君なにがあつたの？」

ミソラが四人の中で一番大丈夫そうなツカサに聞いた。ツカサはウェーブライナーの方を見た。それにつられてスバルとミソラが見ると、ルナがウイルスの大群が脅えて逃げだすんじやないかとう不気味なオーラを放っていて、何か言つていた。

「委員長になにがあつたの」

スバルはルナに聞こえないように質問した。

「スバル君とミソラちゃんが教室から出て行つてからああなつたみたいだよ」

ミソラは、なるほどと分かつたようにうなずいたが、スバルは何でという顔をしている。

「それで、始めは一人でいろいろ言つてたみたいなんだけど、なぜか僕たちが怒られて」

「委員長に説教されてたつてわけだね」

「そうだぜスバル」

ツカサが説明していたところにある程度回復したジャックが話し

に入ってきた。

「あ、ジャック。もう大丈夫なの」

「俺はな。くそ、あのドリル女め、ウーブライナーに乗つてからずつと俺達説教されてたんだぞ。」

「それで、キザマロ君とゴンタ君があんなことになつたんだね。」

キザマロとゴンタはまだ回復していないらしく地面に倒れていた。「どうする。ヨイリー博士も待つているだろ?」やがて行つた方がいいんじゃないの」

「でも、置いていくわけにはいかないよ」

しばらくスバルたちがどうするか考えているとツカサが「…ウイザード達に頼めばいいんじゃないの」と言つた。

「あ、そうだね。オックス、ペティア、モード委員長たちを頼めるかな?」

「いいぜ」

「了解です」

「ルナちゃんはまだおじょ」

「委員長は落ち着くまでいてあげて」

「分かりました」

「これでいいと思うんだけど」

「いいんじゃねえの」

「速く行こうよスバル君」

「そうだね」

ルナ達三人はウィザードにまかせ、スバルたち四人はWAXAの中に入つていった。

じめいじつ（後書き）

会話文が多くことよくな・・・

感想・アドバイス等よろしくお願ひします

WAXAで

- WAXA -

WAXAの中はサテラポリスの人たちが忙しそうに働いていた。スバルたちが中に入ると、ヨイリー博士が出迎えてくれた。

「すみません。遅くなつて」

「いいのよ、スバルちゃん。会議室で話をしましょうか。ついてきて」

スバル達はヨイリー博士についていった。

「ここが会議室よ

ヨイリー博士はドアの前に止まりドアを開け中に入つていった。スバル達は「失礼します」と言つて中に入った。すると中から聞いたことのある声が聞こえた。

「よお、久し振りだな、スバル」

「あ、暁さん」

暁シドウ。元ディーラーの一員だつたが、メテオGの事件ではスバルと一緒にキング達と戦つた。しかし、戦いの中で大爆発に巻き込まれて行方不明になつていた。

「え、あ、暁さん、生きてたんですね」

「おー!!ソラ、何だその言い方。まるで俺が死んでいたようじやないか。・・・まあ、確かに一度死んだけど。」

最後の言葉はスバルたちには聞こえないよう言った。

「でもどうしてですか。あの爆発に巻き込まれたらとても生き戻れるなんてこと・・・」

「スバル、俺あのとき電波変換してたよな」

「え、はい。してましたけど」

「電波変換した状態だったから爆発に巻き込まれた時、データとして電腦の中とかに散らばってたらしいんだ」

「でも、それがどう関係・・・あ」

「?どうしたのスバル君」

「ほら、委員長がジョーカーにやられたとき、散らばったデーターを集めて再構築したじゃない」

「そう、それで私とジャック、サテラポリスの人たちでシドウのデータを集めて再構築したのよ」

「クインティア先生」

クインティア。ジャックの姉で、元ティーラの幹部。ジャックと

一緒にメテオGを地球にぶつけようとしたがスバルに止められた。そのさい、ウイザードだったヴァルゴは、コーヴァスとともに、ブライビゲリートされた。

「久し振りね。あと、もう先生じゃないわ」

「はい。でも、暁さんアシッドは・・・」

「ああ、アシッドもちゅうさんとこるね。ウイザードオン」

暁が血の白を中心としたウイザードが出てきた。

「お久し振りです。みなさん」

「アシッド！久し振り」

「暁さん。もしかしてアシッドも再構築したんですか？」

「お、鋭いなミソラ。そのとおりだよ」

「そうなんですか・・・あ、もしかしてツカサ君やジャックが電波変換出来た訳って」

「気がついた。僕のハンターからジH///Iのデータが見つかって、スバル君の手助けが出来ると思つて再構築してもらつたんだ。」

「俺はコーヴァスがいれば戦つことが出来るからな

「へえ~、え、コーヴァスが再構築できただってことはヴァルゴも

「ええ、再構築してもらつたわ

「それで、そろそろ本題にはいっていいかしら」

「あ、すみませんヨイリー博士」

スバル達は指定された席に座ると周りの雰囲気が変わった。

「じゃあ、まずウイルスを出していたと思われる装置のことだけ
ど…」

「え、何で装置のことを探ってるんですか？まだ報告していないの
に」

するとシドウが「スバルたちが話している間にジャックが装置を
回収してメールで報告してくれたんだ」といった。

「話を戻すわね。その装置についてなんだけど作りが複雑でまだ
分からぬけど、その装置の中にこんなものが在ったの。」

ヨイリー博士はそう言つと田くて丸いものを見せた。スバル達は
順番にその丸いもの見た。

「これって石ですよね」

「ああ、ツカサの言つたとおり石なんだが、これただの石じゃな
いんだ」

シドウは見終わったスバルたちから石を預かり言った。

「えりあひ」とだ?」

「この石は少しだけど周波数を持つてゐるのよ。」

「え、石が周波数を持つてあるんですか?」

「時々あるんだよ。電波を沢山浴びると周波数を持つのが
「シドウさんのおつたとおつたの石ならたいしたことないんだけ
ど、この石は特別のよつだね。」

ヨイリー博士が言つたとこいつの間にかクインティアがウイルスを連
れて来ていた。

「姉ちゃん、そのウイルスは?」

「まあ見てなさい。ヴァルゴ」

「はあ~い。ティアやつちやつていのね?」

「ええ」

「りょーか~い。ゴッズレイン」

ハンターから出てきたヴァルゴが杖を振るとウイルスの上に雨が
降り出し、ウイルスがテリートされた。シドウが持っていた石をテ
リートされたウイルスの近くに置いた。しばらくすると突然、石が
しかしだしテリートされたウイルスが現れた。クインティアは再び
現れたウイルスを持って会議室から出て行つた。シドウは石を拾い
机に上に置いた。

「今、見たとおり、この石こまデータを自動で再構築する」とが出来るみたいなのよ」

「やつぱりウイルスが減らなかつたのはその石が関わつてたんですね。」

スバルが言つとシドウが答えた。

「そうゆうことになるな。だが、この石は力が弱いようだな。短時間で何体ものウイルスを再構築するのは無理なはずなんだ」

「それを装置を使って強引に力を底上げしたつてといひね。」

「そりだつたんですか」

スバルが答えると沈黙があとずれた。その沈黙を始めて破つたのはミソラだった。

「あの～、その石つていつたい何なんですか

「それがな、分からんんだ」

ミソラの質問にシドウが答えた。

「え、分からんんですか？」

「そりなのよ。地球でできたとは考えにくくし、ムーの物でもないのよ」

スバルの質問にヨイリー博士が答えると、ツカサが「ビ」のものか分からぬ石か・とささやいた。
シドウが石を持ち言つた。

「だが、この石があつた装置を作つたやつがいるはずだ」

「・・また戦いが始まるんですか」

スバルが言つた言葉に会議室にいたほとんどの人たちが息を飲んだ。

「・・・たぶんな。敵が分からぬため手の打ちようがないが、一応頭に入れておいてくれ」

「分かりました」

「よし、今回の話し合いはここまでだ。帰つていいで。あ、ジャックは上に行つてティアを手伝ってくれ」

ジャックは「何で俺が・・」とぼやきながら部屋を後にした。ジャックが出て行くとヨイリー博士がスバルに声を掛けた。

「あ、それとスバルちゃん、あなたに渡す物があるのよ

「何ですか?」

「ハイ、これ。預かってた『エース／ジョーカPG』よ。ノイズエンジはできぬけど、ファインライズができるようにしてあるから」

「あ、あいがといわせこまか」

「ここのよ。けど、メテオGがあるわけじゃないから不完全で前のよつの力は出せないから気をつけてね。じゃあ、気おつけて帰るのよ。」

スバル達は「はい」とこって会議室から出て行つた。

「・・あのPGM、渡してよかつたんですか?」

「スバルちゃんなら大丈夫よ。さあ、シドウちゃんは私と一緒に研究室に来て石があつた装置の解析を手伝つてちょうだい」

「え? 今からですか?」

「当たり前でしょ。さあ行くわよ。」

「はあ~また夜勤か・・」

シドウはさう言しながら研究室に向かつた。

捨い物と

- WAXA 外 -

スバルたちはシドウたちの話が終わるとWAXAから外に出てルナたちがいるウェーブライナーに向かった。

「それにしてもずるいよ。スバル君ばかりPGMとか貰つて強くなつて」

「いや、ミソラちゃんも十分強いと思つけど」

「それでも・・・肝心なときには一緒に戦つ」ことができない・・・

ミソラは思いつめたような顔をしてうつむいた。

「・・・だったら、ヨイリー博士に頼んでみたら? もしかしたらGM作ってくれるかもしれないよ」

「・・・そうだね、そうしてみるよ」

ミソラはスバルの言った言葉で少し元気が出たよううつむいていた顔を上げた。それからスバルとミソラは楽しそうに話し始めた。ツカサはそんな二人を少し離れたところで見ていた。そうしていると、遠くから三人が近づくのが見えた。

「お~い、スバルー」

「あ、ゴンタ」

ルナ、ゴンタ、キザマロの三人がスバルたちに近づいてきた。WAXAについてたときのルナの悪かつた機嫌は元に戻っているようだつた。

「ゴンタ、キザマロ、委員長の機嫌が直ってるようなんだけど何があつたの？」

スバルはルナに聞こえないようにゴンタとキザマロに聞いた。

「モードとペティアたちががんばってくれたそうです」

「本当に大変だったんだぞ」

キザマロは理由をいい、ゴンタは恨むぞといつ顔をしている。そんな中ルナが聞いてきた。

「ちょっとスバル君話し合いは終わったの」

「うん、もう終わつたよ」

「せつかく今から行こうとしていたのに・・・まあいいわ、ウエーブライナーに遅れるから話はそこで」

スバルたちは駅に向かつて走り出した。

- ウエーブライナー -

今はスバル、ミソラ、ツカサの三人でルナたちにWAXAでの出

来事を説明していた。また戦いが始まるかもしれない」とも一応話した。

「……そう、また戦いが始まるのね」

「大丈夫なんですか?」

「多分ね。もし始まつたら、今までと同じようにドキドキすることを精一杯するだけだよ」

「がんばってください。僕はスバル君たちを応援しています」

「ありがとうございます、キザマロ」

キザマロはスバルと話をしているが、ルナは心配している顔をしていて、ゴンタは何か考え方をしている。そんな時ウェーブライナーに放送が掛かった。

『次は「ダマタウン」。お降りの方はお忘れ物のないよう』

「あ、『ダマタウンに着いたみたいだよ。』

ツカサが言つとミソラが言つた。

「私はベイサイドシティーだから、また明日」

「そうだったね。じゃ、また明日学校で」

「うん、また明日みんな」

ミソラが手を振ったのでスバルは手を振り返してウェーブライナーを出た。それからしばらくの間スバル達は夕日に染まる町を歩いた。分かれ道に来るとツカサは「僕はこっちだから、また明日みんな」といつてスバルたちと別れた。それからルナ達と別れてスバルも家に帰った。

-スバルの家-

「ただいま」

「お帰り、スバル」

スバルは玄関に入るとあかねがエプロンの姿で迎えた。

「今日はやけに遅かったわね。何かあったの？」

「ちよっと、WAXAに呼び出されてね。後で話すよ」

「分かったわ。大吾さんは夜勤で今日は帰らないそうよ。」

「え? 今日もなの?」

「ええ、なんだか一週間前からFM星だつけて? そことの連絡ができないそつのよ。」

「そうなの?」

「らしいわよ、そのために働いているそつの」

そう言つとあかねは台所に向かつた。

「なんかあつたのか」

「うわー驚いた。ウォーロックいつから戻つてたの。」

「ついさつきだ。畜生ハープのやつ。いきなり氣絶させやがつて。ブツブツ・・・・」

ウォーロックが一人でいろいろ言い始めたので、スバルはウォーロックを置いてリビングに向かつた。机にはカレーがあつた。

「わあ、今日はカレーなんだ」

「沢山あるわよ」

「いただきます」

スバルはカレーを食べ始めた。あかねも椅子に座つてカレーを食べ始めた。

「そりいえば今日学校に転校生が来たんだ」

「へえ～どんな人？」

「それがね、ツカラ君にジャック、それにミソラちゃんだったんだよ」

「え、ミソラちゃんが転校して來たの」

「うん、本当みんな何の連絡もなしに来るんだから驚いたよ」

あかねは「だからミランちゃん頼んできたのね」と言つた。

「？？」

「いや、何もないわ。それより、WAXAで何の話をしたの」

「ええと」

スバルは暁が生きていること、毎日ウイルスの大量発生があったこと、また戦いが始まるかもしれないことを話した。

「そう、あまり無茶しないのよ。」

「うん、分かつてるよ。御馳走様」

スバルはそのまま自分の部屋に行つた。

スバルは部屋に入ると近くにあつた分厚い本を取り読み始めた。ウォーロックは何もすることがないようでハンターの中で寝ている。

- 展望台 -

周りが暗闇に染まつていて、突然空間に赤い光があたりを照らした。その光が收まると紫色の石一つ地面に落ちた。

-スバルの家-

静かになつた部屋の中で、さつきまで寝ていたウォーロックがハンターから飛び出てきた。

「おい、スバル

スバルは本を読みながら「なに、ウォーロック」聞いた。

「ちよつと、展望台に行かねえか

「・・明日は雨でも降るのかな?」

「何だとこのやういつ

「だつて今までウォーロックが自分から展望台に行こうって言ったことなかつたんだよ

「確かにそうだがよ。・・・少し妙な周波数を感じてな

「分かつた。行ってみよう

スバルは準備をすると部屋を出て行った。

「あら、スバル。展望台に行くの

「うん、ちよつと遅くなるかもしないから

「分かつたわ。いつてらっしゃい

「いつときまわ」

スバルはそつと展望台に向かった。

・展望台・

「・・何もないね」

「おかしいな。さっきは確かに感じたんだが・・」

スバルは今展望台に来てウォーロックの感じた周波数を探している。

「あれ? ねえ、ウォーロック。これって何だ?」

スバルは落ちていた紫色の石を見つけて拾った。

「その石から何を感じねえぞ。それがどうした」

「いや。ただ、昨日ここに来たんだけど、そのときはこんな石なかつたから」

「そうか。・・どうやらなにも無いようだな」

「うん。ウォーロックの勘違いだったのかな?」

スバルは辺りを見回しながら言った。

「確かにあの時は感じたんだがな。まあいいか。とつとと家に帰るわぜ」

「ちよっと待つてよ。せつかく来たんだからもう少し」と
「うふ

ウォーロックはいやな予感を感じながらスバルに「何だと?」と
聞いた。しかし、スバルはウォーロックが言ったときにはもう星を
見ていた。ウォーロックはしばらくの間「お~い。」「スバル」と
いつたがまったく聞こえてないようで返事もしない。ウォーロック
は諦めたようで静かになつた。

展望台の近くである電波体が話してゐるようだ。

「本当にスバル君があのロックマンなの?」

「ええ、だから話のついでに確かめてみたらどうですかとせつき
から言つていいでしよう。」

「あ~もう、分かったわよ。行くわよ、ユニークーン」

「了解」

電波体たちはスバルがいる場所へ向かつて行つた。

「おいスバル。星を見る時間は終わりだ。」

「え、何で?」

スバルは体を起こすと前から電波体が来ているのが見えた。電波

体の周りには青い球体が現れていた。

「フリーズボール」

「つち！」

ウォーロックは体を起こして身動きが取れないスバルを突き飛ばした。青い球体が飛んできてスバルがいたところに着弾し、氷付けになっていた。スバルたちの近くには、白いアーマーをつけた淡い青色の電波体がたつっていた。

アイスユニコーン

- 展望台 -

スバルは今ウォーロックのおかげで電波体の攻撃をかわすことができた。淡い青色の電波体は頭に白い小さな角があり、右手には鉾を持っていた。スバルはウォーロックにお礼をいいいつでも電波変換ができるようにハンターを構えた。すると電波体がスバルに質問してきた。

「星河スバル君だよね。地球を三度救つた英雄のロックマン」

「・・・君は何者?」

「この姿の名前は、アイスユニコーン。手合わせをお願いしたいんだけど、どうかな?」

「へ、なにが手合わせだ。いきなり攻撃してきやがって、戦えて言つてるもんじゃねえか。強引なやつだぜ」

「それ、ウォーロックがいえること?」

「うるせえ。それよりどうするんだ。あつちは俺らのこと知つてみたいだぜ」

「戦うしかないみたいだね。いくよ、ウォーロック。電波変換」

スバルは光に包まれロックマンの姿になっていた。

「「わ、本当だつたよ」

「へ、ぢりあひ」と

「気にしない、気にしない。じゃ、始めよつ」

「「ウエーブバトル ライド・オン」」

「エドギリブレード」

スバルは手から剣を出すとアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは持っていた鉾の先で受け止めた。

「ちよつと、手加減とかないの」

「よくわからせ。余裕つて顔してるぜ」

ウォーロックが言つとアイスユニコーンはふつと笑つと距離を取り鉾を振つた。スバルはエドギリブレードで受け止めたが簡単に折れてしまった。

「その剣つて脆いね」

「それは、どうかな?」

スバルは再びエドギリブレードを出しあアイスユニコーンに斬りかかつた。アイスユニコーンは受け止めずに鉾を振り、剣と鉾が交わつたがエドギリブレードは折れなかつた。

「……強度だけじゃないね。威力も上がってるね」

「エドギリブレードは連續で使えるを使つほど強くなるんだよ」

「便利な剣だね」

そう言つとアイスユニークーンは再び距離を取ると周りに青い球体を複数出現させた。

「フリースボール」

アイスユニークーンは鉾をスバルの方に向けると球体がスバルに向かつて飛んできた。

「スバルあの攻撃はあまり当たるなよ。凍つて動きずらくなるぞ」

「分かった」

スバルは周波数変換を使いかわした。

「ちよつと、少しごらり当たりなさいよ」

アイスユニークーンは再びフリースボールを使いスバルに向かつて飛ばした。スバルは「敵の攻撃には素直には当たらないよ」と言うとマッドバルカンを使い襲つて来る球体を撃ち落とし始めた。

「……スバル上だ」

「スノウフロウズン」

アイスユニコーンが持っている鉾が雪を纏い振り下ろした。スバルはとっさにエドギリブレードを出し受け止めたが、吹き飛ばされた。スバルはたとうとするが地面にはついている氷に足がとられてうまく立てない。さらに、受け止めた方の手が凍っていた。

「くそ。あの攻撃もか

ウォーロックが言うとアイスユニコーンがスバルに向かつて鉾を振り下ろした。が、喉元で鉾を止めた。

「どうする？ 降参する？」

そのとき炎を纏った剣がアイスユニコーンに突きつけられていた。アイスユニコーンが後ろを向くとスバルが凍っていた手からファイアスラッシュを出していった。

「・・なんで？」

アイスユニコーンは焦った様子も驚いた様子もなしに聞くとさつきまでスバルがいた場所を見た。そこにはスバルの姿はなかった。

「ヘンゲノジュツだよ。つまり君が攻撃したのは偽者だったってこと

スバルは構えを解かずに言った。ウォーロックは出てきて「どうだ。降参するか？」と言った。

「あ～あ、降参。変わり身つてあり？」

アイスユニコーンはそう言うと電波変換を解いた。そこには瞳

と髪が薄い青色で、背はスバルと同じぐらいの女の子が立っていた。スバルも電波変換を解いた。

「君は誰？」

「・・私のこと覚えてないの？」

女の子はスバルを見ながら聞いた。スバルは思い出そうと記憶を探つた。

「『』めん。分からな」

「そつか。まあ、仕方ないかな。小学一年生の頃だつたし」

「小学一年・・・あ、もしかしてアオイちゃん？」

「思い出してくれたんだ。そうだよ。久し振りスバル君」

スバルは思い出したようで、アオイと呼ばれる女の子と話し始めた。そんな中状況が呑み込めてないウォーロックはただボーとしていた。

「・・おースバル。この女だれだ？」

「あ、ウォーロック。この子は海月アオイちゃん。小学一年生の時の友達だよ」

「ウォーロックだね。はじめて」

ウォーロックは気が合わないのかそっぽを向いた。

「そりゃあ。何で僕がロックマンだつて知ってるの？」

「ああ、それね。この子に聞いたの」

アオイはそういつとハンターから頭に角がある白色の電波体を出した。

「スバルさんにウォーロックですね。初めまして、私はペガサス様の使者ユニコーンと申します。」

ユニコーンはスバルとウォーロックに自己紹介をした。

「え、ペガサスってあの三賢者の？」

「はい。ペガサス様からFM星で起きたことをスバル様に伝えるようにと言られて参りました」

「・・・FM星で何かあつたのか？」

「実はアンドロメダの鍵が盗まれただつて」

「アンドロメダの鍵が盗まれただつて」

ユニコーンはスバルの驚きよつに少し戸惑っている。

「いえ、鍵じゃなくて鍵の設計図が盗まれたのです

「鍵の設計図？そんなものがあつたの？」

「何でケフェウスのやうはそんなものを持つてたんだ」

ウォーロクはユーローンに聞くと今まで三人の話を聞いていたアオイが言った。

「・・そのFM王だけ？その人がどんな人かは分からぬけど多分持つておきたかつたんじゃない？」いざとゆうときのための力を

「話が逸れました。それで、設計図を盗んだものはFM王に不満を持つFM星人の反逆者だそうです」

「そんなことが起きてたんだ。ケフェウスは大丈夫かな」

スバルはケフェウスを心配しているようだがウォーロックは興味ないと言つ顔をしている。

「それで、設計図を奪つた電波体たちつて何処にいるの？」

「それは・・・実はここ地球に居るらしいんです

「！－ち、地球に来てるの？」

「はい。それを伝えよつにも地球との連絡が取れなので我々が来たのです。」

「我々つてことは、てめえ以外にも誰か来てるのか

ウォーロクは珍しくまじめそうな様子で聞いた。

「私以外に一人。レオ様、ドラゴン様の使者のものが来てています

「そうだったんだ。え、ヒーリングはコーンはアオイちゃんの
ウイザードなの？」

「ええ、実はそうなんです」

スバルはコーンに聞くとコーンは申し訳なによつた様子
で言った。スバルはアオイを見た。

「スバル君どうしたの？」

「アオイちゃんはいいの？ 危険な目に遭うかもしれないんだよ」

「うん、まあそつなるんだろうナビ、私はいいわよ」

スバルは何か言いかけたがアオイに止められた。

「それから、明日のこと電波変換だっけ？ それができる人た
ちに教えておきたいからスバル君集めてくれる？」

「だったら、明日WAXAに行こう。そこなら既さんたちも居る
し」

「分かったわ。明日レオヒヂラーンの使者たちと一緒に連れてく
るから後のことよひじく」

「うん、明日学校が終わったら元気来るね

アオイは「了解。じゃあ、また明日」といつと電波変換をして帰
つていった。スバルはしばらくの間立つたまま考え方をしていたよ

うだが、ウォーロックに「そろそろ帰りないと怒られるぞ」と言わ
れて家に帰ることにした。

スバルは玄関に入ると「ただいま」と言ってリビングに向かつ
た。リビングにはあかねがテレビを見ていた。

「あらスバルお帰り。遅かつたはね何があったの?」

「うん。展望台でアオイちゃんにあつたよ」

「アオイちゃんって小学一年生のときによくいた?」

「用があつたらしこよ」

「うう。お風呂沸いてるわよ」

「うん。分かつた」

スバルはそう言つと自分の部屋に行って荷物を置いた後お風呂に入るために降りていった。

スバルはお風呂から上がり上がると自分の部屋にあるベッドに寝込んだ。
だ。すると、ハンターからウォーロックが出てきた。

「やつから向考えてんだ」

「いや、ケフュウスのことが心配でね。それにしても、FM星人
がまたやって来るなんて」

「そうだな。けど、地球を守るためにだつたら戦うんだろ」

「うん。当たり前だよ」

ウォーロックは「明日遅れるぞ。さっそく寝る」と言った。

「分かった。お休みウォーロック」

スバルは布団に入り眠りについた。

アイスユニローン（後書き）

戦闘描写が短かつたですかね。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

自己紹介

—コダマ小学校—

スバルは昨日ユニコーンに聞いたことを考えていたらしく遅刻ギリギリで学校に来た。教室に入った瞬間ルナに怒られたのはいうまでもない。スバルはみんなに「おはよう」と言つて席に座ると先生が教室に入ってきた。

「（・・・昨日ウォーロックの言つとおりにすぐに寝ればよかつた）」

スバルはまだ眠たそうにしてた。先生が出席を取り終わったようで今日の日程について話していた。

「よし。これで一通りは終わったな。じゃあ、今から昨日こられなかつた転校生を紹介するぞ。入つてくれ。」

先生がそういうとドアからスバルより少し背が高くて頬に傷がある男の子が入ってきた。

「ひさこ竜牙です。これからよろしくお願ひします

「えーと、席はスバルの隣だな」

竜牙は荷物を持って席まで歩いて行くとスバルの前でとまつた。スバルは竜牙に見られていてことに気づいてスバルも竜牙を見た。竜牙は笑顔を作つて「よろしく」と言つて席に座つた。スバルも「よろしく」と言つた。

「よし、ホームルームはこれで終わりだ。授業の準備を忘れずに
な」

先生は教室から出て行った。スバルの周りにルナたちが集まってきた。

「まつたく、昨日注意したばかりじゃないの。何でギリギリで来
るのよ」

「本当ですね。今日なんか遅すぎてスバル君を置いてきましたし
ルナとキザマロが朝のことを話しているとソラが「何かあつた
の?」と聞いてきた。

「うん。ちよつといろいろあってね。あ、そうだみんな今日WA
XAに来れる?」

みんなは行けると言った。ツカサがスバルに聞いてきた。

「何か分かったの?」

「うん。学校が終わったら展望台で待ち合せをしてるんだ

「そうなんだ」

「ん?けど、先生らが俺とツカサ、スバルにソラは昨日授業に
出でないから放課後補習授業があるらしいぞ。」

「え、なにそれ聞いてないよ」

スバルは本当に？と聞くよつて言つたシカサミソラが「そりゃいいよ」と言つた。そこにドアが開き先生が入ってきた。

「なにしている。授業始めるぞ」

みんなは席に着いた。スバルは困ったなという顔をしていた。ウオーロックはハンターからスバルに聞いてきた。

「何だ、遅れたら何かまずいのか」

「あ～うん。遅れたら委員長みたいに説教するときがあるからね」

「スバル。ま、あれだ、がんばりな」

スバルは「連絡の取り方を聞いておけばよかつた」といつていた。

「よし、これで終わりだ。みんな気おつけ帰れよ。それと、スバル、ミソラ、ツカラ、ジャックは補習があるみたいだから終わってから帰れよ。」

あれからスバルはルナ、ゴンタ、キザマロに展望台に行ってアオイに遅れることを伝えてほしいと頼んだが生徒会の仕事があるようで断られた。それ以外にもいろいろ考えたがアイディアが思いつかなかつた。ホームルームが終わつてから、少しだつと先生が入ってきた。

「四人もいるな。じゃ、補習授業を始めるぞ。」

「あの～先生、用事があるので補習は今度ではダメですか？」

「来週からは時間が取れなくなるから無理だな。急用か？」

「いや、急用と言つぽひじやないですか？」

「だつたらいいな。始めるだ。教科書の23ページを・・・」

先生は補習授業を始めた。ミソワ、ジャック、ツカサは授業をしつかり受けていたが、スバルはこのあとのことを考えていって先生の話があまり耳に入つていなかつた。

-約三十分後 -

「よし、これで補習授業は終わりだ。氣おつけて帰れよ」

先生は持つてきたノートや教科書を持つて教室から出て行つた。

「やつと終わつたね」

「長かつた」

「三十分ぐらいしかたつてないけどね

「え、そんなにたつてるの？まづい・・・」

ミソワ、ジャック、ツカサが話している中、スバルあせり始めたと思つと荷物をまとめた。

「スバル君ビリしたの？」

「『んめん。ちょっと展望台に行つてくるね』

スバルは荷物を持つと走つて行つた。ミソラは「ちょっと、スバル君待つてよ」と言ってスバルを追いかけた。ツカサとジャックはどうしたんだろと思いながら荷物を持ってスバルたちを追いかけた。スバルは廊下を走つて角を曲がつたとき誰かとぶつかつた。

「イタタタ・・・

「『』、『めんなさい大丈夫ですか？あ、』

スバルがぶつかつて謝つたときミソラたちが来た。

「大丈夫スバル君？あ、たしか君は緋哉君だつたよね」

ミソラはスバルが大丈夫か聞いた後ぶつかつた方の相手を見て言った。竜牙はスバルとぶつかつたところを手で押えていた。

「・・なんなんだよいきなり飛び出してきて」

「『』めん。緋哉君ちよつと急いでいて、その・・・

緋哉はため息をつくと「べつにいいよ」と言って立ち上がつた。

「とにかくでやけに急いでいたようだけど何があったの？」

「あ、やばい速く行かなきゃ」

スバルは立ち上_がるとまた走り出した。緋哉はミソラたちに「何があつたの・・?」と聞いた。

「ううん、まあ、話は後にしてスバル君を追いかけようよ」

ツカサが言_うとミソラ、ツカサ、ジャックは後を追いかけた。緋哉はまたため息をついて四人の後についていった。その途中に仕事が終わったのかルナたちと合流した。

スバルが学校の校庭に出て校門に向かつた。スバルが校門から出て展望台に向かおうとしたとき声を掛けられた。スバルは声のした方を見るとアオイ達がいた。アオイはものすごい不機嫌な様子だつた。アオイの近くには藍色の髪が肩まであり、寂しそうな目をしている男の子と瞳が赤色で髪は黒の力が強そうな男の子一人がいた。

「何なのよ。学校が終わつたらすぐにWAXAいくつて言つてたのにどれだけ待たされたと思つてるのよ。」

「アオイちゃん」「めん。ちょっと急用ができてそれで・・」

「うるさいーもう、言い訳するところは変わつてないんだね」

スバルは遅れた理由を説明しようとしたが、言い訳扱いされた。スバルは肩を叩かれたようで振り向いて見るとミソラ達がいた。ミソラとルナは不機嫌そうだった。

「ねえ、スバル君子の人たち誰なの?」

「あ、もしかして響ミソラちゃん? わあ、本物だ。あれ? でもな

んで居るの?」

ミソラがスバルに説明を求めたときアオイがミソラの手を取つていた。

「おい海月。先に自己紹介をした方がいいんじゃないのか?俺もまだアレスに事情を聞いただけでよく分からないんだが」

アオイの近くにいる赤い瞳をした男の子が言つた。

「それもそうだね。私は海月アオイ。よろしく」

「俺は赤瀬宵磨

「僕は空照矢」

アオイ、赤い瞳の男の子、藍色の髪をした男の子の順に言つた。

「星河スバルです」

「響ミンラです」

「コダマ小学校生徒会長の白金ルナよ」

「俺は牛島ゴンタだ」

「最小院キザマロです」

「・・・ジャックだ」

「えつと、双葉ツカサです」

「コダマ小学校に転校してきた緋哉竜牙です」

アオイたちが自己紹介したのでスバルたちも順番に自己紹介した。自己紹介が終わると宵磨がスバルに近づいた。

「星河スバルってことは君が英雄のロックマン?」

「あ、えつと、それは・・」

スバルは宵磨のいきなりの質問に対し竜牙を見ながらどう答えようかと考えていた。スバルの視線に気づいたようで竜牙は落ち着いたまま言った。

「安心して。誰にも話さないよ」

「ありがと。うん、僕がロックマンだよ」

スバルは竜牙にお礼を言いつと宵磨の質問に答えた。

「ところで、スバル君ここにいる人全員関係者?」

「うん。一応関係者だよ」

「ねえ、僕らのウイザードも紹介しておいた方がいいんじゃないの?」

黙っていた照矢が言った。

「それもそうだね。 ウィザードオン」

アオイがユーローンを出すと宵磨と照矢もハンターからウィザードを出した。宵磨のハンターからはレオに似た姿のウィザードが、照矢のハンターからは灰色の翼があるウィザードが出てきた。

「ずいぶん懐かしいやつが揃ってるな」

「何だ、牛カルビにカラスもいるのか」

レオに似たウィザードが「うつ」と「ンタビジャック」のハンターからオックスと「ーヴァス」が出てきた。

「ブロロロ・・・今すぐ丸焼きにしてやるつか？」

「ケケケ・・・アレス今すぐバラバラにしてやるつか？」

「何だよオックスに「ーヴァス。 ちょっとしたジョークじゃないか」

「コーヴァスとオックスは「うるせえ」と言ってアレスと呼ばれたウィザードを追いかけた。 ユーローンと灰色のウィザードはその光景を見てため息をついていた。 スバルたちは三体のウィザードの追いかっこを唖然とした状態で見ていた。

「・・・ねえ、ウォーロック。 あの、コーヴァスとオックスが追いかけている電波体つて誰？」

「あいつは、アレス。 FM星にいた頃の知り合いだ。 ああゆう風にしようとからかわれた」

「それと、白い角がある電波体がユニコーン。灰色の翼がある電波体がディムネスよ」

ハープがスバルたちに紹介するとユニークーンとディムネスが挨拶した。

「さて、自己紹介も終わったことだし、あとはWAXAだつけ？いきながら話そうよ」

「それもそうだね」

みんながアオイの意見に賛成するとまだ追いかけっこをしている三体をハンターに戻してスバル達はWAXAに向かった。

自己紹介（後書き）

勉強が忙しくなり投稿がさらに遅れるかも知れません。

感想・アドバイス等よろしくお願いします

動き出すものたち

- ウェーブライナー -

今スバル達はウェーブライナーの中で楽しく話し合っている。ソラとルナはアオイと仲良くなり、宵磨はジャック、ゴンタ、竜牙と氣があつたらしくウィザードのことについて話していた。キザマロは照矢がいがいに物知りだったようでマニア的な話をしていた。オックスとコーヴァスはアレスをまだ追いかけていて他のウィザードはそんな光景をあきれたように見ていた。スバルがみんなを見ているとツカサが言った

「聞いたよ。今回の事件について」

「え、誰から?..」

「ジーハーから。ワイザードたちのほうが理解が早いと思つたみたいで、ゴーコーンたちが話してくれたみたいだよ」

「やうなんだ」

「ところでも。スバル君つてアオイちゃんと知り合いたいだつたんだけど、どうゆう関係?」

「じつゆつて、一年生の友達だつたんだよ」

「へへえ、そうだつたんだ」

スバルとツカサはWAXAにつくまで雑談などをしていた。

- WAXA -

WAXAにはいるとスバルはサテラポリスの人々に「暁さんに会いたいんですけどどこにいますか」と聞き教えてくれた部屋に向かった。部屋に入ると中は真っ暗で誰かが寝ているようだつた。ジャックが電気をつけると机でうつぶせになつて寝ていた暁が目を覚ました。スバルたちが暁の顔をみるとほとんどみんながヒイタ。

「あ、暁さん。どうしたんですか？まるでオバケですよ」

「・・・何だお前らか。しかたないだらう一日続けて寝ずに仕事をしていたんだ。ついさっき終わつて寝ていたのに起こしやがつて。それに、オバケはひどいだろブツブツ・・」

ミソラが言つたことに不満を持つたのか一人でいろいろ言い始めた。アオイはスバルに近づいて聞いた。

「ねえ、この人がサテラポリスのエース暁さん？」

「うん。なんだか、仕事が大変だつたみたいだね」

すると暁はさつさと寝たいのか「用はなんだ」とぶつきらぼうに聞いてきた。

「えーと、FM星人の数名がこの地球に来ている」と云つてなんですけど」

スバルが言うと暁は眠気が消えたのか真剣な顔つきになつた。

「ＦＭ星人が地球に？本当なのか」

「はい」

「分かった。ちょっと待つてる。」

暁はハンターを取り出してヨイリー博士と長官を呼んだ。

「今、ヨイリー博士と長官を呼んだから少し待っててくれ。ところでスバル。」

「何ですか？」

「なんだか俺が知らないやつがいるようなんだが誰だ？」

暁が言つとアオイ、宵磨、照矢の順に自己紹介した。

「でこつちが、僕らの学校に転校してきた・・・」

「緋哉竜牙だろ。」

「えつ、暁さん知つてたんですか？」

「ああ、前に少しな」

暁がそう言つたのでスバルたちが竜牙を見ると「いろいろあってね・・・」と言つた。そこに、ヨイリー博士と長官が入ってきた。

「暁くん何があつたのかい？」

「あら、みんないりつしゃい。」

「アイリー博士、長官にじんにちは

スバル達が挨拶すると暁はアオイ、宵磨、照矢、竜牙を紹介した。

「さて、スバル分かつたことを教えてくれ」

「はい」

スバルはまずアオイたちのウェザード達がAMせいの三賢者の使者であること。FM星でアンドロメダの鍵の設計図が盗まれたこと。地球との連絡が取れなくなつたためユニコーンたちが地球にきたこと。設計図を盗んだFM星人が地球に来ていることを話した。

説明し終わると長官は「そうか・・・」といつて今後のことを考えていた。すると暁がユニコーンたちに質問した。

「その設計図なんだが、アンドロメダの鍵を作るのに最低どのくらい掛かる?」

「材料はあまり見ることがない物ですから集めるだけで多分一ヶ月ちょっとはかかるでしょう」

「それに、エネルギーを吸収したりするために膨大なデーターが必要ですからさらに掛かりますね」

「材料、膨大なデーターを集めていたらは一週間ちょっとぐらいですね。組み立ては簡単と聞いていますから。」

ディムネス、ユニコーン、アレスの順に答えた。長官が言った。

「つまり、相手の人数は分からぬが、材料・データーを集めるだけで一ヶ月掛かり、鍵を組み立てるのは一週間で出来るといつことだな」

ユニコーンたちは「はい」と答えた。

「それに、ユニコーンちゃんたちの話を聞くとFM星人たちは一週間ぐらい前に地球に来たってことね」

ヨイリー博士が言つとユニコーンたちは否定した。

「いえ、FM星人が来たのは遅くて二日前です。鍵の設計図が盗まれたとレオ様に聞いてすぐに我々も地球に向かつたんですから、一週間前なんてことはありません。」

「だが、FM星と連絡が取れなくなつたのは一週間前なんだ」

暁の言つた事実に「ディムネスは『そんな、バカな』といった。スバルは『どうゆうこと?』と言つた。

ユニコーン、ディムネス、アレスは地球との連絡が取れなくなつたのは一日前ぐらい前なのに、WAXAはFM星との連絡が取れなくなつたのは一週間前というのだ。FM星から地球に来るのに五日も掛かる事はない。しかも今はノイズウェーブもほとんどの電波体が使うことができ、ノイズウェーブを使えば一日ぐらいあればFM星から地球に行くことが出来る。

「・・お前らは地球に来るのにノイズウェーブを使ったよな？」

「はい。それを使えば地球にはすぐここに来ると聞いていたので」

暁の質問にアレスが答えた。

「ノイズウェーブになにがあるな。長官、ここんど調査班をだしていいですか？」

「いいだろ。」

長官は暁のノイズウェーブ調査を許可した。

「あ、それと。スバルたちには悪いんだがまた力を貸してくれないか？」

「つてことは、遊撃隊を復活させるんですか？」

ミソラが手を上げて聞いた。

「ああ、F M星でのことを聞くとW A X Aだけだったら無理だと思つんだ。今考えているメンバーを言ひなさい。」

暁はスバル、ミソラ、ゴンタ、ジャック、ツカサ、アオイ、宵磨、照矢を順番に呼んでいった。

「今呼んだ中で無理だとこいつやつはいるか？」

「あの、僕戦いとかそういうの得意じゃないんですけど・・」

暁の問いに照矢はおもむろに答えた。

「得意じゃなくていいさ。戦いは経験だからな。他に質問とかないか？」

スバル達は何も言わずみんな覚悟を決めたような顔つきでいた。

「よし、サテラポリス遊撃隊再結成。さっき言ったメンバーの中に俺とティアも入るからな。今日はありがとう。氣をつけて帰れよ」

暁はそういうとなぜかジャックも連れて部屋から出て行った。ジャックは「おい、何で俺も連れて行くんだよ」と叫んでいた。

「そういえば、ヨイリー博士ウイルスの大量発生のときにあった装置の解析どうでしたか？」

「それがまだなのよ。がんばってはいるんだけどね。」

「装置つて何ですか？」

スバルとヨイリー博士が話していると、話の中に出でてきた装置についてアオイが聞いてきた。スバルは昨日あつたことを説明した。説明すると育磨が言った。

「そんなことがあつたのか。それって地球上に来たFM星人と関係があるのか？」

「それはまだ分からぬわね」

「ヨイリー博士。私の友達に装置・データーの解析とかについて

詳しいと言つたが、そうゆうことが得意な人がいますけど、よかつたら紹介しましようか？」

「おい、海月。まさかあいつか？」

「あたりまえでしょ。彼意外誰がいるのよ。」

「まあ、確かにあそこまで行けば得意といつより天才だな」

「その子名前は何でいつの？」

「奏助。そうすけ雪島奏助です」

「奏助ちゃんね。」など紹介してね。それじゃあ、私はまだ仕事があるから行くわね。」

ヨイリー博士はアオイと宵磨との話が終わるとヨイリー博士は部屋から出て行つた。長官はスバルたちを出入り口までおくると「それじゃあみんな、気をつけて帰るんだよ」といつた。

スバルたちがWAXAからすると照矢は「僕、用事があるから先に帰るね」と言って電波変換して帰つて行つた。すると、宵磨も「俺もこれから仕事があるから先に帰るな」といつて照矢と同じで電波変換をして帰つていつた。スバル達はウェーブライナーまで歩きながら話をしていた。

「ねえ、アオイちゃんつて宵磨君と知り合いなの？」

「うん。同じ学校だからね」

「そりいえば、アオイちゃんはどこに住んでるんですか？」

ツカラの質問に答えたあとキザマロが聞いてきた。

「えっと、私と宵磨君はリストイータウン。それと、照矢君はたしかフレイグタウンだったかな？」

「リストイータウンってたしか、今度おれたちが社会見学で行くところだつたよな委嘱だよ。」

「え、社会見学？」

「・・・スバル君。まさか、先生の話聞いてなかつたの？」

ルナは社会見学のこととを聞いていなかつたスバルを今にも怒り出しそうな顔で見た。

「あ、えっと、事件のことを考えていて聞いてなかつたというか、なんと言つか・・・」

「まったく。明後日の土曜日、リストイータウンにある『ループ・インフォメーション』を見学することになつたのよ」

「今日の放課後にその打ち合わせがあつたんですよ」

ルナが説明するとキザマロが言ひた。

「え、明後日なの？私たちも授業で『ループ・インフォメーション』を土曜日に見学すことになつてるの」

「じゃあ、一緒に見学することになるのかな？」

「そうだといいね」

スバル達はそれからウェーブライナーに乗り、家に帰るまで楽しそうに話していた。

- ? ? ? -

外は満月が町を照らしている。その光が窓から差し込んでいた。ここは廃墟となつた工場らしく古くなつてボロボロの機械が沢山ある。機械の上に突然影が現れた。影は一つではなく五つあり全部電波体の様だ。沈黙が支配している中、一人の電波体が口を開いた。

「反逆者が揃つのも久し振りだな。まさか、一週間もあつたのにパートナーが見つかっていませんなんてことはないよな？」

「連絡したでしょ。それにしてもサイレンント、あなたに合つ周波数を持つ人間がいたなんて意外だつたわ。」

「スウィフトさんよ。俺をからかつてんのか？」

最初に話したのはサイレンントと呼ばれているらしく殺氣のこもつた低い声で言つた。一方サイレンントをからかつたらしい電波体はスウィフトといつりしへ少し声が高じようだ。

「二人とも話はそれぐらいにして速く話を終わらせましょ？」

「速く終わらせたい理由はパートナーが心配だからか？えりく地球^{つち}の生活に慣れているようだな」

サイレントは冷たく言い放った。

「・・ところで僕らを集めた理由は何ですか？リーダー

名前の分からぬ電波体が会話を聞いていた電波体に向かっていつた。

「そのことなんだがな。AM星の三賢者の使者のやつらがロックマン達に接触した」

「へ～え、意外だね。てっきりFM王が来ると想つたのに

スワイフトが残念そavisに言つてサイレントが言つた。

「使者とかいうやつが来たってことねやつと暴れることが出来るんだな。さてどこの人間どもを血祭りにしてやろうつかな？」

「サイレント、悪いがお前の出番は後だ

「うう、せっかく楽しくなってきたと思つたのに

リーダーと呼ばれる電波体が言つてサイレントは短剣を仕舞つた。

「やつらはこの土曜日にリストタウンにあるアドミストとかいつところに行くようだ。リミスお前が行つてくれないか？」

「・・僕ですか。まあいいですけど、パートナーがなんて言つた

な

「その点は何とかしる。目的はやつらの力量を量ることとそこにある『ループインフォメイション』の情報処理データーなどを奪つてくれ」

「・・・」解。何とかしてみます

「今日の話しがこにはじこまでだ。みんな帰つていいぞ」

リーダーの電波体がいつともつかこには影は一つもなかつた。

動き出すもののたち（後書き）

暁の顔は想像にお任せします

社会見学

・「オダマタウン」

今日は土曜日。スバル達は社会見学でリストイータウンに行くため学校の校庭に集まっていた。クラスの人気が集まってる中ルナはなぜか今にも怒りそうな態度を取っていた。

「遅い、遅い、遅い・・・スバル君、ゴンタはまだ来ないの?」

「う、うん。今キザマロが呼びに行っているよ。」

どうやら、ゴンタが寝坊して、キザマロが起きて行っているみたいだ。

「それにしても遅いねゴンタ君。もうすぐ出発なの!」

ミソラは校庭を見渡しながら言った。ツカサとジャックはクラスのしおりを作るのや先生たちの荷物を運ぶのを手伝っているようだ。スバルたちが話していると遠くからキザマロが走ってくるのが見えた。近くにはゴンタもいた。

「あ、ルナちゃん一人とも来たみたいだよ

ミソラがルナに言つとキザマロとゴンタが息を切りながらスバルたちの近くに来た。

「はあはあ・・・い、委員長。ゴンタ君を連れてきましたよ」

「・・俺もう歩けねえぜ」

するとゴンタは地面に座った。

「ゴンター、あなたもいつになつたら遅刻ぐせが直るのよ」

「す、すまねえぜ・・」

ルナが気の遠くなるような説教を始めた。ルナの説教が始まつて少しすると先生たちがクラスのみんなを集めて出席をとり始めた。

「みんないるか？遅刻しているやつはないか～？」

「あれ？先生、緋哉君がいないようなんですか？」

先生が出席を取つているとスバルが竜牙が見あたらないことに気づいた。

「そりいえば竜牙の姿が見えないな。誰か知つてる人はいないか？」

みんなに聞くと校門の方からこっちに向かつて走つてくる人が見えた。

「はあはあ・・すみません・・遅れました・・」

「おい、緋哉遅いぞ。寝坊でもしたか？」

「はあ、まあ、そんな感じです」

緋哉は先生に理由を言つとスバルの近くに来た。

「おはよう。スバル君にみんな」

「おはよう緋哉君。珍しいね寝坊するなんて」

「うん。昨日こりこりあつて夜更かしあやつたんだよね」

「次から送れずに来なさいよ」

竜牙はルナの注意に軽く受け答えすると先生によばられたりしく先生のところに向かつた。

各クラスの出席確認が終わつたみたいで生徒たちはバスの中に入つていつた。

バスに乗ると先生が言った席に座つた。スバルの隣はミソラで、ツカサは緋哉の隣、キザマロはゴンタの、ジャックはルナの隣に座つた。クラスのみんなが席に座るとバスが動き出した。

「よし、リストイータウンまで時間があるからみんな自由にしていいぞ」

「ねえ、スバル君。リストイータウンひどいんだといふなんだろうね」

「うん、本で少し見たことがある程度だからよく分からぬいよ

「そのことなら僕にお任せを」

スバルとミソラが話していると前の席にいたキザマロがスバルたちのほうを向いてリストイータウンについて説明し始めた。

「リストイータウンは世界で有名な企業が沢山あるところです。僕らの持っているハンターも作られているそうですよ。そんな大企業がある中でアドミストという会社にループインフォメイションがあるんです。それから・・・」

「キ、キザマロ。リストイータウンについてだいたい分かったからもういいよ」

スバルはキザマロが暴走し始める前に話を止めた。キザマロは「そうですか」と言ってゴンタと話を始めた。

「・・・スバル君もああなることがあるよね」

「え、そうなの」

「うん。星について話し始めるとなるよ

「そうかな・・」

スバルとミソラはリストイータウンにつくまで楽しそうに話し始めた。

「リストイータウン」

リストイータウンにはいると周りは大きな会社が沢山あり多くの人が行き来していた。バスが駐車場にとまるときスバルたちがバスか

ら降りてきた。クラスごとに並び先生たちの指示を待つた。前には先生たちの近くにアドミストの従業員の人たちがいて何か話しているようだった。話が終わると先生が言った。

「みんな忘れ物はしていないな。これからしおりに書いてある通り各班に分かれてアドミストの人たちに中を案内してもらいます。自分たちが調べることをしつかり聞いたりするんだぞ。時間になつたらここに集合分かつたな?」

みんなは「はーい」と言うと班に分かれて案内してくれるアドミストの人たちに挨拶をし、中に入つていった。

「僕は西村さとし。僕が君たちの案内役であつてるよね?」

「はい。私は白金ルナと申します」

ルナにつづきスバル達も自己紹介をした。

「すまないね。本当はもう一人いればいいんだけど今はとても忙しくてね。それに、君たちと同じ団体が来ててね。迷子にならないように気をつけよ」

西村はスバルたちに言うとアドミストの中に入つていったのでスバルたちはあとについて行つた。

-アドミスト-

「ここが情報処理室。ここで、一ホン全国から送られてくる情報や映像などのデータを整理するところです」

西村に案内された部屋はコンピュータが百台近くあり従業員の人たちが画面と向き合ってキーボードを叩いていた。中には他にもスバルたちと同じ生徒たちもいた。

「うわ～、機械が沢山ある」

「人も沢山いるね」

「今中に入つたら仕事の邪魔になるんじゃない?」

「そう言われてみればそうよな。西村さん他のどこのを案内してもらいますか」

「分かつた。じゃあ、いよいよまたあとで次いこつか」

それからスバル達は西村に他の部屋を案内してもらつた。廊下を歩いているとセキュリティーがとても厳しそうなところについた。

「このやきには午後に君たちが見学するループインフォメーションがあるんだ。」

「へえ～、この先にあるんですね」

紺哉が言うとキザマロが「このセキュリティーシステムについて聞いた。西村が説明していると放送がなつた。

「あ、もうこんな時間かそろそろ昼食こじよつか。食堂室に案内するね。」

食堂室に移動しているときツカサが質問した。

「あの、西村さん。忙しいのにどうして一校同時に見学させてくれたんですか？」

「違う学校の人たちとも交流してもらいたくてね。なかなかうまくいかないんだけどね」

「そなんですか」

「ああ、ついたよ。ここが食堂室。ついたときに貰った券を使つてね」

スバルたちが中に入ると他の人も昼食を食べに来ていて沢山の人がいた。

「うわ、多すぎでしょ。」

「だったら、ジャック、ゴンタ。あなたたち席を取つておいて

「委員長そりやないぜ」

「何で俺も！？しかも俺らの分は？」

「だったら僕が貰つてきてあげるよ

ジャックとゴンタはツカサに券を渡すとしぶしぶ席を取りに言った。

スバルたちが昼食を貰うとジャックたちのところに行つた。席にはジャックたちのほかにも三人いた。

「あ、スバル君」

「アオイちゃん。それに雪磨君」

席にはアオイと雪磨、それとスバルより少し背の低い男の子がいた。

「えつと、そっちの人は？」

「ああ、前に言つたでしょ。雪島奏助君」

アオイは隣にいた男の子を紹介した。

「えつと、雪島奏助です。呼び方は自由でこよ

「僕は星河スバル。よろしくね雪島君」

それから、ミンラたちも来ると雪島と挨拶をした。それから、スバル達は昼食を食べ始めた。

「ところで・・・アオイちゃんたちは・・・じいじ何をしてたの？」

「ソラちゃん、食べながら話すのやめた方がいいよ

「はは、確かに。私たちのはじの一階にある「ノンポーター」を使って調べものをしてたの」

「へ～え、一階で調べ物が出来るんだ」

みんなは昼食を食べ終わるまで楽しく雑談をした。しばしあぐらかすと放送がかかった。

「「ダマ小学校の話を午後からの見学は一時半からです。集合場所は・・」

「あ、もう少し時間があるね」

「だったら、みんなでいろいろ見て回らない」

ツカサの意見に全員賛成して、食器などを持ち込むと食堂[室]から出て行った。

ループインフォメイション

あれから集合時間が来たのでアオイ達と別れて集合場所に向かった。クラスのみんなが集まると社長の西村さんが午後の案内を始めた。

「では、みなさん今から『アドミスト』が誇るループインフォメイションの部屋に案内します。」

西村は服のポケットからカードキーを出すと近くにあつた機械に通した。すると、ドアが音を立てて開くと目の前には円柱の形をした巨大な機械ループインフォメイションあつた。ループインフォメイションの周りには画面が沢山出ていて字がびっしりと書かれているもあれば映像がながれているのもあつた。

「このループインフォメイションは一秒に数百個のデータを処理し保存しています。ここで保存したデータはサテラポリスの捜査や裁判などで使われています。」

クラスのみんなが周りを見て回り始めたのでスバルたちも見て回つた。

「写真や本で見たのよりもやっぱり実物の方が大きいね」

「ツカサ君の言うとおりだね。やっぱ迫力が違うね」

「緋哉君、ツカサ君。話もいいけどちゃんと調べなさいよ」

ルナが一人が話しているのを注意すると話しを止めてしおりやノ

一トにメモを取り始めた。

「ん？ おこキザマロ。 これって何だ？」

ゴンタは近くにあつたボタンを見ながら言った。

「え、 ああ、 それは多分・・・」

キザマロが言いかけたとき他にクラスの人がゴンタにぶつかった。ぶつかった衝撃でゴンタがボタンを押した。すると警報が鳴り壁だつたところが開き中から警備口ボットが出てきた。警備口ボットの手からは電気が流れていて中にいた生徒たちを取り囲んだ。

「シンニコウシャハッケン。 シンニコウシャハッケン。 ハイジョ
シマス」

「な、 なんだこれ

「俺ら侵入者だつて。 それに排除されるみたいだね」

「緋戦君、 のんき言わないでください」

「ちよつといゴンタなにやつてるのよ。」

「いじゆうのは普通起こした人が何とかするよね？」

「ツカサのやうとおりだな。 おいゴンタ。 お前が何とかしない

「無理に決まってるだろーーー！」

「ゴンタは半分なきそうに叫んだ。ロボットが少しずつ近づいてきて今にも襲い掛かるうとしたときロボットに流れていった電流が消えて何事もなかつたようにもといた場所に戻つていった。

「みんな！」めんね。止めるのが少し遅れちゃつたね。大丈夫だつた？」

「は、はい。なんだつたんですか、今の・・・」

「ああ、ここにあるデータを引き出すのには暗号が必要でね。この中にあるデータは使い方を誤れば兵器に変わるからね。さつきのはこれとむらときのための防犯装置」

西村はループインフォメーションを指しながら説明した。するとルナが手を上げて質問した。

「あの、その暗号は誰が知ってるんですか？」

「こここの社長だけだよ。さつきも書つたとおり、こここのデータを使えば簡単に兵器に変わるからね。もちろん外部に漏れないようセキュリティーもしつかりしてるよ。」

西村はそう言つと「さて、そろそろ時間だからみんな出で」とみんなに声を掛けた。みんなが移動しているとき紺哉がループインフォメーションを見たまま動いていないのをスバルがきずいた。

「どうしたの紺哉君。みんな移動してるよ」

「え？・・あ、『めん、』『めん。ちゅうと』こここのデータが気になつてね」

「えいこへ。」

「やつれ、社長さんが言つたでしょ。『Iにあらデータは兵器に変わる』って」

「うん。それがどうかしたの？」

「おかしくないか？何でそんな物を一箇所にまとめておいてあるんだ？普通はばらばらにしたりしるんじゃないのか？」

「確かにそうだね。けど、ループインフオメイションが出来たのって、サテラポリスの捜査や裁判、過去に起きた犯罪とかを保存するためじゃないの？本にはそう書いてあつたけど」

「他にもあつたら？何かをするためにお偉いさんたちが一ホン全国のデータを集めてるとしたら？」

「まさか。そんな」とはなこと思つよ・・・

スバルは小さく笑いながら言つた。

「・・・うだよね。考えすぎだな

緋哉とスバルが話しているとソラが戻ってきた。

「一人ともなにしてゐる。ドア閉めるりじよ」

「あ、じめん。すぐに行へよ」

スバルは答えるとそのまま出口のドアに向かった。緋哉は少し田の前にあるループインフォメイションを見るとスバルたちのあとを追つた。

今は見学のときお世話になつた社員の人たちにお礼をいつている。お礼を言つるのはもちろん生徒会長であるルナだ。終わると西村が少し話すと、みんなは「今日はありがとうございました」と言つた。

スバルたちがバスに向かつて移動していくとき「アオイたちとあつた。

「お前らも今帰りか？」

「うん。来たときに乗つたバスのどこのむかうといふなの。ところで、雪島君の姿が見えないんだけど」

ミソラは辺りを見ながら言つた。

「ああ、あいつなりトイレだつてさ。中でこらと黙つぜ」

「ねえ、ついでだからこのままWAXAに行かない？」

「うーん。でも、これから学校に帰つてやることあるしね

「おい、その八人なにやつてるんだ。おいていくぞ」

「すみません。今行き・・・」

ルナが先生に言つてこるとアドミニストから警報が鳴り響いた。

スバル達はアドミストの方角を見ると従業員らしき人たちが急いで戻っていくのが見えた。

「・・・何かあったみたいだね」

「どうする？状況を聞きに行く？それともそのまま帰る？」

「緋哉君、そんなこと聞かなくても分かるでしょ」

ルナがあきれたように言った。

「行ってみよう。」

「だね」

「そうだろ？と思つたぜ」

スバルを先頭にアドミストに向かつた。

「おいおい、先生たちにはなにもいわずかよ。・・・せんせーい、アドミストがどうなつてゐるか気になるんで見てきます」

緋哉は少し先の方にいる先生に向かつて叫ぶとスバルたちのあとを追つて行つた。

-アドミスト-

社長の西村に状況を聞くため司令室に向かつた。司令室は見学のときに案内されたのですぐに行くことが出来た。途中、従業員たち

にぶつかつたりしてはぐれたときや途中立ち入り禁止の札が合った
が無視したり色々あつたがなんとか全員司令室に行くことが出来た。

「西村さん！」

「ん？ 君たちは確か・・・何でここにいる。ここは立ち入り禁止
だつたはずだぞ」

「それより、何があつたんですか？」

「アオイちゃんもいたのか。ループインフォメイションのなかに
大量のウイルスが発生したんだ。今コンピュータに組み込んである
ウイルス撃退用のプログラムを使ってテリートしているんだけどな。
・

「だけど？」

「数が減らないんだよ。テリートし始めて五分はたつているのに
ウイルスの数が減らないんだ」

「ウイルスの数が減らないって・・・まさか！」

「多分、スバル君の考えている通りだと思つよ

「行ってみるしかねえな」

「・・西村さんループインフォメイションのアクセスキーを貸し
てもらえませんか？」

「何を言つてるんだ。アオイちゃん、君だつて分かつてははずだ。

アクセスキーは渡せない

「でも、このままじゃ・・・」

ミソラはアオイの頼みを断つた西村に言いかけたとき放送がなった。誰かがかけているわけではなく自動でかかつたようだ。

「シャッターが降ります。付近にいる人は気をつけてください。シャッターが降ります。・・・」

放送がかかると今まで鳴っていた警報とは別のが鳴り響いた。すると、司令室の出入りのシャッターが降りた。

「え、ちよっと。閉じ込められた?」

「おい、どうなってる?」

ルナが叫ぶと西村は従業員の一人に聞いた。

「はい。ウイルスのせいで防犯用の装置が壊れたみたいです。それで、警備ロボ等が制御できません。さらに、ウイルスディリートの装置もそろそろ限界です」

「西村さん・・・」

考え込んでいた西村にアオイが言った。

「・・・渡したところでおたちになにが出来るんだ」

「僕達はサテラポリス遊撃隊です」

スバルが言うと西村はスバルの顔を見た。

「僕達が何とかしてみます。だから、アクセスキーを貸してください」

「・・君たちの名前を聞いたときに氣になつてはいたんだけど。
分かった。これがアクセスキーだ」

西村はスバルにアクセスキーを渡すと今度はみんなを順番に見た。

「君達も遊撃隊の一員なのかい？」

「私とキザマロ、それと紺哉君は違いますけどね」

「アオイちゃんきみもか・・」

西村は心配そうな顔でアオイを見た。アオイは笑顔で言った。

「気にしなくて大丈夫ですよ。それより、行こう。手遅れになる

「そうだね。電波変換」

スバル達は光に包まれるとそなばにはいなかつた。

メール

「ループインフォメイションの電腦」

「この電腦の中に入るとき、ループインフォメイションがある部屋を見ると警備ロボットたちが部屋から出て行くところを見たがウイルスを『テリー』するのが先と判断して電腦の中に入った。

「うーわ。いるね~」

「・・・異常だろ?」

宵磨が電波変換した姿は黄色のアーマーをつけた赤色の身体をしていて、名前はアレスレオパルド。手には大岩を簡単に碎くような両手剣を片手で持っていた。

「ウォーロック。装置がありそうなところ分からない?」

「分からん。ウイルスの数が多くすぎだ」

「装置のありそうなところが分かつたぞ」

「え、本当?」

アオイが宵磨に聞くとアレスが出てきた。

「ここから少し先に曲がり角があります。そここのここの
ウイルスとは違う周波数を感じます。やっぱり、このゆうつ器用なこ
とはお前には出来ないよな?ウォーロックちゃん」

「・・・てめえ、後で覚えてろよ」

ウォーロックは殺氣を放ちながら言った。スバル達は気にせずにウイルスを倒しながら先に進んだ。

「氷華連月」

「炎滅斬」

アオイは鉾を器用に振り、宵磨は炎を纏つた両手剣を振りウイルスを一気にテリートした。

「あの二人やるな」

「僕たちも負けてられないね」

スバルたちも一人に負けじとウイルスを倒していった。

「そこにいるウイルスの大群の中にあると思います」

「だつてさ。バーニングタワー」

宵磨は両手剣を振るとウイルス達の周りから三本の炎の柱が立った。宵磨の攻撃に続くようにスバルたちもウイルスの大群に向かつて攻撃した。煙がはれると、攻撃したところにはバリアに包まれた装置があつた。

「・・・なんか面倒な機能が追加されてやがるな」

「だね」

ジャックの言つたことにツカサが同意した。宵磨はいきなり装置に向かつて走り出すと、剣を装置に向かつて振つた。剣が装置に当たりとしたとき鈍い音がしたと思うと宵磨が弾き飛ばされた。宵磨は空中で体制を立て直してうまく着地した。

「おい、宵磨。さつきから無茶しすぎだ」

「悪いなジャック。けど、こつちは経験が少ないもんでね。それに、俺は手間のかかるやり方は嫌いなんだよね」

宵磨はそう言つと再び装置に切りかかつたがさつきと同じように弾き飛ばされた。

今度はスバルたちも攻撃したがバリアを壊すことは出来なかつた。

スバルたちが装置を壊そと攻撃をしている間さらに増えたウイルスは、ウィザードたちが何とかしていた。

「なかなか壊れないね、このバリアー」

「このままだと、まずいね」

スバルは同じウイルスを同時に攻撃できるシンクロフックを使ってウイルスを倒しているとハンターが鳴つた。

「こんなとこ・・・もしもし」

「スバル君、聞こえる?」

かけてきたのは司令室にいたルナで、とてもあわてていた。

「司令室で使つてたウイルスティリート用のプログラムが全部壊れ
たみたいな」

ルナは早口でスバルたちに今の状況が分かるように説明した。どうやら、西村達がウイルスをデリートするのに使つてた装置が壊れて守れなくなつたらしい。すると、アオイが叫んだ。

「もう一。いちも大変なのに。雪島君がいれば何とかなるかもし
れないの。どこにいるのよ。」

アオイが叫ぶと西村が聞いてきた。

「雪島の子も来ているのか？」

「あのやういへ。まさか、外にいるんじゃないだろうな」

「あの子が着てるなら。一いちで探して・見・・ザア・・る・
ザアアア・・」

西村が何か伝えよつとしたとき雑音が出てきて声が聞こえなくな
つた。

「西村さん！なんていつたんですかー？」

「回線が切られたみたいだね。外との連絡が取れなくなつてゐるよ

「一ツカサ君、後ろー。」

スバルがツカサに攻撃しようとしているウイルスに気がついた。ツカサはエレキソードを出すとウイルスを真っ二つに切った。

「大丈夫だよ」

「EJの程度のやついらに負けるわけないだろ」

ヒカルが言うとウイルスをテリートしていくた。

「・・ねえ。EJに装置があることは、これを置いた人がいることだよね？」

ミソラは言つと南磨がぶつきりほんに答えた。

「そうに決まってるだろ。機械が勝手に歩いてくるわけないだろ。それに、ここにセキュリティーが厳しいこと知ってるだろ」

「ひて」とは、セキュリティーにきずかねずに入ってきたひてこと？

「もうだと思つけど、それがどうかしたの？ミソラちゃん

「いや、ただね。西村さんが言つてたじやない。ループインフォメイションにウイルスが入つてきたって」

「・・電波体が入つてきたとは言つてなかつたね」

「うん。ちょっとそれが気になつてね。それに、こんなに広い電脳なのにウイルスもここにしかいないみたいだし」

スバルはミソラの言つたことを聞くと紹哉と話していたことが頭に入ってきた。

「……まさか。」

するとスバルはウイルスの大群の中から抜け出すと奥へ行こうとした。するどジャックが叫んだ。

「おい、スバル。どこに行く気だ」

「ちよ、ちよっと。スバル君」

スバルはそう言つと奥のほうへ進んでいった。アオイもウイルスの大群の中から抜け出しへスバルのあとを追つて行つた。
残つたミソラたちは、ともかく手分けをしてウイルスを倒していった。

「ちよつと、待つてよスバル君。どうしたの？」

「アオイちゃん。何で來たの」

「それより、いつたいどうしたの？ウイルスを倒さないといけないのに突然、奥に行つてくるとか言つて」

「そのことは行きながら説明するから。速く行こう」

スバルはそう言つと奥に向かつていった。アオイは「何なのよ」といながら追いかけた。

スバルたちが奥に進んでいると電波で出来た扉が道をふさいでいた。

「ウオーロック開けること出来る?」

「無理だな。暗号が分かつてたら何とかなりそうだがな」

「アオイちゃん、IJNの暗号知ってる?」

「知ってるわけないでしょ。で、なに。スバル君はこの先にあのやつかいな装置を置いた電波体がいるって思つてるの?」

スバルの考えはこうだった。ループインフォメイションのセキュリティーに気づかれずに装置を置いた電波体がそのまま帰るわけがない、ウイルスはおとりで目的はここデータだと考えているのだ。

「多分ね。それよりこの扉を何とかしないと」

すると、外との連絡が取れないのにハンターが鳴った。スバルは何で?と思しながらハンターをとつた。どうやらメールが送られてきたみたいだ。スバルは送られてきたメールを見ると電波で出来た扉に近づき暗号を打つた。

「スバル君。暗号が分からぬのに不用意にやつたら・・・」

アオイがスバルを止めようとしたとき「アンゴウカクーン。カイ

「ジョシマス」と言つ音声が聞こえたと思うと扉は消えていた。ウオーロックとアオイが畠然としているとスバルが言った。

「差出人不明のメールが来たんだけど、その中に暗号のことが書かれてたんだけど」

「どうやら、さつき送られてきたメールに暗号が書かれてらしい。解除した本人でもまさか本当に出来るとは思ってなかつたみたいだ。

「ともかく扉を開けることが出来たんですから速く行きましょう。ウィルスの方も大変そうだと思いますから」

「うん。行こう。」

やつと一人目のFM星人との戦闘です。
それではどうぞ。

扉を解除してスバルたちが奥に進むと巨大な装置があつた。装置の近くにはエアディスプレイを操作している黒いアーマを着けた黄色の電波体がいた。

「ビンゴだつたな。スバル」

ウォーロックがスバルに言つと電波体はスバルたちの方を向いた。

「・・・君たちは」

「私たちはサテラポリス遊撃隊です。そこで何をしてるんですか」

「ここには暗号式の扉があつたはずだけど」

「扉なら解除したよ。それより答えて。君はここで何をしているの？」

電波体はスバルの質問に答えずエアディスプレイを操作し始めた。アオイは再び電波体に聞こうとしたときウォーロックがさえぎつて言った。

「・・・おいでこよ。確か名前はリミスだつたよな」

電波体の近くに白のアーマを着けた黄色のウイザードが出てきた。

「名前を覚えてくれていたなんて光榮だね」

「悪いな。あいにく、周波数で判断したもんでは。名前は覚えてなかつぜ」

「あれ？ 周波数は消してたはずなんだけど。ま、いつか。こっちは僕のパートナーの・・・」

「ここの姿はリミスライティング。そういうえば、君たちの名前は？」

「私はアイスユニコーン」

「僕はロックマン。コミスって言つたよね。アンドロメダの設計図を盗んだのって・・・」

スバルが言つ前にリミスが言つた。

「僕達だよ。それがどうかした？」

「どうかした？ じゃねえだらうが！」

ウォーロックはリミスに向かつて怒鳴つた。

「・・・戦うのは嫌なんだけどな」

リミスライティングはそういうながら長剣を取り出すとスバルたちのほうに向き直つた。

「――ウーブバトル！ ライド・オン！」

スバルがリミストライティングと戦っているころ、ウイルスと戦っているミンラたちはもう、ギリギリの状態だった。

「・・・ もう限界」

「わすがに疲れた」

ミンラと直磨、ゴンタは今にも倒れそうな様子で戦っていた。その三人をカバーするように残りが戦っていた。

「くそ！スバルのやつ。ビリに行きやがった」

「・・・ 戦ってるな。」の周波数は・・コニスか

ジャックがボヤいているヒミツが言った。

「ジヒミー誰なの？そのリミスって」

ツカラサはウイルスを倒しながら言った。

「リミスは電気を操れでな。実力はまあまあだつたな。でも、面倒なところに現れたな」

「どうゆうことなんだ」

ジヒミーサンダーでウイルスを消し飛ばした後で、ヒカルが聞いた。

「簡単にゆうべ。」のセキュリティーは全部あいつの手の内だ。もう使い物にならない

「セキュリティって防御用のも？」

「ああ。あのウイルスを出してくる装置のバリアは多分ここのだな」

「じゃあ何か。スバルがそのリミスとかゆつやつを何とかしないといこのウイルスどもは消えてくれないってか」

「そうゆうことだな」

「くそー！それまで戦わないといけないのか」

「もう俺、無理」

「おい、ゴンタ。もう少しがんばりやがれ・・・! しまった」

ジャックは不意をつかれたらしく防御に遅れた。ウイルスが攻撃したときレーザーがジャックの目の前を通り雨が降った。

「オメガレーザー」

「コッドレイン」

白を中心とした電波体と杖を持った電波体の攻撃で半分近くのウイルスがテリートされた。

「大丈夫？」

「遅れてしまなかつたな」

「遅すぎだ。姉ちゃん、暁」

そこにいたのは、暁が電波変換した姿のアシッドヒースとクインティアが電波変換したクインヴアルゴがいた。

「お前らは少し休んでて良いぞ。行くぞティア」

シドウはウイルスたちのほうを見ながら言った。

シドウたちが加勢に来る少し前、ロミスとの戦闘が始まった。

「電磁砲」

ロミスは周囲から電気を帯びた弾丸を出した。

「一人とも気をつけろください。弾丸と弾丸の間には電流が流れています。触れるだけでマヒします」

「電流なんて見えないよ」

「基本的に電流は弾丸との間にしか流れていらないはずです。弾丸を線で結んだときの図形の中を通りなければいいはずです」

「手合わせるるのは初めてだが面倒な技だな

「来るよ」

リミスは剣を振ると弾丸がスバルたちに向かつてきた。スバルたちは左右に分かれて弾丸をかわした。

「・・・無駄だよ」

リミスライトニングが言うとかわした弾丸がスバルたちの方に向かつてきた。

「！追尾能力もついていたの？」

「打ち落とすしかないね。フリーズボール」

「プラチナメテオ」

メテオと氷の弾丸が電磁砲とぶつかり煙がたつた。煙がはれる前にリミスライトニングが斬りかかつてきた。スバルはエドギリブレードを出し受け止めた。

「悪いね。英雄だから手加減なんてするきないんでね。それに、一対一だからね」

リミスライトニングは鉢で攻撃しようとしていたアオイの方を見ると電磁砲を三角形が出来るように自分の前に出した。アオイは攻撃をしたが電流に防がれた。スバル達はリミスライトニングから距離を取つた。

「あの技、防御にも使えるんだね」

リミスライトニングは一人を順番に見ると何を思ったのか、構えを解くと小さな装置を出した。

「・・これはここに来る途中にあつた『リビルト』の防御プログラムの制御装置だ。これを壊さないと破壊はできない」

「リビルト・・・あのウイルスを再構築する装置のことへ。」

「そういえば、知らないんだっけ？」

「何でそんなことを教えてくれるの？」

「・・・・・」

リミスライティングは答えずスバルたちに斬りかかった。

それからミソラたちのところにシドウたちが援軍として駆けつくるまで斬つたり防御の繰り返しだった。

「だーあ、くそ、しぶといな

「こつちは一人がかりなのに、なかなか倒せないね」

「これじゃあ、時間だけがすぎていくだけだ。ウォーロック、ノイズはどうくらいたまつてる?」

「あの、もらつたPGMを使つんだな。ノイズ率は・・・・・」

「?..どひしたのウォーロック」

「ノイズがたまつてねえ」

「ビリヒ」

「ねえ、まことにあの制御装置を何とかしようよ」

リミスライティングが出した制御装置は巨大な装置とは真逆のところに浮かんでいた。

「・・・そうだね。けど、ビリヒよ」

「私とユーローンでコリミスライティングをなんとかしてみるから、その間にスバル君は制御装置をなんとかして」

アオイは言つとスバルの答えを聞かずコリミスライティングに向かつた。

「どうしたスバル。速くあの装置をぶつ壊すぞ」

「うん。そうだね。ソードファイター」

アオイとユーローンがリミスライティングと戦つてゐるのを見ると剣を出すと制御装置に斬りかかった。以外にも制御装置は音を立ててあつさつ壊れた。

「簡単に壊れたね」

「壊れたな」

スバルたちの近くに制御装置の欠片が落ちたとき、アオイがスバルの近くに飛ばされたらしく倒れた。

「アオイちゃん！」

「おい、スバル。気を抜くな」

スバルがアオイのそばに駆け寄るとウォーロックはリミスライティングを見ながら言った。

「・・・・・」

リミスライティングは静かに剣をスバルに向けた。そのとき、リミスライティングの方から音が鳴るとエアディスプレイが出た。リミスライティングはエアディスプレイを操り始めた。

「・・・」

「ハローってまさか！」

「ちんたらやつてられないな」

スバルが構えるとリミスライティングが切りかかつってきた。ソードファイターを出しカウンターを狙っているとスバルとリミスライティングの間にレーザーが放たれた。二人とも距離を取りレーザーが放たれた方を見た。そこにはアシッドエース、ハープノートたちがいた。

「・・増援か。案外速いな」

「みんな、それに暁さん」

「スバル君、アオイちゃん大丈夫?」

「遅れですかなかつたな」

「よう。久し振りだな。リミス」

「ジエミーがハンターから出てきてコミスに言つた。

「ジエミーか。。。あのお前がそつちについたのか」

「話の途中で悪いがお前の目的はなんだ?」

「ジエミーとリミスが話していると曉がリミスに聞いた。

「田的つか。。。だいたいは想像つくでしょ

「やつぱり」のデータだつたんだ。。。

「それにしても、一、二、三。。。十人か。さすがにそれに比べてこつちは俺とコミスだけ」

「ひどこと言つかなんと言つか。。。なんでこんなにいるんだよー」

「コミスライターングはこの状況ビリするか考えているがリミスはいろいろ文句を言つていた。

「悪いな。恨まないでくれよ

「はあ~、どうじよっかな

暁はリミスライティングにてつとコロスライティングはため息を
つくと剣を構えた。

「いくぞー！」

感想等よろしくお願ひします。

逃走と謎

暁はスバルとアオイから相手の戦い方を聞き、みんなに指示を出すとロックオンソードでリミスライトニングとの距離を一気につめ斬りかかった。リミスライトニングは電磁砲を使い防いだ。するとジャックはリミスライトニングが暁に気を取られている間に後ろにまわった。

「あんな面倒な装置を作りやがって。くらいな、フェザーシックル」

ジャックの攻撃が当たりそうなとき、リミスが電磁砲で作ったバリアに防がれた。

「バーニングタワー」

「...リミス」

宵磨は剣を振りリミスライトニングの足元から炎の柱がでた。暁とジャックはリミスライトニングから距離をとることでかわし、リミスライトニングは炎が出ていない方に跳んだ。

「まだ！」

宵磨はツカサ達に向かつて叫んだ。

「「ジ...ミ...サンダー」」

「ショックノートフォルテッシモ」

ツカサとヒカル、ミソラの攻撃がリミスライティングに向かつていった。

「つち

リミスライティングは電磁砲でバリアを作ったが防ぎきれずに吹き飛ばされた。リミスライティングは空中で体制を立て直すとスバルたちのほうを向いた。

「くらいやがれ。アンガーパンチ」

「後ろか！」

ゴンタがリミスライティングに殴りかかった。リミスライティングは防御が遅れてまともにあたった。リミスライティングが立ち上がるときには頭上に雨雲が浮かんでいた。

「コットレイン

今度はリミスがバリアをはり攻撃を防いだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？」

リミスライティングは立ち上がりながらいった。

暁たちはスバルとアオイの周りに集まつた。

「・・おかしいとおもわないか?」

「僕もね、思ってます」

「ねえ、スバル君何がおかしいの?」

暁の言つたことに答えたスバルにアオイが聞いてきた。後ろには宵磨も「何がおかしいんだ」と言いたげな様子だった。

「やつさ、私たちが攻撃したとき一度も反撃に出てなかつたじゃない」

「そういうえば、やつさから、防御しかしてないね」

「単に守るしか出来ないだけじゃない」

「そりだといいんだがな。ともかく速く終わらせよう。スバル、アオイ、いけるか?」

「はー」

「もう大丈夫です」

スバルとアオイそういう構えた。

「よし、一氣に行くぞ」

スバルはエドギリブレードを出し、アオイは鉾を構えた。

「・・コミス。一回このあたりをふつ飛ばしていいかな?」

「うーん、いいんじゃない。数多いし」

リミスライトニングは剣から電気を出し、スバルたちの方を向くと一気に距離を詰めた。スバルもリミスライトニングに攻撃しようとエドギリブレードで斬りかかった。スバルとリミスライトニングの剣が振り下ろされるとき、空気を切る音が鳴つたと思うとスバルとリミスライトニングの間に向かって数本の槍が飛んできた。その槍はスバル達の目の前に来ると光を放ち爆発した。

「スバル君!」

ミソラが叫ぶと煙の中からスバルとリミスライトニングが飛び出した。

「大丈夫かスバル?」

「はい、なんとか。それより今のは」

スバルがリミスライトニングのほうを見るとリミスライトニングは巨大な装置の方を見上げていた。

「どうしてここにいるんだ?スワイフト」

コミスが言うと装置の上から電波体ががリミスライトニングのそばに降りてきた。降りてきた電波体は緑色のロープを着ていて両手には白色の手袋をはめていた。隣には緑色の身体をしたウイザードが出ていた。

「その前に話題があるでしょ」

「・・まあ、礼は後で言つよ。それよりなんでいるの?」

「リーダーがなんだか君たちが大変そうだから手伝つてやつてくれって言われてきたの」

「・・ねえ、ウォーロック。あの、スワイフトって呼ばれてる電波体もFM星人?」

「ああ。また面倒なやつが来たな」

スバルとウォーロックが聞こえないように話をしたが、まだスワイフトはミスと話していた。

「それよりダメでしょ。まだ、データーのコピーもどつてないだろ?」。あなたの技はあたりを滅茶苦茶にしかねないんだから

リミスは「はいはい」といてスワイフトの話をまったく聞いていないうだつた。リミスライトニングはその横でエアディスプレイを操作していた。

「シドウ、どうするの?」

「話を聞くかぎりスワイフトってやつも仲間みたいだな。あの二人とも拘束するぞ」

シドウが言つとコミスライトニングがロープを着た電波体に言つた。

「えつと、確かモウメントスワイフトだったよね。」ペー終わったから逃げるの手伝ってくれない？」

「分かつたわ。そこから動かないでね」

スワイフトはそう言いつつリミスマライト一シングとモウメントスワイフトの足元に魔方陣が現れた。

「…まずいわ。逃げるつもりよ」

ハープの言葉に一番に反応して行動したのは暁だった。暁はロックオンソードで切りかかろうとしたが、リミスの電磁砲に邪魔をされた。魔方陣から光がするとスワイフトは「じゃあねー」と言いながら消えた。

「ハープ今のは？」

「スワイフトの転送技よ。たぶん、追いつけないわね」

「つち、逃がしたか」

「これからどうするんですか、暁さん？」

「ここはサテラポリスに任せてみんなは俺と一緒にWAXAに来てくれ」

暁がみんなに言つとツカサが暁に聞いた。

「あの暁さん。照矢君はどうしたんですか？」

「あ、やつこえばそうだ。あこつせびうしたんですか？」

宵磨も今気がついたようだった。

「照矢は家庭の事情でこられないとらしいから、WAXAに来てくれって言つてある。まあ、それより速く行くぞ」

「ちよつと待つてくださいよ。私たち学校の授業で来てるんですけど」

「俺がすでに話つてあるからその心配はないぞ」

「・・・職権乱用？」

「わあ～。違つんじゃないかな？」

アオイとミソラが曉に聞こえなによつて話していた。

「あ、それで。外にいるルナ達もWAXAに来るよつて話つてあるから連絡は取らなくていいぞ」

「私は少し遅れてこきますね」

「何か用事があるのかアオイ？」

「雪島君を探しに行きたいんですナビ」

アオイが言つと宵磨が「メールで伝えればいいじゃないか」と言った。アオイはハンターを出すとメールを打ち始めた。

「これでよしつと」

「外には報道人が沢山いるよつだから」のまま行くぞ」

暁が言つとスバル達は電腦から出て行つた。

-WAXA-

スバルたちがWAXAに来ると部屋にはヨイリー博士と照矢がいた。照矢はスバルたちを見つけるとアドミストにいけなかつたことを謝つた。スバル達は「用事があつたから仕方ないよ」と言うことで許すと、アドミストでの出来事を照矢に話した。だいたいの説明が終わると暁がルナたちを連れてきた。

「は～あ、酷い目にあつたわ」

ため息をつきながら入つてきたのはルナだった。

「何があつたの？」

「実はですね。スバル君たちと連絡が取れなくなつた後、閉まつてたドアが開いたんですよ」

「そしたら、いきなり警備ロボが入つてきて中にいた人全員が外に出されちゃつてね」

「外に出たら出たで報道の人たちに質問ぜめにあつたり、本当酷い目にあつたわ」

キザマロ、竜牙、ルナの順に説明した。ルナだけではなく一人とも疲れた様子だった。

「よし。雪島はまだ来てないみたいだが先に今日あったことについて話を聞かせてもらおうか」

暁が言うとスバル達は椅子に座りミスライティングとの戦闘、ウイルスを再構築する装置のことをリビルトと呼んでいること、データを盗まれたあげく逃げられたことを話した。

「スバル君やみんながいたのにはさり逃げられちゃったの？」

「はい。その通りです」

ルナ言葉が効いたのか顔を下に向けて言った。

「ところでウォーロックちゃんたちに聞きたいんだけど、そのリミスとスワイフトについて教えてくれない？」

すると、ハンターからウォーロックとハープ、ジエミーが出てきた。

「リミスはたしかレチクル座のFM星人でジエミーと互角ぐらいいの力を持つてたよな」

「俺とあいつはFM王の右腕がどっちかで戦つたことがあるぜ」

「スワイフトはエリダヌス座のFM星人で転送技が得意だったわ」

ウォーロックは「俺たちが知ってるのはこのくらいだ」と言うと

思い出したようにスバルが言った。

「そりゃ、リミライトニングとの戦闘中ノイズがぜんぜん
たまつてなかつたんですね」

「そんなはずはないだろウイルスをあんなに倒したんだぞ。たま
らない方がおかしいぞ」

スバルは「でも・・」と言いかけたが言葉を飲み込んだ。

戦闘中にノイズが異様なぐらい溜まつてなかつたこと、リミスラ
イトニングたちは盗んだ膨大なデータを何に使うのか。スバルた
ちがさまざまことを考えている中、沈黙が部屋を支配した。

逃走と謎（後書き）

ツリスとスウェイフトはもう少し有名な星座のほうがよかったです
かね？

感想、アドバイスよろしくお願いします。

理由

静かになつた部屋ではスバルたちが考へに没頭していた。

「・・・あのさあ。なんなのこの空気」

スバルたちは声のした方を見ると雪島がいた。

「あれ、雪島君いつの間にいたの?」

雪島がいつ来たのか誰も気づかなかつたようで全員驚いていた。
アオイは椅子から立ち上がり雪島に近づいた。

「どうしたの、遅かつたね?」

「僕は学校があつたんだよ。時間は掛かるよ」

「君が雪島君だね。俺はサテラポリスの暁シドウだ」

雪島は「雪島宗助です・・・」と話したくないようになんか簡単に言つた。

「ところでも。今来たばかりで何も知らないんだけど」

「あ、えっと。全部話していいかな?」

アオイはスバルたちに確認を取ると雪島に電波変換が出来る「」といふことを説明した。

「へへえ。君がロックマンだったんだ。事情は分かつたけどそれ

だけでここに呼んだ分けないよね」

雪島はスバルに向かつて関心したように言つと暁たちに聞いた。

「実はFM星人たちがリビルトつて言つ装置を作つてゐみたいでな。その装置の解析を手伝つてほしんだ」

「・・なんで僕なんですか?ここに担当の人たちがいるでしょう」

「実はね、アドミストで盗まれたデータ回収を優先することになつて、人手がたりなくなつてゐるよ」

ヨイリー博士が申し訳なさそうに言つとツカサが言つた。

「え、 そうなんですか」

「だから、人為不足で解析が進まないから君に手伝つてもらいたいんだ。アオイと宵磨の話を聞いたところいと思つんだが、どうだ?やつてくれるか?」

暁は雪島の顔色をうかがいながら話した。だが、雪島はさつきと変わらず話したくないような様子だった。

「・・それつてサテラポリスのためつてことですか?」

「一応そうなるが

「なら手伝いません」

暁が答えると即答した。アオイ以外はまさか断るとは思わなかつ

たよつで驚いていた。

「おい、雪島なんで断るんだよ。なんでサテラポリスに協力しないんだよ」

「それに、その言い方だとサテラポリスには協力したくないって言つてるもんだぞ」

「やつはさすだけど」

宵磨のあとにジャックが言つと雪島は冷たく言つた。すると見ていたスバルが口を開いた。

「ねえ、なんでサテラポリスに協力してくれないの？」

スバルが言つと雪島の表情が変わり何も言わなくなつた。雪島の印象は悪い方にしか向いてない。しかも暁やヨイリー博士は話すのが初めてなのでいい印象を持つことは出来ないようだ。誰もしゃべらなくなり嫌な空気が辺りを包んだ。

「ねえ、やつぱりダメなの？」

「やつぱりして、どうゆうじ？」

雪島がアオイに聞くとスバルが言つた。

「ねえ、だつたら僕たちを手伝つてくれない？ サテラポリスのためじやなくて僕たちのために」

スバルの言葉に続くようにアオイも言つた。

「そうだよ。私たちのために力を貸してくれない?」

アオイは真直ぐ雪島を見ながら言った。雪島はため息をつくと「信用はあるなよ」と言つてヨイリー博士の方を向いた。

「あの、その装置のあるところに案内してくれませんか?」

「え、分かつたわ」

ヨイリー博士と雪島は部屋を出て行きドアが閉まるのを見るヒルナが言った。

「何なのよ彼! 腹が立つわ」

「まったくですね。協力も断つてなにを考えてるんですかね」

「スバルもなんで協力してくれるようになに言つたんだ?」

「なんでだろ。サテラポリスに協力してほしつて言つたとき誰も信じてないような顔をしてたから」

「似てるからね。スバル君に」

「どうゆうこと?..」

アオイが言つたことが気になつたらしくミソラが聞いた。アオイは自分が言つたことを後悔したように話そつか話すまいか考えた。アオイは「」とは雪島君には言わないでね」と念を押しと話し始めた。

「実は彼の父親ね三年前に突然いなくなつたの。それで、学校でいじめを受けてね。一時学校に来なくなつたときもあつたわね」

「そりなの？」

スバルは宵磨の方を見る宵磨は「そんなこともあつたな」と言つていた。

「雪島くんつてスバル君に似てるね。とにかく、雪島君が学校に来るようになしたのつてアオイちゃんたち?」

ツカサはスバルと似た境遇の雪島に興味を持つたようだ。

「あの時が一番苦労したな」

「うん。探すのにも苦労したよね」

宵磨とアオイは雪島を学校に来させようとしたときのことを思い出していくよつて話した。

「とにかく雪島君はどうしてサテラポリスを嫌つてるんですか?」

キザマロはアオイに聞くとアオイは表情を暗くした。

「あれ、もしかしてお前知ってるのか?あいつが断つた理由」

アオイは表情を暗くしたままつづいた。

「実はね。雪島君、父親がいなくなつた後、警察に探してもひづ

ように頼みに言つたらしいのよ。でも、「そんなことに取り合つている暇はないんだ」や「少しの間いなくなつただけだろ。すぐに戻つてくるわ」って言われて相手にされなかつたみたいなの」「

「それがサテラポリスを嫌う理由と何か関係あるのか」

暁も嫌われている理由が知りたいよつて言つた。

「それから、一週間ぐらいあと警察じゅらちが明かないから、サテラポリスに行つたのそしたら」

「・・・そこでも相手にされなかつたか」

「うん。そんなことは警察に頼めばいいだろつて言われたらしいよ。それでも、何度もサテラポリスに行つたけど同じことの繰り返しだったのよ。だから、民間人を守るはずの組織が人一人も探してくれず正義を語つてるのが協力を断つた理由だと思うよ」

アオイの説明が終わるとみんな押し黙つていた。雪島のサテラポリスを嫌う理由を知らなかつたにしろ言い過ぎたと反省しているみたいだつた。そんな中でミソラがアオイに聞いた。

「ねえ、雪島君の母親は？」

「・・死んだらしいよ。事故死だつたみたい。雪島君の父親がいなくなつたのは母親の葬儀が終わつた二日目ぐらい経つた後らしいよ。捨てられたよつに突然に。だからよけいにね」

「母親が死んだすぐ後に父親が行方不明。捜索願いを出したが完全無視。サテラポリスを嫌いになるわけだね。後警察も」

「アオイが雪島の母親のこと話をした後、ツカサが静かに言った。

「アオイは何で雪島のこと知ってるんだ」

「雪島君を学校に来させるときに西村さん聞いたの。だから、このことは言わないでね」

アオイが念を押すよつこいつとやひこいつが部屋を包んだ。
アオイは「え、え」とあちこち見た。

「えっと、暗くなつたから気分変えて、事件や雪島君のこと以外
の話しない?」

宵磨は「別の話つてな・・・」とぼやいていた。すると//ソラセ「あ、そうだった」と言つてポケットからチケットを出すとみんな
に一枚ずつ配つた。

「これは?」

「来週ある私のライブのチケットだよ」

「あ、そつか。来週だつたんだよね」

「ソラセ、アオイちゃん後これ

//ソラセはアオイにまたチケットを渡した。

「え、私も持つてるけど」

「違うよ。雪島君に渡しておいて。予備を持ってきてよかつた」

ミソラは笑顔で言つてアオイは「ありがとう」と言つた。

「さて、今日はもう解散だ。来てくれてありがとうございます。気をつけ
て帰れよ」

暁はやうとスバル達は「よしなり」と言つて部屋から出で
行つた。

「ジャック。お前は下にいるクインティアを手伝ってくれ」

ジャックは「またかよ」と言つと部屋から出て行つた。暁はジャ
ックが出て行くのを見ると大きなため息をつくと椅子に座つた。ハ
ンターからアシッドが出てきた。

「どうしたんですか？疲れがたまつていましたか？」

アシッドは暁に体調のことと聞くと暁は椅子にもたれかかると力
をなくしたように言つた。

「違う。いろいろあってな

「やつきのアオイさんのは話ですか？」

アシッドはやつきのアオイが話していた雪島の過去のことを語
った。暁は何も言わずただアシッドの言つことを聞いていた。

「・・・世の中はシドウ、あなたやスバルさんのような人ばかりで

はないことを知ってるはずですよ。このサテラポリスで働いている人たちも

「どうやら暁は捜索願いを無視してきた自分たちサテラポリスのことを考えていいようだつた。

「そんなことは分かつてゐる。スバルのような正義感を持つてゐる者ばかりが揃つてゐるのは奇跡だと思つてゐるよ。だがな・・」

「今、考えていても仕方ないですよ。それより今は地球に来ているFM星人のことを考えましょう」

「それもそうだな」

暁は何かを振り切つたような顔になつて言つた。すると部屋のドアが開き長官が入つてきた。長官の近くには別の人気がいた。

「・・暁君。君に話しがあるんだが」

夜。倉庫のような暗いところにFM星人五体が集まつていた。

「で、データーは取つてきたが尻尾を巻いて逃げてきたんだな」

サイレントがリミスを馬鹿にするように笑いながら言つた。リミスはサイレントを無視して黙つていた。すると、スワイフトが言った。

「なに戦つていないやつがいろいろ言つてるの」

「まあ、結果オーライってことでいいんじゃないの？それで、次は誰が行くの？」

「その前にリミスお前のパートナーにやつてもうこたいことがあるんだが・・」

リーダがリミスに言つとリミスは「やつてもういたいこと？」と言つとリーダは笑つていた。

理由（後書き）

「おやつたらみなれるのよ」で上野に書かんでしょうか？

感想等よろしくお願ひします

似たもの回十

「//スライトーングとの戦闘から一週間後。スバル達はオクダマスタジオに来ていた。

「それにしても、ここも久し振りだね」

「そうよね。前は事件があつて大変だったけど今回はないでしょうね」

「あ、みんなこいつら、こいつら」

スバルたちが話してくると//ソラがいつもその服装で近づいてきた。

「あれ、みんな来てるかと思ったけど、緋哉君と宵磨君、雪島君は？」

「緋哉君と宵磨君は用事があつたみたいで、ライブ開始までには来るつて。雪島君はリビルトの解析があるらしいけどすぐこ来るらしいよ」

ツカサが三人がい理由を//ソラに説明した。//ソラは「そつか」と言った。

「そうこいや、宵磨のやつ用事があるとき多くねえか？」

「そういうわけでみればそうですね。何かあるんでしょうか？」

ジャックが独り言のようになつとキザマロが同意するように言つ

た。

「そういうえばまだ言つてなかつたっけ」

「？アオイちゃん何か知つてるの」

ミソラがアオイに言つとスバルたちに話し始めた。

「宵磨くんね、今、家の家計が苦しいようなの。それで、少しでも楽にわせようとしてバイトしてくるの」

「バ、バイト…？」

「そんなこと僕たちに言つていいの？」

ツカサがアオイに言つと笑顔で言つた。

「スバル君たちなら言わないでしょ」

「そうなんだ。じゃあ、私、練習があるからみんなは館内を見学していく」

ミソラはスバルたちに言つとアオイは「私もついていい？」
とミソラに聞くと許可をもらひミソラと一緒にオクダマスタジオの中に入つていった。

「私たちも中に入りましょ」

ルナが先頭でスバルたちも中に入つていった。

アオイはミソラに向かって樂屋に入ると中にある沢山の衣装などに夢中になった。

「うわ～。こんな衣装があるんだ。あ、このも可愛くな～。
こののもこいな」

ミソラは衣装に着替え鏡の前で髪を整えていた。アオイはミソラの近くにある椅子に座つてミソラを見ていた。

「ねえ、ミソラがしてスバル君のことが好きなの？」

アオイがミソラに爆弾発言をすると一瞬沈黙が部屋を包んだ。ミソラは顔を真っ赤にしながら髪を整えていた。

「ミソラちゃん。髪がグシャグシャになってるよ」

ミソラはグシャグシャになつた髪を整えようとするとアオイがミソラのクシを持ち髪を整え始めた。ミソラはまだ顔が真っ赤だった。

「（アオイちゃんといふことに平気で聞こえてきたつか～）」

「でも、どうなの？」

「……え、えっと」

ミソラが途惑つてこととノックが聞こえた。

「ミソラちゃん。それから、練習始めるからよろしくへへ」

ミソラが返事をするとアオイは残念そうにため息をついた。

「あ～あ。いいところだったのに。ま、がんばってね」

ミソラは静かに頷いた。

ミソラとアオイが話しているとき、スバル達は・・・

「ミソラちゃんの最後のライブか」

「何だ?えらく残念そっだが?」

スバルは浦方に会い、ルナや照矢は案内をしてもうつたが、スバルは屋上に行けるようになったことを浦方に聞き屋上に向かつていった。

「うん。ミソラちゃんはまた始めるって言つてたけど、なんかね・
・」

「まあ、ミソラのやつが決めたことだからな。仕方ないんじやねえか?」

ウォーロックは続けて「俺は暇だから寝るわ。何かあつたら起こしてくれ」と言い残すとハンターの中に戻つていった。スバルは屋上に出ると手すりに寄りかかり空を見上げた。しばらくは静かに空を見ていたが屋上のドアが開き、ドアのそばには雪島がいた。

「スバル君。どうしてここにいるの?」

「あれ、雪島君。来るの速かつたんだね」

「うん。それにしてもこのウイザードって結構仕事熱心だね」

「？何かあったの？」

雪島は苦笑しながら話し始めた。

「いや実は、アオイのやつライブに来ないかってメールが来たと思つたら、チケットや入館証が送られてきてないし、そのおかげで足止めをされて」

「じ、自分で誘つといて肝心な物を渡してないって」

スバルも苦笑しながら言つた。雪島も手すりに寄りかかると町の方を見た。

「あ、あの雪島君・・・」

「どうしたのスバル君？」

雪島が聞いてきてもスバルはなかなか話を切り出せなかつた。

「雪島君のお父さんって・・・」

雪島は静かにスバルをじつと見た。雪島はため息をつくとまた町の方を見た。

「アオイからだる。西村さんが話したつて言つてたからね。一人

とも口が軽いと云つた。それがどうかした?」

「いや、ただ僕と似てるなと思つて」

雪島は何も言わずただ静かにスバルの話を聞いていた。

「アオイちゃんに聞いたと思つけど、僕の父さんも行方不明になつたときがあつてね。それで絆を作るのが怖くなつて学校に行かなくなつたんだ。でも、委員長やみんなが僕をまた学校に行けるようにしてくれたんだ」

「・・簡単に僕達は似たもの同士つてことかな?」

「あ分ね。だからさ、その、何も出来ないと思つたビ僕も雪島君の父さんを探すのを手伝つよ」

スバルが話し終わると雪島はドアの方へ歩き出した。ドアを開けると雪島は言つた。

「ありがと。気持ちだけ受け取つとくよ。君と話が出来てよかつた」

雪島はスバルに伝えるとドアを閉めた。が、すぐに開いた。

「あ、そうさつ。伝えることが一つ。リビルトの解析結果が終わつたからヨイリー博士の方からメールが届いているはずだよ」

スバルはハンターを見ると確かにヨイリー博士からメールが来ていた。

「（・・・ウォーロック、メールの管理ぐらこしてよ）」

「それとアオイちゃんとミソラちゃんからの伝言。歌の練習がもうすぐ始まるから早く来てだって。僕は先にいってるね」

雪島は「練習は特設ステージであるらしいよ」と付け足して言つと館内に降りていった。

「え、ちよ、ちよっと。先にそりやつことを教えてよ」

スバルはそりやつと屋上から降りていった。

スバルが特設ステージに来ると練習が始まつていて浦方や監督をはじめルナや竜牙達全員がいた。

「スバル君、遅いわよ」

「『めん。あれ、竜牙いつ来たの?』

「つこさつき。それにしても、忘れてちゃいけないだろ」

スバルは謝ると「謝るならミソラちゃんに謝れば?」と言われた。スバルはステージの方を見るとスバルが来たことに気がついたようで笑顔で歌つているミソラがいた。

「それにしても、本当に歌上手だね。ミソラちゃんは、何だか嫌なことを全部忘るような気がするよ」

「照矢君もそう思つ?」

「ソーラの歌を聞いていると照矢がスバルに言った。

「まえにあつたここのライブは『ティーラー』って組織が妨害したけどうまくいったんでしょ？」

「うん。けど、今度はそんなことさせなこと思ひよ」

「そうだね」

スバルは元気に歌っているソーラを見ながら言つた。
スタジオにいる誰もが何もなくつましくと思つていた。潜む陰
に気づかずに。

「響ソーラのライブね〜」

オクダマスタジオの並木道。黒い服にジーパンを穿いた青年が興
味のなさそうにチケットを見ていた。近くにはさそりに似た紫色の
ウイザードがいた。ウイザードは低い声でコーヴァスのように笑つ
ていた。

「で、そのロックマンってのはソーラのビートなんだ。サイレント
？」

サイレント。青年はウイザードのことをやつ呼んだ。サイレント
はまだ笑いながら言つた。

「話を聞く限り、餓鬼のようだぜ。確か名前は星河スバルだった

かな

青年は「ふ～ん」と期待はずれのよつすで言つとチケットを捨てた。すると、ニヤツと笑つて静かに言つた。その声はさつきと別人のような冷たく低い声で言つた。

「子どもが。ハハハ、楽しめるだろ？」

「地球のやつらが、英雄だと言つてるんだ、楽しめるだろ？ 血祭りにあげてやろ？ ゼ西杉」

西杉と呼ばれた青年はポケットから鍵の形をしたものを取り出すと言つた。

「それにしてもだ。ライブで沢山人が来ると殺さずお前らが好きな負の心とかゆうのを集めるとは面倒なこったな」

鍵の形をしたものを作りと館内へ歩いていった。

似たもの回し（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

- オクダマスタジオ 特設ステージ -

「よし。上出来だ。本番もこの調子でがんばっててくれよ」

監督はミソラにそう呟つと館内へ戻つて行つた。ミソラは練習で疲れたのかその場に座つた。そんなミソラに浦方が飲み物やタオルを持つていった。

「お疲れさん。うまくいってたよ。本番もがんばってな」

「はい。ありがとうございます」

ミソラはお礼を言ひと受け取つた。スバルたちもミソラの方へ行つた。

「ミソラはお礼を言ひと受け取つた。スバルたちもミソラの方へ行つた。

「わちがミソラちやんだぜ」

キザマロとゴンタは絶賛しまくつていた。スバルは浦方に挨拶した。

「お久し振りです。浦方さん」

「あ、スバルじゃないか。久し振りだな」

「スバル君」

浦方と話しているとミソラが呼んだ。

「どうだった？うまくいった？」

「うん。上手だったよ」

スバルに褒められたミソラはとてもうれしそうな顔になつた。

「よし、ミソラは本番までまだあるから衣装を着替えてきていいぜ」

浦方に返事すると楽屋に戻つていった。

「じゃあ、スバル。俺も仕事に戻るからライブまで中についていからな」

浦方はそう言い残すと館内へ入つていった。

「なあ、飲み物を買いに行かねえか？」

「もう。練習なのにあんなに声を出すからよ」

ルナは「コンタが言つたことに呆れながらいた。照矢と竜牙の二人は中を見て周るようで一緒に入つていった。ルナ、キザマロ、ゴンタとなぜかジャックは飲み物を買いに行くのに自動販売機を探しに言つた。アオイは雪島をつれてどこかに行つた。

「さて、外にでも行こうかな」

スバルは外の並木道に向かつた。

スバルが外に出ると近くから怒鳴り声が聞こえた。

「てめえー今なんていいやがった！？もういつぺん行つてみるよ」
声が聞こえた方を見るといかにも不良っぽい男の人が青年に突っ掛かつっていた。青年は平然とした表情のまま怒鳴つてきた男に言った。

「当たつただけで金を払えとか言ひ馬鹿に渡す金はないね。さつさと済えたら？」

「言わせておけば！」

男が殴りかかるうとしたとき青年の表情が一変した。スバルはその表情を見たとき恐怖した。相手が誰であろうと容赦なしに叩き潰す。相手が動かなくなるまで。そんな、冷酷な目つきに変わった。そのとき、警備ウィザードが来た。

「あなた達何をしてるんですか！？今すぐに止めなさい」

男は殴るのを止め舌打ちするどどこかに行つてしまつた。スバルは青年の方を見るとあれ？と思つた。

「（田つきが元に戻つてる？）

スバルは目を見ただけで恐怖した青年田つきが一瞬で変わつたことに驚いているようだ。警備ウィザードは事情を青年に聞こうとし

たとき無視して怒鳴つた男と同じくオクダマスタジオから出て行つた。

「（あの人何者だつたんだろう・・・）」

スバルが考えていると後ろから名前を呼ばれた。振りむくといつものピンクの服を着たミソラがいた。

「何か騒ぎがあつたみたいだけど、大丈夫だつた？」

「うん。大丈夫だつたよ」

「よかつた。じゃあさ、ライブが始まるまでさ一緒にいろいろな所見て周らない？少し工事したらしくて前來たときなかつた場所があるからさ」

「いいけど」

「じゃ、行こう」

ミソラはスバルの手を握ると駆け出した。スバルは「ちょ、ちょ」と言いながら引きずられるように行つた。

「裏道」

オクダマスタジオで騒ぎを起した男が仲間らしい一人の男の近くに行つた。

「おう、遅かったな。菓子でも買いに行くとか言っておいて何があつたのか？」

男の一人はタバコを吸いながら言った。

「どこのやううはしらねえが一回ぶん殴つてやううかと思つたけどよ、邪魔がはいつちまつて殴れなかつたぜ」

「だつたら、今から俺たちもついていつボコボコにして金でも脅し取るか？」

もう一人の男はゲームをやめて面白そうな顔で言った。

「お、面白こと言うね。そいつの泣き顔で謝罪している姿を見るのは面白そうだな」

三人は笑いながら「違ひねえ」と言った。そんな笑い声が響く裏道で誰かの歩く音がこだました。三人の前には話しに出てきた青年が立っていた。

「お、いっしつから出向く必要がなくなつたな」

三人の不良は笑いながら青年の周りを囲んだ。

「いこなら、田撃者なし。止められる必要なし」

青年はそういうと不良の一人が言った。

「おい、兄ちゃん。こんなところに何のよつかね？もしかして俺たちにお金をくれるとかかな？」

すると不良全員が笑い出した。青年の表情はスバルが恐怖を覚えた表情になつて静かに楽しそうと言つた。

「せめて、時間まではがんばって足搔いてくれよ」

言つのが早いか青年は笑つていた不良一人に殴りかかった。青年のストレートは腹にクリティカルヒットしたらしく笑うのをやめてうずくまつた。残りの不良たちは声を上げると青年に襲い掛かつた。青年は冷酷に楽しそうな目で殴りかかった。

-オクダマスタジオ-

「あ、ミソラちゃん。そろそろ準備に行つたほうがいいんじゃないの？」

スバルとミソラはオクダマスタジオの屋上にいた。スバルは言うとミソラは残念そうな顔になつたが、「絶対、最後まで見てよ」と言つと楽屋に走つていつた。スバルは「もちろんだよ」と楽屋に向かつて走つていくミソラに行つた。ドアが閉まるとスバルは夕日の沈む町の方を見た。しばらくすると寝ていたウォーロックがハンタ一から出てきた。

「あーよく寝たぜ」

「おはようオーロック」

「お、もうこんな時間なのか？スバルそろそろ下に降りてツカサ

たちと合流した方がいいんじゃないのか?」

入り口の方を見るとライブを見に来た人たちが並んでいた。

「うん、そうだね」

スバルはウォーロックに立つと下に降りていった。

-裏道-

スバルがみんなと合流するのに屋上から降りた頃。夕日が沈み始めて回りはなんとか見えるほど暗さになっていた。近くには影が一つ積み上げられるように倒れていた。近くからは人が謝っている声が聞こえるか聞こえないぐらいの小ささで誰かが言っていた。

「おい、立ちなよ。もうすぐしあがいてくれよ。楽しみが終わっちゃまじじゃないか」

どうやら青年が三人の不良と乱闘した結果不良たちが負けたようだ。いや、状況を見ると弱いものいじめを不良たちがやられていたと言った方がいいようだった。つまっていた二人は顔がはれ上がりていてとても立つことが出来る状態ではなく気絶していた。

青年は残りの不良の胸倉を掴んで面白そうなようすで言っていた。不良に関しては死んだような顔で涙の後が残っていた。青年は舌打ちをするとき飛ばし腹を何度も蹴った。

何度か蹴ると青年のハンターからウィザードが出てきた。

「おい、西杉。時間だそろそろやめる。仕掛けが出来なくなっち
まう」

不良を蹴っていた青年、西杉は舌打ちをすると手を放した。掴ま
れた不良は力なく倒れた。そんな状況を見向きもしないで歩き出し
た。

ライブが行われるオクダマスタジオへ。

ライブ開始

一オクダマスタジオ 特設ステージ -

スバルはあれから無事にツカサ、ルナたちと合流した。スバルが行くと宵磨が来ていた。それから楽しく話しながら会場へ向かった。特設ステージは、前回ステージの場所を高くしたため対処が出来なかつたため、今回のステージは高いところではしないようだ。

「それにしても予想以上に人が多いね」

ツカサが周りを見渡して言った。辺りはすでにミンカラファンの人たちで埋まっていた。ついでに、スバルたちの席は当然最前列だ。

「多すぎだろ？ 隣は隣で煩いのがいるし」

ジャックは隣で叫んでいたゴンタとキザマロを見ながら呆れたようになつた。

「ちよつと、ジャック。うるさいよ」

「ちよつと待て！ なんで俺なんだ！ ？ 普通俺の隣だろ！」

平然と言つたアオイにジャックは言つと「なんとなく」とさうつと言つた。スバル達は苦笑しながらそのやり取りを見ていた。

「けどライブが始まつてここにいる全員が叫び始めたらやたらうるさいような」

宵磨が言つと『コンタとキザマロが同時に「つるさい」とは何ですか！？「うるさいことわ」と詰め寄るようになつた。宵磨は「悪かつた、悪かつた」と言つていた。すると辺りを照らしていた電灯が全部消えた。一瞬闇が支配したがスポットライトが舞台を照らすと笑顔のミソラがいた。

ミソラがいるのを見た観客は一気に歓声を上げ会場はあつという間に歓声に包まれた。ミソラは手を振るとマイクを持つていつた。

「みんな～こんばんわ～。今日は私のライブに来てくれてありがとう。知つてる人もいると思うけど今日のこのライブが終わつたら私は引退します。けど、必ずまた戻つてきます。そんな訳で今日はいつも以上に盛り上げていくよ」

ミソラが引退と言つたとき歓声とは別に残念そうな声も聞こえたが言い終わると歌が始まつてないのにさらに歓声が強くなつた。

「じゃあ、早速一曲田じきます。今日初めの曲は『ハートウーハー』いくよ」

ミソラがギターを構えると歌いだした。始まると共に歓声も強くなつた。スバルたちは『コンタ、キザマロ、さらにアオイとルナまで夢中に応援していだ。

「引退ライブか・・」

スポットライトが辺りを照らしているところとは逆の暗いところで青年、西杉がこれから起ころる楽しい出来事を待ち望む子供のよくな不気味な表情で言った。

「くくく・・その歓声が悲鳴に変えるのが楽しみだぜ」

「おい、西杉。準備が出来たぞ。速くいかねえか?」

西杉ははなづくと裏の方に歩いていった。

一曲目のハートウーブが終わり観客の歓声がさらに大きくなつていた。ジャックはあまりにもついていけず外に出たようだ。

「みんなーまだいける?」

ミソラが元気に聞くと答えるよつこ「おー」と歓声が上がつた。

「じゃあ、一曲目『絆ウーブ』いくよー」

ギターを弾きだし一曲目に入った。一曲目の中間ぐらいまで来るとスバルは自分のハンターがなつているのに気がついた。どうやらメールが届いていたみたいだつた。差出人は不明で、前アドミストで送られてきたのとそつくりなのが来ていた。

スバルはいいところなのにと思いながらメールを小さな声で読んだ。

「えっと・・・『会場の裏。速く行かないと後悔することになるぞ』って、え?」

メールの内容に驚いたスバルは行こうとしたが、歌つているミソラを見た。スバルは「ごめん。少し席をはずすね」とおしゃくよう

西杉は会場を出た。

スバルが会場から出たこと気づいたらしくウォーロックが来た。

「おい、どうした？ 最後までいるんじゃなかつたのか？」

スバルはウォーロックにメールを見せるとウォーロックは「なるほどな」と言いながらうなずいた。

「ガセかもしれないぜ？ 本当だつたとしても何があるのか分からないが行くんだろ？」

「うん。せつかくのライブを邪魔されたらたまらないからね」

スバルは指定された場所へ走つて行つた。

「はあ～。おこおい、警備のやつが一人もいなつてビリゅうつ」とだよ？」

西杉はおこしてある装置を見ながらまらなそうに言った。

「まあ、いいんじゃないか？ それより、速く始めないか？」

サイレントは不気味な笑みを浮かべていった。

「おし。じやあ早速この会場を爆発・・

西杉が言いかけたとき近くの林から子供の声が聞こえた。

「ねえ、ウォーロックこの辺りだよね？」

「ああ、けどなにもないな」

スバルたちが道に出ると西杉と目が合った。スバルは西杉の姿を確認すると「あれ、たしかあのときの」と言つたとき隣にいたサイレントに気がついた。ウォーロックはスバルに耳打ちをした。

「おい、スバル。ビリやら当たりみたいだぜ。あいつをそり座のサイレントだ」

「つてことはFM星人？」

スバルはウォーロックに確認を取ると西杉を見た。

「おい、誰だお前？ こんなところに何かよつか？」

喧嘩を売りそうな声でスバルに言つた。

「ハハハ、ちょうどいいところに来たな。ウォーロック。おい、西杉こいつらがあのロックマンだ」

西杉はその一言を聞くと笑みを浮かべた。

「このライブ会場を爆破する前にお前を倒すか」

「ば、爆破つて・・」

西杉は近くにあつた装置を手で叩きながら言った。

「こここの装置のスイッチを押すとこここのライブ会場に仕込んだ爆弾がドンー中にいる人が混乱している中にさりに岩を落としたり大混乱させ、湧き出る負のエネルギーをこいつが吸収・・」

「おいおい。しゃべりすぎだらう。それ以上しゃべるな

サイレントは西杉が計画をペラペラ話し鍵の形をしたものを見出したときにストップをかけた。

「それは・・アンドロメダの鍵!-?」

「出来上がるのが速くねえか?」

「話はここまで。わあい、始めようかね

西杉はスバルたちを無視して装置のスイッチを押そうとした。

「ー!スバルあれを押されたら

「分かつてゐる。電波変換

スバルはロックマンの姿に変わると西杉を止めようと周波数変換で近づいた。西杉はいきなりスバルの方に向き直った。その顔は予想通りといわんばかりのようすで笑っていた。

「やつぱりそつ来るよな。さつき言つたはずだぜ?先にお前を倒すつてな!電波変換

スバルは突然の行動に距離を取つた。西杉の姿は、黒い身体に紫色のアーマを着けていた。両手には短剣を持っていた。

「この姿はクレイムサイレント。さあ、始めようぜー！」

「来るぞスバル！」

「うん。ウェーブバトル！ライド・オン！」

スバルが戦闘を始めたころ。

「ああ、飛ばしていくよ～」

ライブの盛り上がりは落ちる」となく活気に溢れていた。照矢は疲れたようで外に出ようとした。

「あれ、どうしたの照矢君？」

「ちょっと外の空気吸つてくる」

照矢はツカサに言うと外に出て行つた。ルナやゴンタアオイたちはもちろん気がついてない。

照矢は外に出ると大きく息を吸つた。ハンターからはディムネスが出てきていた。

「大丈夫ですか？まだ、体調はよくないんでしょ？」

「ハハハ・・そ、うなんだけね。なんか夢中になっちゃって。いろいろな事忘れてさ。それと、敬語はやめてくれウイザードなんだからわ」

照矢はそう言つとまた深呼吸をした。ふと近くにあつたベンチを見ると誰かが寝ているのが見えた。照矢は目を凝らしてみるとビックリ。ジャックのようだつた。

「あれ、こ、んなとこりで何してるの?・ジャック

ジャックは手をどけ照矢の姿を確認すると起き上がつた。

「お前にセビウした?・ライブ終わつたのか?」

「まだ終わつてないよ。僕はちょっと外の空気が吸いたくなつてね

「俺は寝てた。終わるまでここにいるつもりだから終わつたら起こしてくれ」

ジャックはそう言つとまた寝だした。照矢「分かったよ」と言つと。デイムネスに「飲み物買つに行かない?」と言つと歩き出した。

「で、わざわざ向でこんなところに来るのかな?」

デイムネスは呆れながら言つた。今、照矢達は人影がない準備室近くのところに来ていた。

「別にいいだろ。表の方はいいのがなかつたんだから」

照矢はそう言いながら紅茶を買つた。買つた紅茶を飲むとため息をついた。

「大体考へてることは分かるけど、スバルたちにも手伝つてもらつた方がいいのでわ？」

「本当に敬語やめてよ。まあ考へてみるよ。・・・あれ？」

照矢は飲み終わつたペットボトルを近くにあつたゴミ箱に捨てようとしたとき何かが入つてゐる紙袋を見つけた。

「これなんだろ？ 忘れ物かな？」

照矢は紙袋を持つてデイムネスに聞いた。デイムネスは「さあ」と言つと紙袋の中を見た。照矢は勝手に見るデイムネスを止めようとしたがいきなりデイムネスに「紙袋をそつと置いて」と言われた。照矢は言われたとおりにするとデイムネスに聞いた。

「どうしたの急に？」

デイムネスは紙袋の中を見せた。照矢はそれを見ると驚いた。その中にはパネルが液体の入つた容器と「コード」のようなものでつながつてゐる装置が入つていた。パネルには5・00と浮かんでいた。

「ねえ、これつてもしかして・・」

「多分考へているものであつてゐると思います。うかつに触らないでくださいね。本物のようですから」

「解体できるへ。」

「一〇の程度ならすぐ出来ます。ただ、オクダマスタジオのいたるところにありますね」

デイムネスは装置を取り出し解体しながら言った。

「どれくらいあるの？」

「一〇数個ですね。連動式のようですから場所はすでに分かっています」

「今はライブ中だし止めるのもなんかな。何とかしてみるか

デイムネスは「終わりました」というと照矢は残りの場所を聞くと走っていった。

ファイナライズ 失敗？

スバルは西杉が電波変換した姿、クレイムサイレントと戦っていた。戦況はスバルの方が押されていた。

「おらおら、その程度なのかー!?」

スバルは西杉の短剣での連続攻撃をロングソードで防いでいた。

「（この人暁さんと同じぐらい速い。それに・・体が重い）」

西杉はスバルを弾き飛ばすと追撃を加えてきた。スバルはとっさに防御チップのバリアで防いだ。お互いがウェーブロードに立つとウォーロックがスバルに言った。

「おい、スバルどうした? このままだと負けるぞー!？」

「分かってるけど・・」

スバルがウォーロックに向つて西杉が笑い出した。

「ハハハ、体がうまく動かないんだろ? そりやそうだ、お前の周りの電波を悪くしてんだから」

「おいてめえ! 卑怯だぞ。それに、スバルの周りの電波が悪けりゃお前らの動きも鈍つてるはずだわ!」

ウォーロックは笑つてゐる西杉に怒鳴つた。西杉は表情を変えずに言った。

「何寝ぼけたこと言つてんだ？その装置に対応できるプログラムを組み込んでおけばいい話だろ」

西杉の話を聞くと「卑怯なやつめ」と吐き捨てるよう言った。スバルは苦しそうなよつすだった。西杉は笑つのをやめると短剣を回した。

「弱いものいじめつては何もしてこないやつを思つ存分殴つたりするんだぜ？弱らせたりするのは当たり前だろ」

西杉は短剣をまわすのを止めるとスバルの方に向けた。

「さて、どこまで楽しめるかな

西杉はそういうなり周波数変換でスバルの目の前に移動した。スバルはバトルチップは間に合わないと判断し距離を取ろうとした。

「無双連斬」

西杉は一瞬でスバルの後ろに立つていた。スバルは驚いて振り向いたとき体中に激痛が走った。バイザーが割れていて肩や手など切り傷が出来ていて血が出ていた。

スバルは一瞬倒れかけたがなんとか持ちこたえ距離を取つた。今度はさつきより遠く。スバルの息は荒く血が片目に入つた。

「おいスバル、大丈夫か？」

「な、何とか…」

スバルは西杉の方を見ると楽しそうに短剣を回していた。隣にはサイレントが出ていた。

「リミスと俺らは違うぜ。容赦する気はねえぜ」

「次はどう切り刻んでやるつか?」

西杉は不気味な笑みを浮かべながら次のことを考えていた。スバルはサイレント達に聞こえないようにウォーロックに聞いた。

「ノイズはどうくらい溜まってる?」

「200%超えてるぞ、やるか?」

「それしかいい方法が思いつかないからね」

スバルは立ち上がると西杉の方を見た。西杉は短剣を回すのを止め構えた。

「ファイナライズ!」

スバルはそう叫ぶとノイズがスバルを包み込む・・・はずだった。

「あれ?」

スバルの姿は変わらずノイズもスバルを包み込まなかつた。西杉は呆気に取られていたが笑い出した。

「何だよ。『ファイナライズ』って叫ぶもんだから何が起こるか

と思えば、失敗か？それは残念だつたな

「どうして…」

スバルはなぜファイナライズが出来なかつたのか考えていた。そのため、西杉が近づいていることに気がつかなかつた。

「まだ、終わつてもないのに敵から目をそらして言い分けないだろー！」

西杉の声でスバルは我に返ると西杉は目の前に来ていた。

「簡単にやらせるかよ。ビーストスティング！」

西杉がスバルを斬りうとしたときウォーロックが自慢の爪で攻撃した。西杉は突然のことでの防御が間に合わずまともにくらつた。

「スバル考えるのは後にしろー！」

スバルは頷くと次の攻撃に備えた。西杉は立ち上がると表情が昼間の冷酷な顔になつていた。

「くそが。何も出来ないやつが攻撃しやがつて！」

西杉はサイレントを呼ぶとサイレントは「やつと俺も戦えるのか」と言った。

スバルを睨むと短剣で斬りかかつた。ウォーロックはさつきと同じように決めてやろうかと構えていたがサイレントが西杉の上から飛び掛つた。ウエーロックはそのままもめ合いに入った。

「へや、さきやがれ

「（）でやつ見てなよ」

「（僕を切るためには最低体に触れなければならぬはず。だつたら）」

スバルは一枚のバトルチップを使つた。

「ハリケーンダンス」

スバルはその場で風を纏いながら回転し始めた。

「よし、これなら切る」とはできねえだろ

「そうだな。回転している間わな

サイレントは静かに言つとウオーロックは「なに？」と言つた。スバルの回転は徐々に弱まっていき止まつた。スバルは片目で前を確認すると笑みを浮かべていた西杉が立っていた。スバルは驚いてバトルチップを使おうとしたが遅かつた。西杉の姿はもうなく気がついた時には痛みと衝撃で倒れた。

「フェイントをかけてなかつたら俺がやられてたが、まあいいや

西杉はそんなことを言いながら体から血が出ているスバルに歩いて行つた。

「（へや、立たなきやいけないのに体が動かない）」

「子供でも知ってる」と教えてやるよ。サンリには毒があるんだぜ？」

西杉はスバルを見下ろしながら冷たく言った。

「くそー毒か」

「氣づくのが遅かつたな。あの短剣に毒が塗つてあるぜ。もうあのガキは動けないぜ」

ウォーロックが言つたことにサイレンとは馬鹿にするより言つた。ウォーロックは「くそがー」と叫ぶとスバルの方へ向かおうとしたがサイレントが邪魔をした。

「わっしきのお返しだ」

西杉は今までの攻撃や電波の悪戯、サイレントの毒で動けないスバルを蹴飛ばした。スバルは地面に何度も体をぶつけた。西杉はスバルの方へと歩いていった。

「おら、どうした? もう終わりか?」

西杉はスバルの背中を踏みつけた後、何度も腹を蹴った。ウォーロックは助けに行こうとしたがサイレントに押さえつけられて助けに行くことが出来ない。

スバルは蹴られるたびに呻き声を出した。西杉はそんなスバルにお構いなしに何度も蹴つた。

「やっぱり、弱いものいじめはいけないよね」

西杉は蹴るのを止めるとスバルの首を持つと投げ飛ばした。スバルはウォーロックの近くまで投げられた。ウォーロックはスバルの近くに駆け寄るとバトルチップの中ならリカバリーを使おうとした。

「あ、リカバリー使つんなら使えば？ どいつなつても知らないけど」

「どうゆうことだ？」

ウォーロックは恐ろしい形相で言つた。サイレントは笑みを浮かべながら言つた。

「ドクリンゴツバトルカード知つてるか？」

ウォーロックはそれを聞くなりリカバリーを使うのをやめ舌打ちをした。

ドクリンゴは体力を回復するバトルチップ、リカバリーなどを逆にダメージを与える効果に変えるバトルカード。この場合、リカバリーを使つと傷を治すのではなく逆にスバルをさらに苦しめることになる。

「さて、そろそろ爆破しますか」

西杉は装置のボタンを押すため近づいていった。ウォーロックは「止めろ！」と叫ぶなり襲い掛かつた。ウォーロックの攻撃はサイレントによつて簡単に弾き飛ばされた。

それを見ると西杉は装置のボタンを押した。

スバルは氣を失いそうな様子でボタンを押した西杉の姿を見た。スバルとウォーロックは「しまった」と思つていたがどうにもならなかつた。西杉とサイレントは騒ぎになるのを今かと待ち望むような様子で館内の方を見た。が、騒ぎになるどころか爆弾が爆発した

音すら聞こえなかつた。

「おい、どうゆう」とだ? 騒ぎが起るやうに爆発をえしない
じゃないか」

「知るかそんなの!」

西杉とサイレントは言い争いをしていた。

「くそーちゃんと爆弾は仕掛けたはずなんだが」

「うつたら、あいつをボコボコにしてやる」

西杉はスバルの方を見ると歩いてきた。スバルは立ち上がりつつとするが体が動かず声しか出せない。

ウォーロックはスバルを守るように前に出た。西杉とサイレントは冷酷な笑みを浮かべながら歩くのを止めない。スバルとウォーロックが諦めかけたとき空気を切るような音が聞こえたと思いつと西杉の肩に矢が刺さっていた。

西杉は突然の攻撃をくらい矢が刺さってる方の方を抑えた。サイレントが矢を抜くと西杉は矢の飛んできた方を見た。

「誰だ! ? どこのいるー? 出て来い」

西杉が叫ぶと後ろから矢が一本飛んできた。今度は一本は切ることが出来たがもう一本は足をかすつた。西杉は見えない敵に腹を立て始めていた。

「西杉、下じゃない上だ!」

サイレントが言った方を見ると空には星と一緒に無数の羽があり
襲い掛かった。

「つちー」

西杉はバックステップでかわすと辺りには無数の羽が地面に刺さ
っていた。西杉が顔を上げるとスバルの近くに翼をはやし弓を持つ
た灰色の電波体がウエーブロードから降りてきた。

ファイナライズ 失敗？（後書き）

最後に現れた灰色の電波体が誰なのは分かりますよね？

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

空の狩り人

スバルは自分のそばに電波体が降りてきたのを見ると氣を失った。ウォーロックはそばに立つている灰色の電波体に隙を見せないよう構えていた。が、ハンターから出てきたウイザードを見ると警戒心が解けた。

「ディムネスお前か」

「二人とも大丈夫ですか？」

「気を失ってるだけだね。ディムネス、スバル君とウォーロックをお願い」

照矢はスバルが無事なことを確認すると奥のほうで獲物を狙つているような顔つきをした西杉を見た。西杉は恐ろしく不気味な気を放っていた。照矢にはそれが西村を包み込んでいるように見えたが、動搖はしなかつた。

「・・・おい、てめえ何者だ？」

「サテラポリス遊撃隊。スカイディムネス」

お互い相手の動きを見ながら静かに言った。

「まさかと思うが、お前が爆弾を壊したのか？」

「飲み物を買いに行つたら物騒なものを見つけたんでね。悪いけど全部使い物にならなくしたよ」

「俺の楽しみを全部無駄にしやがって！」

照矢の話を聞くなりさつきの冷酷な顔と違ひ怒りの形相になつて、怒鳴つた。西杉は短剣を構えるなり襲い掛かつた。スカイディムネス、照矢はスバルを担ぎ離れたところへ周波数変換で移動した。

「ディムネス。バリアをはつて」

照矢はそういうと空へ跳んだ。ディムネスは言われたとおりバリアをはつた。

照矢空へ飛ぶと暗くなつた林を見まわした。一瞬静けさが辺りを包み込むと何かを感じたのか照矢は後ろを見た。そこには周波数変換で近づいてきている西杉がいた。

「実戦は始めてなのに全力で来られてもな

「だつたらお前もあそこで倒れているやつの一の舞にさせてやるぜ」

照矢は距離を取ろうとバックステップをしたとき、西杉はいなくなつていた。

「・・・！」

照矢は突然、周波数変換で違うウェーブロードへ移動した。移動したとき照矢の肩にかすれ傷が付いていた。西杉はさつきまで照矢がいたところに立っていた。隣にはハンターから出てきたサイレンともいた。

「今のかわすか

「つち。運のいいやつだ。次ははずさねえぞ」

サイレントはやるなと思つていたが、西杉はともかく気が晴れるまで叩き潰すことしか考えてないようだ。

「（速いな。今のはあいつの言ひおり殺氣だけでもうまくかわせたもんだからな）」

照矢は立ち上がりながら勝つための作戦を考えていた。

「（こつちは初めての戦闘。まともにやつて勝てる相手ではないな。さて、どうじよつかな・・）」

照矢はティムネスの方を見ると何か言いたげな様子だった。しかし、ティムネスを見たのがあだになり西杉が向かってきていた。

「よそ見してると終わりだぜ」

照矢は落ち着いた様子で弓の弦を伸ばしたすると薄緑色の矢が出来ていた。

「ウイングシコード」

弦を離すと風を纏つた矢が西杉に飛んでいった。西杉は鼻で笑うと走りながら軽々とよけた。

照矢は次の矢を放つため弦を引いたが西杉のほうが少し速かつた。

「今度こそ終わりだ。無双連斬！」

照矢は構えたまま周波数変換で上のウェーブロードに移動した。かすり傷が数箇所あつたがたいしたことはなさそうだった。

照矢は移動するなり矢を放った。西杉は上からの攻撃に反応が遅れたがなんとかかわした。

「ここの程度の攻撃じゃあ、勝てないぜ」

西杉は挑発も含めたような言い方で言つた。西杉はそのまま照矢に向かつていつた。今度は突っ込んで技を放たずスバルの時と同じようにフェイントをかけた。照矢はバックステップでかわしたこと

が失敗だと言つことに気がついた時は西杉は攻撃の構えをしていた。

「今度こそ終わりだ！無双連」

西杉が言いかけたとき肩を何かが貫いた。西杉は何が起こったか理解できぬ様子だったがサイレントの叫び声が入つた。

「上だ！よける」

動くよりも早く突き飛ばされた感覚を感じた。西杉はさつきまでいたところを見ると切り刻まれた跡みたいなのがあり、薄緑の矢が刺さっていた。西杉は肩の方を見ると地面に刺さっていたのと同じ矢が刺さっていた。

「ここれは、あいつがあの時放った矢か？」

西杉は矢を不器用に抜きながら聞いた。サイレントはバリアを張つていてるディムネスの方を見た。

「まさか、あの『ティムネス』か。つち、甘く見るんじやなかつた。
おい西杉、あいつの矢はかわすんじやなく消さなきやいつまでも追
つてくれるぞ」

「・・・矢を操る能力か」

西杉は照矢を睨みながら言つた。照矢は表情を変えず『』の弦を引
いていた。

「気づかれるの速いな。・・・ちょっとやってみようかな」

照矢はそういふと西杉の視界から消えた。

「炎双斬撃」

西杉はそう言つなり短剣は炎を吹いた。短剣が炎を纏うなり後ろ
に振つた。何をやつてるんだとウォーロックは思つたが、何かが炎
に包まれた。西杉が見ている先には照矢がいた。

「あいつ見向きもしないで矢を切つたのか

「ちよつとやばいかな？」

ティムネスが心配そうに言つと「ちよつと行つてくるから後よろ
しく」と言い残し照矢の方へ向かつた。照矢は周波数を連続で使い
そのつど矢を放つてゐるようだ。照矢は周波数変換でどこかに移動
すると今度は西杉の全方位から矢が襲い掛かつた。

西杉は笑みを浮かべると矢を全て一瞬で切つた。矢は炎に包まれ
ると地面に落ちながら消えていった。

「おい！もう終わりなのか？」

西杉は辺りを見渡しながら言った。

「（あれで無傷か。早くスバルを病院に連れて行きたいんだけどな）」

照矢は木に隠れながらあれこれ考へていると、ディムネスが来ていた。余計な話は省くようでいきなり本題に入つた。

「矢は私が操るんで操作に気をとられなくていいですよ」

「じゃ、任せる」

照矢はウェーブロードに立つて、西杉に向かつて無数の矢を放つた。

「…来たか」

西杉が見た方には無数の矢が向かつてきていた。

「おい、また矢かよ。本人が出てこいよ」

つまらなさそうに言つと短剣を構えた。矢にタイミングを合わせて振ると今度は炎に包まれなかつた。矢は急に方向を変え八方に飛び散つた。西杉はどうゆうことだと疑問に思い飛んでいつた矢を見ると向きをまた西杉の方に変えた。今度は直線的にではなく意思を持つたように向かつてきた。

「くそ！なんだよ。急に切れなくなつた」

西杉は短剣を振りまわしながら襲い掛かってくる矢をかわした。致命的なダメージは与えてないがかすり傷がどんどん増えていつていた。そんな中、西杉は足に矢がまともに当たつてしまい倒れた。このチャンスを見過ごすまいと矢が一斉に襲い掛かった。西杉は舌打ちすると周波数変換でかわした。見つからないように地面に移動したのがつかの間、照矢の声が聞こえた。

「決まつてくれ。ウイングストライク！」

上を見るとなつきの矢と比べ物にならない数の羽が向かってきていた。

矢の攻撃を受けたばかりで対処に間に合わず全ての羽が襲いかかつた。西杉がいたところは砂煙に包まれていた。

照矢とティムネスはスバルの近くに降りるとウォーロックに容体を聞いた。スバルはすでに電波変換は解けていてもとの姿に戻っていた。

「止血はした。それよりお前らもやるな。そういうえばティミスは俺が地球に来る前は『空の狩り人』だったか」

「昔の話はまた今度で。それよりスバルさんを速く治療した方が」

「」の時間だとこの辺りの病院は無理だと思つから、やつぱりWAXAだね」

ティムネスとウォーロックがスバルを抱えると照矢は砂煙のあがつているところを見た。砂煙は晴れていてそこには羽が刺さつたド

ーム状の壁があつた。

照矢たちは再び警戒すると壁はバラバラに砕けた。中からは不機嫌な表情をした西杉とサイレントがいた。

「はい、そこまでー」

サイレントたちが出てくるとウーブロードの方から声が聞こえた。照矢たちは声のした方を見るといきにはアドミストのときによく来たスワイフトがいた。

「おい！何でまたお前が来てるんだー？」

「何でって『リードされそだつたから』のと

スワイフトは片手に持っていた袋を見せた。袋の中は機械の残骸などが入っていた。

「あんたが勝手に持ち出したこれの回収。まつたく、回収に來たらこんなどうしようもない形になつてたし、リーダーからば『リートされそだつたら助けろつて言われてるし最悪だよ』

スワイフトは騒ぐよつこと言つと真剣な表情に変え周波数変換で西杉の近くまで移動した。

「つてことで、撤退するわよ。分かつてると恩つけど拒否権はないから」

言い返そとする西杉とサイレントを無理やり魔方陣の中に入れた。ロープを着た電波体、モウメントスワイフトは照矢のほうを一瞬見るとアドミストのときのように光に包まれ消えた。

空の狩り人（後書き）

アオイと宵磨と比べて遅くなりましたが照矢の始めての戦闘でした。

感想等よろしくお願いします。

—特設ステージ—

「今日はみんな来てくれてありがとうございます。今日を持って引退しようと思います。けど、また戻ってくるのでそれまで待ってください」

ライブ最後の曲が終わり客の歓声は最高潮に達していた。観客の中には泣いている人もいた。ミンラは観客のみんなに挨拶をすると舞台から降りて行った。

「はあ～

「どうしたの？ため息なんか付いて

今、ミンラは楽屋に戻つて休んでいた。スポーツドリンクを少し呑むとミンラはため息を付いた。ハープに理由を聞かれたがうつむいていて答えようとしたしなかった。そもそも聞こえてないようだった。

「・・・もしかしてスバル君？」

ハープの一言でミンラは顔を上げた。ハープはやつぱりねと言つ顔をしていた。

「確かに途中からどこかに行つていたわね。何があったのかしら？」

ミンラは「何で最後までいてくれなかつたんだろう」と呟いてい

た。するとドアがノックされてミソラが返事をするとルナたちが入ってきた。外で寝ていたジャックも一緒にいた。どうやらルナたちにたたき起されたようで顔には晴れた痕があった。

「みんな」

「今日のライブは最高でしたよ//ルナちゃん」

「うん。聞いてるしつつも楽しけりやった」

「疲れが吹っ飛んだ」

「うお~、本当に引退しちまつのか?まだ歌つてほしいぜ~」

キザマロ、アオイ、宵磨、ゴンタの順で言った。ゴンタに関してはまだ泣いていた。そんなゴンタにルナは「いい加減にしなさい」と言いながら呟いた。

みんなは笑っていたがアオイはミソラが少し元気がないことに気づいたようだつた。そして、今この氣づいたように竜牙が言った。

「そろそろスバル君に照矢君がいなくなつてるね」

竜牙が言うとルナたちは辺りを見回して「そろそろそりゃそうだね」などといつていた。雪島は「夢中になりすぎだわ~」と聞こえないよひに言つた。

「確かに何処に行つたんだろうね」

「スバルは知らねえが照矢なら飲み物を買ってくるとか行つてたが

ツカサが言つた後、ジャックがぶつきりぱりに言った。

「あこつら//フランちゃんの最後のライブだつて言つのに最後までいなになんて許せねえぜ」

「そうですね。せつかくチケットまでもらつたのに最後までいなになんてありえませんよね」

ゴンタとキザマロがそう言つていると竜牙と雪島は「ならジャックはどうなんだよ」などとつっこみを入れていた。ミソラはみんなのやり取りを落ち着きのないように聞いていた。アオイがミソラに話を振ろうとしたときドアがまたノックされると聞き覚えのある声が聞こえた。

「暁だ。ミソラにジャックやみんないるか？入るぞ」

ドアが開くとサテラポリスの服装をした暁がいた。暁は好物のうまい棒をサクサクと音を立てながら食べていた。暁はスバル、照矢以外が揃っていることを確認するとうまい棒を食べるのを止めた。

「みんなこんな遅い時間だがWAXAに来れるか？」

時計を見ると九時になりそuddつた。ルナ、キザマロ、ゴンタは行けないらしいが他は行けると答えるとツカサが「何があつたんですか」と聞いた。

「実はな照矢の報告でライブ中にFM星人が現れたらしいんだ。スバルと照矢がなんとかやつたみたいだがスワイフトも現れて逃げられたらしい。それで、今後のこと話をしたいんだが」

「スバル君は？」

暁の話にいち早く反応したのはミソラだった。ライブを途中で出て戻つてこなかつたことを考へると大体の想像は付いているらしい。暁は言葉に一瞬詰まつたが答えた。

「命に別状はないらしい。ただ、体中の打撲などが酷いらしくて今WAXAにいる」

暁の話を聞くなりミソラは楽屋から出て行つた。アオイやツカサたちもそれにつられるよつと出て行つた。暁は仕方ないと言ったげな様子で後を追つた。

—WAXA 医務室—

スバルは目を覚ますとまず白い壁、天井が見えた。スバルはここは何処だろう？何でここにいるのだろうと考えていたが、すぐに思い出したように体を勢いよく起こした。すると、腹の辺りに激痛が起つたときに押さえた。隣に座つて本を読んでいた照矢が気づいてスバルをベットに寝かせた。

「あ、ダメだよ。打撲や長い間、電波の状況が悪かつたせいで体中が痛んでいる見たいなんだから、体を起こしたりせずに横になつてないと」

スバルは横になると照矢にお礼を言った。

「それにしても気がついてよかつた。」には、WAXAの医務室。
ウォーロックは・・・

照矢が説明しているときなりスバルのハンターからウォーロックが出てきた。

「やつと田を覚ましたかスバル」

スバルはウォーロックと簡単に話を終わらせると照屋のほうに顔を向けた。

「そういうえば、ライブはどうなったの？あと、翼のある電波体が来たと思つけどサイレン特はどうなったの？」

「えっと、一つずつ答えていくよ。まず、翼のある電波体は多分僕ね。サイレンとはスウィフトとか言つた電波体が来てうまく逃げられちゃつたよ。次にライブの方なんだけど無事に終わつたらしいよ」

スバルは心配そうな顔つきで聞いていたがライブが無事に終わつたことを聞くと安心したようだ。照矢の話が終わるとウォーロックが気になつていていたことを照矢に聞いた。

「ところでお前は体とか大丈夫なのか？電波を悪くしたつてあいつらが言つてたが。それに、毒も効いてなかつたようだが」

「ああ、そのこと。デイミスはね周波数じゃなくて周りの電波を感じしたり少しだけど操ることが出来るらしいんだ。爆弾は電波で操作する仕組みだったからその回路を調べてもらつて何とかしたんだ。で、電波を悪くしていった根元を見つけて破壊したんだ」

照矢はウォーロックの質問にさりげなく答えた。スバルはなんとか理解できたがウォーロックにとっては理解ギリギリのようだった。照矢は気にせずに話を進めた。

「毒はステータスガードって言えば分かるかな」

スバルとウォーロックはなるほどと頷いていた。

ステータスガードは毒などの状態異常にはならなくなる能力。つまり、照矢の電波変換した姿、スカイディムネスにはサイレントの毒は効かないと言つことだ。

「まだ話していないことがあるから話を戻すね。それで、スバル君をここに連れて来る間、暁さんに連絡したんだけど、ミソラちゃんたちを連れてくるらしいよ。もうすぐかな」

照矢は壁にあつた時計を見ていつた。

- ? ? ? -

スバルが目覚めたころいつも暗い倉庫の中には五体の電波体がいた。中ではサイレンなどがスワイフトに怒鳴つていた。

「どうしてあんな奴からひかなければならなかつたんだ！？」

「勝手にリミスの装置を持ち出して壊したんだから何もいえないでしょ」

スワイフトとは別に興味のなさそうな様子で見ていたウィザード

が言つた。声が聞こえたのか矛先はその電波体に変わつた。

「うるせえんだよレイド！ 地球の生活に興味を持つて計画に協力してない奴が」

レイドと呼ばれた電波体はサイレントの方を見向きもしないで話を変えた。サイレントの我が儘は、もはや全員から無視されていた。堪忍袋が爆発したようで他の四体の電波体に向かつて叫んだ。

「もう我慢できねえ。俺は俺のやり方で地球を侵略してやる。アンドロメダの鍵は今は俺たちが持つてるからな」

サイレントはあざ笑うかのように叫ぶと周波数変換でどこかに行つたようだ。スワイフトとレイドの一人は揃つてため息を付くトリーダーの方を見た。

「どうするのよフーンリル。あの馬鹿アンドロメダの鍵を持つてどこに行たよ」

リーダー、フーンリルはスワイフトに問題ないと言いたげな様子で言った。

「俺たちの計画に勝手に入ってきたんだ。ほつとけばいいや。それに、鍵はあいつらに持つていかれてないしな」

「まあ、そうだしね。リミス、発信機ちゃんとつけてる？」

「気づかれてないはずだよ。それで、次はどうあるんですか？ 鍵の動力、負のエネルギーをためるために事を起こさないと溜まりませんよ」

「各自それぞれ負のエネルギーを集めるのに行動してくれ」

フーンリルが言つと各自それぞれのパートナーのところに戻つた
ようだ。

知らないたくない」と（前書き）

今回はいつもよつと少し文が長いです。

それではじり。ア。

知られたくないこと

I WAXA 医務室一

スバルと照矢の話がちょうど終わつたとき廊下を走つている音が聞こえるとドアが勢いよく開いた。開いたドアからミソラが飛び込んできた。

「スバル君！」

ミソラは飛び込んでくるなりスバルに駆け寄つた。ノックもなしに入ってきたので二人は少し困惑つたがすぐに落ち着きを取り戻した。ミソラが入ってきた後足音は聞こえてきて次にアオイが入ってきた。それからなだれ込むようにツカサや竜牙、最後に暁が入つた。

「田が覚めたか。調子はどうだスバル？」

「一応大丈夫です」

「大丈夫には見えないよね」

スバルの言つたことを否定するように雪島が言つた。ミソラは心配そうな顔でスバルを見ていた。するとドアがノックされるとクインティアが薬を持って入つてきた。

「薬を置いておくわね。傷や打撲が酷いらしいけど安静にしておけば一日か三日ぐらいで直るらしいわ」

クインティアはみんなに、特にスバルとミソラに伝えるよつて言

つた。ミソラは「よかつた」と一安心したようだ。スバルの怪我が治ることを知ると本題に入った。

「それで、一安心したところでスバルと照矢。何があつたか詳しく教えてくれ」

スバルと照矢はお互にフォローしながらサイレントの戦闘でのことを話した。もちろんファイナライズが出来なかつたことも。これに関しては暁は驚いていた。

「ファイナライズが出来なかつただと。確かにメテオGが消えて前とは多少違つたが・・」

「・・・ちよつとそのPGM見せてもらつていい?」

雪島はスバルに聞くとウオーロックがハンターから出てきて雪島に向かつてPGMを投げた。雪島はそれをうまく取るとキヤッチするエアディスプレイを出して調べ始めた。アオイと宵磨以外は始めてみるが、小学生かと聞きたくなるような手の動きだった。暁もこれほどとは思つてなかつたらしく驚いていた。

「それにしても、アンドロメダの鍵が出来上がるの早くない?」

アオイの一言で顔つきが変わった。

「それに鍵が出来上がつていることは速く手を打たないといけませんよね」

「ツカサの言うとおりなんだが、うまくいかないんだよな。せめて敵の居場所が分かればいいんだけどな」

「向こうから出てもらわなことどうもしないな」

「発信機とかがあればな」

ジャックが暁に言つた後、竜牙がさらうと言ひと雪島以外、全員が竜牙を見た。

「」「どうしてそれを速く言わない？」

ジャック、暁、宵磨が同時に叫んだ。竜牙は反発するように言ひ返した。

「そんなの知らないよーだいたい暁さんに関しては本職なんだから普通思いつくでしょ！」

竜牙の一言で言い争いまで発展しかけた。ミソラ達が止めようとH.AディスプレイでPGMを調べていた雪島が言つた。

「うわ、何だこれ

暁と竜牙の言い争いを眺めていたツカサに聞こえたよつて雪島に聞いた。

「どうしたの？」

「・・あ、うん。PGMが作動しなかつたらしいからノイズを制御しているプログラムが悪いのかなと思つてを調べようとしたんだけど、何だか知らないけど中のデータの配置がバラバラ。メテオサーバーのフォルダのところに別のデータが沢山入ってるし、他のと

「いつも同じよつて。これじゃあ、ファイナライズ出来るわけがないよ」

雪島は手を止め説明した。三人の言い争いは終わっているらしく雪島の話を聞いていた。暁は何だか嫌そうな顔をして雪島に聞いた。

「また作り直さないといけないのか？それを作るのにどれだけかかったと思ってるんだ？」

「どうやらPGMを一から作るのに徹夜で働くのが嫌なようだ。

「いや、その必要はないと思う。確かに一から作り直した方が速いと思うけど整理すれば言いだけの話だしね。それより、スバル君近頃何か変わったことなかつた？」

雪島は心配ないと曉に言うとスバルの方に話を振った。スバルは「変わったこと？」と聞き返した。

「うん。ここまで大量のデータが間違えて保存する失敗はWAX Aの人はしないでしょ？ってことは、何かがあつたからデータが保存されたと考えれるでしょ。それに、WAXAのデータ以外のも入ってるし」

スバルは変わったことがないか考えていた。時々ウォーロックにも「何かあつたっけ？」と聞いたが「知るか」と答えられた。二、三分ほどすると思い出したように言つた。

「あ、そういえば一つだけあった。ウォーロック、アオイちゃんと戦った日に展望台で拾った石ある？」

ウォーロックはハンターに戻るとアオイが聞いた。

「石ついで、あの時拾つてたっけ？」

「うん。なんか変わった石だったからウォーロックに預かってもらつてたんだ」

スバルがみんなに言うとハンターからウォーロックが飛び出してきた。飛び出すさい別の物も一緒に出てきたがあえて見なかつたことにしよう。ウォーロックは「これだ」と雪島に紫色の丸い石を渡した。雪島はそれを興味深げに見ていた。

「どう?」

「うーん。分からない。特に変わったものじゃないみたいだし。これが原因とまでは分からないね」

雪島はさうことわりウォーロックに石を返した。

「よし、みんな。今日はこの辺にしてそろそろ帰らないと家族が心配するだらうからこれで解散。また何かあつたら報告してくれ。じゃあな」

暁は十時になつてゐのを見ると、スバルたちにそう言い残すと医務室から出て行つた。クインティア、ジャック、ツカサも出て行つた。

「照矢君とアオイちゃん、宵磨君はどうなの?」

「私はそろそろ帰らじてもいいよ。帰つたら怒られると思つたけど」

「俺はもう少しここに……」

「わて、じやあ。私たちは帰るね。じゃあね、ミソラちゃんにスバル君。行くよ、宵磨君に雪島君」

「え、あ、ちょっと……」

宵磨と雪島の答える暇を『えず強引に医務室から出て行った。スバルとミソラは啞然としていたが照矢は何かに気づくと笑みを浮かべて置いてあつた本を取った。

「じゃあ、僕も帰るよ。じゃあね、スバル君とミソラちゃん

照矢はそういうとアオイたちのあとを追いついて出て行った。医務室の中はあつという間にスバルとミソラの一人になつた。ウォーロックは何処へ行ったのかいなくなっていた。ミソラはしばらくして一人だけになっていることに気がついた。何を話せばいいのか考えているとスバルが聞いてきた。

「そういうえばライブだった? 最後まで見れなかつたけどどうまくいった?」

「あ、うん。けどスバル君にも聞いてほしかつたな~」

ミソラがスバルに言つと「FM星人が来なかつたら聞けてたのにね」と残念そうに言つた。ミソラはスバルを見つめていると何か思ついたようで椅子から立ち上がつた。

「よし。だつたら今聞いてもらえる?」

「え、今？こんな遅くに？WAXAの仕事の邪魔になるんじゃ…」

「まあ、気にしない。それより聞いてくれるよね？」

スバルは「じゃあ、お願い」と言つとミソラは笑顔になりギターを構えると歌い始めた。その夜のWAXAではきれいな歌声がしばらくの間、聞こえていたそうだ。

暁はスバルの医務室から出で来ると話声が聞こえないほどのところまで歩いた。大体の場所まで来ると待つてましたと云つようになシッドが出てきた。

「良いんですか？今のサテラポリスの捜査方針について伝えなくとも？」

「良いんだ。知らない方がいい

暁は思い出すように近くにあつた窓から夜空を見ていた。

-回想-

「暁君。君に話があるんだが

アドミスト、コミスとの戦闘後の話し合いが終わりスバルたちが帰った後、長官が部屋へ入ってきた。長官が入つてくると高そうなスーツを着た中年の男性が入ってきた。暁は「誰ですか？」と聞く

と長官が中年の男性に聞こえないように言った。

「言葉を慎んでくれ。政治家の三谷　由人さんだ。聞いたことはあるだろ？」

暁は名前を聞くと由人の方を見た。由人は暁と目が合うと暁に名詞を渡しながら挨拶をした。暁も挨拶すると長官は由人に椅子に座るようになると進めた。三人は椅子に座ると長官が話を切り出した。

「今日、由人さんが話があるそうで来られたようだ」

長官が暁に伝えると由人が話し始めた。

「早速だが、アドミストにあるループインフォメイションのデータが盗まれたそうだな。話によれば以前、地球侵略を企んだFM星人が盗んだと聞いたが？そのFM星人は、また地球侵略を企んでいるそうではないか」

「（何処からその情報を・・・伝わるのがいくらなんでも速すぎだろう）」

暁がそんなことを考えているのを気にせずに話を続けた。

「そこでだ。FM星人の対処よりもまず、盗まれたデーターの回収を優先してもらいたい」

「データーの回収ですか？FM星人の侵略よりもですか？」

暁の一言で由人の目つきが変わり暁を睨んだ。長官はやつてしまつたと言いたげな様子だった。

「当たり前だ。あのデーターのことを知らないからそんなことをいえるんだ。それと、FM星人の侵略に関してはこちらが手を打つので気にしなくていいですよ」

暁が異議を唱えようとしたところを長官が抑えた。暁は納得しないまま言葉を飲み込んだ。由人は伝えることだけ伝えると席を立つ。暁たちの気を知らないように平然と「それでは頼みましたよ。私はこれから用があるのでこれで」と言い残すと部屋から出て行つた。

由人が出て行くなり長官に詰め寄つた。

「どうゆうことですか！？電波体の対策が何にもない政府側がFM星人たちをどうにかできると思つてるんですか！？」

明らかにキレていた。長官は暁に落ち着くより言つと話し始めた。

「すまないな。だが聞いたことがあるだろう？あの人の噂を

「いい噂は一つとして聞いたことがないですね。だったら、なおさら…」

「断つてどうなる？相手は権力がある政治家が相手なんだぞ」

「それでもですよ。FM星人は我々が担当するべきです

「物事は力づくで動かすよな人だぞ。なにをしてくるか分からないんだぞ」

暁はこのまま長官に当たつても意味がないと思つたらしく出かけた言葉を飲み込んだ。長官は暁の肩を叩くと元気付けるように言った。

「君達遊撃隊はFM星人たちのことを任せせる。正し、気づかれないよつにな」

長官はそう言つと部屋から出て行った。暁はただ何も言えず長官が部屋から出て行くのを見ていることしか出来なかつた。

-回想終了-

「明らかにおかしいだろ。厄介」とは大抵俺たちが何とかするんだ。なのにだ、国の上にいる政治家がわざわざ出てきたんだ。ここでスバルたちに話して向こうに気づかれてみる。どうなるか分かつたものじゃない」

暁が窓から夜景を見ながら言つときれいな歌声が聞こえた。

「「」の声は・・・ミンカラか?」

「そうみたいですね」

暁はその歌声をしばらくの間壁によすがつて聞いていた。

-フレイグタウン-

照矢はスバルたちと別れると電波変換をして自分の家へと戻つてきていた。照矢の家は家というより屋敷と言つた方が正しかつた。

あまり広くはないが駅前で見るよな小さな噴水がある。照矢はドアの入り口に来ると電波変換を解いた。

「デイムネス。いつも通り隠れておいてよ」

デイムネスはなにも言わずハンターの中に戻った。

照矢は自分の背より少し高いドアを静かに開けると中にいる人に気づかれないように入った。

家中は大広間になつていて、窓際には花が咲いていた。照矢は靴を脱ぎ中に入ると近くのドアが開き中から六十ぐらいの男性が出てきた。照矢の姿を見るなり一礼した。

「お帰りなさいませ。今日はいつもより遅いお帰りですね」

「ちよっとあつてね。それと、いつもの事なんだけど・・・」

「分かつております。お父様とお母様はお仕事が忙しいそうで外出されております」

「・・・葉平は？」

「葉平様は今、寝ておられます。それでは私は明日の食事の仕込があるのでこれで」

照矢にそう言つと部屋へ戻つていった。それを見ると照矢も階段を上り部屋へと戻つた。

照矢は部屋へ戻るなりベットに仰向きて倒れこんだ。ハンターに

隠れていたデイミスが出てきた。

「結局相談してませんね」

照矢は何も言わず何もこたえる気がないようだ。

「あなたのことをスバル様たちが知つても前のよつにはならない
と思いますよ」

デイムネスの言葉を聞くと照矢はある光景が頭に浮かんでいた。
学校の教室で生徒たちは楽しそうに校庭へ遊びに行っているが照矢
だけ教室の窓から広がる空と校庭で遊んでいるみんなを見ていた。

暗い教室の中、一人で。

「・・・今日は疲れたからこのまま寝るから。デイムネス、今日はおつかさま」

照矢はそういうとそのまま眠りに付いた。デイムネスは部屋の電気を消した。

「隠せずにいることは難しいことですし、隠している方もつらい
ですよ・・・」

寝ている照矢を心配するみづ元とハンターの中へ戻つていつた。

知られたくない」と（後書き）

少しの間、照矢がよく出てくると思います。
感想等よろしくお願いします。

引越し

・ゴダマタウンー

スバルはあれからWAXAの医務室で一日安静にし、体がだいぶ治つたので朝、家に向かつっていた。

電波変換で移動するとウイルスと戦闘になるので本調子ではないスバルにあまり戦いを進められないでの、電波変換をせずにウェーブナイナーでゴダマタウンに向かつていた。

スバルが自分の家に来ると入れ違いにトラックが通った。スバルは気にして家に向かつた。

スバルが家に着きだいま、と言いながら入ると家の中にはあかね以外に誰かがいたようで走つてくる足音が聞こえた。スバルを迎えたのは・・

「おはよう。スバル君」

「え、み、ミソラちゃん！？」

ミソラだった。その後から何氣ない様子であかねがエプロン姿で來た。

「あら、スバル。お帰りなさい」

「ただいま。ねえ、それより何でミソラちゃんがいるの？」

「え？メールを送つたはずなんだけど」

ミソラに言われてスバルはハンターを調べると開けていないメー

ルが来ていた。声に出しながらメールを読んだ。

「『スバル君の家に引越しして来たよ。これからよろしくね』・・・
・つて、ええー！」

メールを読み終えた真っ先にあかねに聞いた。

「ちよつといじりうつことなの母さん」

「どうもうれしくて書いてある通りよ」

あかねは当たり前でしょと言っている表情でリビングに戻つてい
つた。スバルは靴を脱ぐと追いかけでリビングに行つた。

「だつたら、教えてくれてたつてよかつたじやない」

「あら、言つてなかつたかしら」

あかねはついついさつき朝食を食べ終えたみたいで食器を洗つていた。
スバルは聞いてないよ、とぼやいていた。すると、ミソラがスバル
の隣に来ていた。

「どうしたのスバル君。もしかして、私のこと嫌いなの？」

ミソラは泣き顔（演技）でスバルに聞いた。

「いや、そういう訳なくて、ただ聞いてなかつたから驚いて・・・

「それならよかつた」

ミソラはいつものように笑顔になるとあかねを手伝いに行つた。スバルはハンターを見ているとミソラ以外にメールが来ていることに気がついた。

「（あれ、委員長たちからも来ている）」

送られてきたメールは次の通りだ。

ルナ・ミソラちゃんがコダマタウンに引っ越していくと聞いて手伝いに行つたけどまさかね。学校に来たら話があるから覚えときなさいよ。

ゴンタ・キザマロ・スバル、学校に来たら覚えておけよ。

スバルはゴンタとキザマロが同じ文面だったことに少し面白く思つたが嫌な感じしかしなかつた。

「（……なんだか）。委員長たちが怖くなつてきた）」

「スバル君、朝ご飯まだ食べてないでしょ。用意したよ」

ミソラはいつものように笑顔でスバルに言った。スバルは先にご飯を食べたいようで椅子に座るなり食べ始めた。

「そりいえば、学校は？」

「今日は休みだよ。ねえそれより、スバル君つてこれから何か用事がある？」

「学校の宿題を終わらせないといけないから。どうしたの急に？」

スバルの前に座ったミソラは率直にスバルに聞いた。しかし、スバルの答えを聞くと少しがつかりしたようだが「何でもない」と言うとあかねの方に行つた。スバルは何なんだろう、と思つて首をかしげていた。

朝食を食べ終わると食器をかたづけ、宿題を終わらせるのに自分の部屋に行つた。

「数時間後」

「やつと終わった」

スバルは椅子に座つたまま背伸びをしていた。ウォーロックは毎度のこと暇だ、と言う理由で一人でウイルス狩りに行つていた。スバルがやり終えた宿題をかたづけているとミソラが入ってきた。

「スバル君、宿題終わった？」

「うん。ちょうど今終わったよ。どうしたの？」

「えっとねえ・・・これから暇なうさ

ミソラが言いかけたときスバルのハンターが鳴つた。スバルは普通どおりに「あ、電話だ」と言つたがミソラにとつてはタイミングが悪いとしか思つてなかつた。スバルはハンターを操作してエアディスプレイを出したが画面には何も移つてなく音声しか聞こえなかつた。

「スバル君、今いい？」

すると突然ミソラの声が聞こえた。スバルは隣にいたミソラのほうを見ると首を振っていた。今には本人でも驚いたようだ。

「お~い、どうしたの？聞こえてる？」

「・・・ねえ、誰なの君ミソラちゃんじゃないよね」

「あれ？バレルの早！何で気がつくのや〜。まだ全然話してないんだけどさ〜」

電話の方からまだミソラの声で聞こえていたが、少しすると映像が映った。

「あ、アオイちゃん！？」

そこにはアオイが映っていた。いや、アオイだけではなく近くにはツカサと雪島がいた。アオイはスバルたちを見るとアチャーと残念そうな様子になった。

「なんだ。ミソラちゃんがいたのか。そりや、すぐにバレルか」

「え、え？ねえ、今どうやって私の声を出したの？」

ミソラが当然の質問をするとツカサが苦笑しながら答えた。

「知りたかったらWAXAに来てみれば？ついでにスバル君にPMを渡したいらしいし

スバル達はツカサ達に今行くよ、と伝えると通信を切った。そこに丁度よくウォーロックが戻ってきた。

「ん？どうしたんだ二人とも？」

「ウォーロック、すぐにWAXAに行くよ」

スバルはそう言つなりウォーロックに質問の時間を与えずハンターに戻し玄関へと向かつた。スバルとミソラはあかねに一言言つと外に飛び出し電波変換しウェーブロードでWAXAに向かつた。

- WAXA -

スバルたちがWAXAの中に入りアオ達がいる部屋に向かつた。二人が入ると照矢と暁もいた。

「あ、やつと来たんだ。遅かつたねスバル君」

アオイはまたしてもミソラの声で話した。それを聞くなり雪島、照矢、暁、ツカサの四人は笑いをこらえていた。スバルたちは何でミソラの声で喋れるのか疑問に思つているらしく直接本人に、それも一人同時に聞いた。

「――何でアオイちゃんがミソラちゃん（私）の声で話せるの？」

これまた一人がハモッタので四人に入れてアオイまで笑つた。そんな何の説明もせず笑つている四人に機嫌を悪くしたスバルとミソラはそのまま帰ろうとした。それを見たアオイは、笑いを堪えながらスバルたちに言った。

「あ、ちょっと待つて。声を変えたのはこれだよ」

アオイは自分のハンターを見せた。

「普通のハンターじゃないの？」

「違うんだよミソラちゃん。これをこうしてひとつ

アオイはハンターで何かを設定すると叫んだ。

「こうゆう風に声を変えるんだよ、ミソラちゃん」

「あ、僕の声だ」

今度はスバルの声で話した。ミソラは興味津々でアオイのハンターを借りて使い方を教えてもらっていた。

「ところでもや。この変声機。誰が作ったの？」

「それね、雪島君が作ったらしいんだ」

ツカサが答えると笑うのを止めてエアディスプレイを操作してい る雪島を見た。ミソラ達は雪島が作った変声機で遊んでいた。

「わ～これすげーね。結構面白いね」

女の子の口調で暁の声が聞こえたので一瞬、遊んでいる一人と暁以外全員が引いた。

「・・・スバルたちの時は面白かったが実際にやられると腹が立つな」

「ハハハ・・・けどこれはこれで面白いね」

少し不機嫌な暁を見ながら照矢が言った。雪島はエアディスプレイを片付けるとアオイのハンターを取り上げた。アオイは取り返そうとすると雪島はすぐにハンターをかえした。アオイは変声機の機能がなくなっていることに気がつくと雪島が言った。

「遊びは終了。お前すぐに遊ぶからな。かすんじゃなかつた」

アオイはつまんないの、と眞つと雪島がスバルにPGMを渡した。

「一応やってみたけど、多分前のよひなことはないと思つ。けど、何があつたらすぐに言つてね」

「うん。分かつた」

スバルはPGMを受け取ると暁がある提案をした。

「よし、ちゃんと出来るかどうか実戦でやってみよひじゃないか。どうだ? スバル久し振りに一戦やらないか?」

「ちよつと待て。それなりこの俺も混ぜる」

「ツカサ、じゃなくてヒカル君かな?」

暁の言葉にツカサ、ではなくヒカルが乗ってきた。性格や言葉遣いが一気に変わったので照矢はすぐにヒカルだということに気がついた。

「あ、それなら私も混ぜて」

「アオイちゃんが行くなら私も」

「ちょっと待て、何でこんなに人数が多くなるんだ?」

アオイにミソラも混ぜてほしいと言つと暁は慌てていた。暁はまさか、と嫌そうな顔で照矢を見た。暁の視線がいたかつたのか照矢は「僕は見学と言つことで」と言つた。

「うーん。ツカサ君とヒカル、ミソラちゃんとアオイちゃん、それから暁さん・・僕も入れて六人?」

「じゃあ、スバル君一人対私たち全員・・・」

「ちょっと待つて! それ本氣で言つてるの? アオイちゃん

スバルはアオイの提案をすぐに断ると面白くないな、とアオイは言った。すると今度はヒカル・・・でわなくツカサが言つた。

「ここは平等に三対三かな?」

「あ、ツカサ君、思いつきりやる気なんだ」

照矢はツカサの様子を見て言つともちろんだよ、と答えた。雪島は戦闘データを取るための準備をしてるらしくエアディスクプレイを操作していた。やるなら速くやつてもらいたいらじく雪島がスバルたちに言つた。

「三対三にするなら速くチーム決めてよ

「俺とスバルが別れるだろ、つてことはツカサたちが・・・」

「私スバル君と組みます」

「私も」

暁がチームを決める前にミソラとアオイは希望を言った。スバル達のなかで反対する人はいなくチームはスバル・ミソラ・アオイで、暁・ツカサ＆ヒカルのチームに分かれた。スバル達はWAXA専用の練習場に向かった。

引越し（後書き）

ミソラがスバルの家に引っ越ししてきました。
WAXAでの話がメインでしたが

感想等より詳しくお願いします。

- WAXA 練習場 -

練習場はコダマ小学校の運動場より少し広いぐらいの大きさで天井は電波で出来た壁が覆っていた。スバル達六人はすでに電波変換していた。照矢と雪島は上の方にある部屋でスバルたちを見ていた。

「さて、久し振りだなこうして戦うのは」

「そうですね暁さん。ティーラのとき以来ですね」

「話はいいから速く始めようぜ」

暁とスバルは過去のことを振り返っているとヒカルは速く始めようぜとウズウズしている様子だった。ツカサはそんなヒカルを見てため息を付いていた。暁はスバルとの話をやめ雪島たちの方を見た。

「じゃあ、そろそろ始めるか。雪島、開始の合図たのむぞ」

「はい、はい。みんな大丈夫だね。それじゃあ、ウェーブバトル

「ライド・オン！」

言ひなりスバル達は駆け出した。

「あ、始まつた？」

雪島が開始の合図をしたあと部屋のドアが開き照矢が入ってきた。両手にはコーヒーと紅茶の入ったコップを持っていた。雪島はエアディスプレイを出してデータを取り始めており照矢のほうを見ずに「うん、始まつたよ」と言つた。そんな雪島の近くにあつた机にコーヒーを置いた。

「コーヒーでよかつたよね。わあ、みんなすごいね」

「確かにね。照矢君も強いでしょ」

雪島は照矢がくれたコーヒーを少し飲むと照矢に尋ねた。照矢は下で戦っているスバルたちを見ながら小さく言つた。

「そんなことないよ。それに、むしろその逆だよ」

雪島は手を止め照矢を見ると数字や文字が並んでいるエアディスプレイのほうに向き直つた。

照矢が雪島と少し話している頃、スバルたちは・・

「行くぞスバル！ ロックオンソードー！」

「いっしだつて行きますよ暁さん。エドギリブレードー！」

暁の高速移動の攻撃に対しスバルはエドギリブレードで合わせて攻撃した。剣と剣がぶつかり合い火花が散つた。両者はすぐに距離を取るとスバルの方からヒカルがエレキソードを構えて向かつてきていた。

「相手は暁だけじゃねえぜ」

「それはこっちもよ、ショックノート！」

ヒカルがスバルに切りかかつたとき突然音符が飛んでくるとヒカルに直撃した。ヒカルはミソラの攻撃を受けると暁の近くのところまで距離を取つた。笑みを浮かべながら。

「口ケットナックル！」

「簡単にはやらせないよ。フリーズボール」

後ろの方からのツカサの攻撃はアオイの攻撃とぶつかり合い残ったフリーズボールがツカサに向かっていった。ツカサは周波数変換でかわすと暁たちのところに移動した。

「うまくいくと思つたんだけどね」

「スバルだけではなくミソラ達もやるよになつたな」

暁に褒められたミソラとアオイは嬉しそうだった。

「だが、これからが本番だ。行くぞー！」

暁はアッシュドブラスターの剣を構えると駆け出した。暁の速さはさつきよりも速くなつていた。

「パルスソング」

ミソラは音波を放ち攻撃した。暁は速度を緩めずそのまま上に跳

んだ。それに合わせてアオイも飛び暁に向かつて鉾を振った。

「もう一スノウフロウズン」

鉾が青いオーラを放つた。暁はあせった様子もなくスバルの方を見ていた。そんな暁に遠慮なしに振った。

その時、アオイの目の前に黒い影が現れたと思うと電気を纏った拳が飛んだ。アオイは突然で防御が間に合わず地面に向かつて吹き飛ばされた。

「アオイちゃん！」

「よそ見をしてる場合か？スバル」

暁は向きを変えずスバルに向かつてきていた。スバルは迎え撃とうとしたがミソラが前に出た。

「ショックノート！」

アンプを出し多数の音符が暁に向かつた。暁は周波数変換で真逆の所に移動した。ミソラは向きを変え再び攻撃しようとしたが今度はツカサが目の前にエレキソードを構えていた。

「僕もいるよ。はあ！」

ツカサはエレキソードを振り、ミソラはバックステップでかわした。一方暁はミソラたち二人がツカサ、ヒカルと相手をしている間にスバルの後ろに移動していた。手に持っていたアシッドブラスターの剣は収まっていた。

「後ろを取られたらダメだろ。バルカン！」

暁の持っていたアシッドブラスターから無数の弾丸がスバに向かつて飛んだ。

「クリムゾンオーラ」

スバルは暁の方を向きある一枚のバトルカードを使った。すると、赤黒いオーラがスバルを包んだ。暁のアシッドブラスターから放たれた弾丸は全てオーラに弾かれた。それを見た暁は今度はアシッドブラスターからワイドウェーブを放つた。オーラはワイドウェーブに当たると打ち消しありげなく消えた。

「見たことないバトルカードだな？」

「今のですか？雪島君からPGMを渡されたとき一緒にもらつたんです」「

「スバル君にあげたって、もしかしてあのバトルカード雪島君が作ったの」

照矢はスバルが使ったバトルカードの性能を見るとエアディスプレイで戦闘データを取っている雪島に聞いた。

「うん。時間の合間に作つてみたんだ。ノイズ率を上げるのに一度いいカードだと思ってね」

「どうして？」

「あのカードはクリムゾンって言つてるからノイズを使うんだけど、あのカードは空気中のノイズをクリムゾンに変えてそれをバリアとして纏うんだ。攻撃をある程度防げば消えるけど元はノイズから出来たもの。だからノイズ率は上がるし身を守ることが出来るんだよね。少しリスクがあるけど・・・」

「ふうん。・・・ってちょっと待つて。空気中のノイズをクリムゾンに変えてバリアとして使うつて、もしかしてあのカード、再生能力が付いているつてことはないよね？」

照矢の質問に雪島は笑みを浮かべ見てみれば、と言つた。

ミソラとアオイの一人はツカサとヒカルのコンビネーションで追い詰められており背中合わせの状態で戦つていた。そんな中スバルが新しく使つたカードのことを聞くとツカサが言つた。

「スバル君もバトルカードもらつたんだ」

「スバル君も、つてもしかして・・・」

ミソラはアンプを出しヒカルに向かつて音符を飛ばしながら言った。

「そもそもしてだ。バトルカード、ウォータースパウ

ヒカルはミソラの攻撃をかわした後、地面に片手をつけた。すると、ミソラ達の近くや他の地面に青い円が出来るとその円から水が噴出した。水は天井に届くぐらいの高さで勢いよく出た。ミソラ達は円が現れていないところに移動しツカサとヒカルも探した。

「水が邪魔で姿が見えないね」

ミソラは近くにいるアオイにそうこうとアオイも頷いた。スバルと暁の周りにも水が吹き出ていたがウィザードに任せて安全な場所にいた。

「ツカサ君がバトルカードを使うなんて意外だね」

「雪島の奴、勝手にバトルカード作りやがって・・・後で覚えてるよ」

スバルはミソラ達の方もしつかり見てくるようだ。雪島はびつやら許可なくバトルカードを作ったようで暁は仕事をやりせよつと考えていた。

「（それについても、ツカサ君がバトルカードを使つたとしても水属性のカードを使うなんて、何かあるのかな）」

スバルは暁の方に気を配りながら辺りを見ると水はまだ止まる様子もなく依然として出ていた。そのため地面には足が浸かるほど水が溜まっていた。

「（・・・もしかしてこの水つて）」

スバルはツカサの作戦に気づいたようでミソラ達に教えようとしたがツカサ達の方が速かつた。

「ライティングブラット！」

声の聞こえるほうをミソラとアオイが見たとき足の方に電気が通つたような痛さがきた。スバルの周りにはさつきと同じように赤黒いオーラが覆い電気がオーラを壊すように動いていた。

ミソラとアオイは何が起きたか分かつてないようだがともかく上に逃げようとした。

「・・・体が動かない」

「これってマヒー?」

「ミソラ、アオイちゃん。上よ

ミソラとアオイはハープの言われたほうを見ると上にはツカサとヒカルが片手を手を組み大技の構えをしていた。

「これで終わりだ!」

組んだ手の先のほうには電気が集まつてた。ミソラとアオイはなんとかかわそうとしたが体が動かないのどうしようもない。ここに来て一人はツカサが使つたバトルカードの意味に気づいた。

「「ジユミニサンダー!」」

溜まつた電気をレーザーとなつてミソラとアオイの一人を包み込んだ。

「うわ~。ツカサ君とヒカル君。容赦ないね」

照矢はジユミニサンダーを撃つた後、電波変換が解け氣を失つて

いる一人を見て言った。

「確かにね。あのカード渡すんじゃなかつたかな。照矢君一人をここに連れてきてもらえる?」

照矢はディムネスにつれて来てもらつようと言ひとてディムネスは部屋から出て行つた。

スバルを包んでいたオーラは消えていて二人は今は地面にたつていた。未だに水は溜まつたままだが。ディムネスがミソラとアオイを雪島たちの部屋に連れて行くのを見るとスバルの後ろにツカサとヒカルが来た。来るなり暁が怒鳴つた。

「てめえ、ヒカルだらう!? 攻撃するときぐらい合図かなんかしろ!俺も巻き添えを食らつたじやないか!」

暁はヒカルが技を使つた時水に浸かつてた様でミソラたちと同じように受けたらしい。

「あ、それはすまなかつたな暁。わざとじやないから安心しろ」

「（いや、絶対わざとだらうな）」「

ツカサとスバルはまったく同じことを心中で思つていた。

「さて、どうするスバル君?二対一になつたけど

「ウオーロック。今ノイズはどれくらじ溜まつてる?」

「200%だな。いけるぜ」

ウォーロックが言つたことを聞くと暁たちは真剣な顔つきになつた。

「行きますよ。ファイナライズ！」

スバルが叫ぶとノイズが球状にスバルを包み込み辺りのノイズが吸収された。

「ブラックエース！！」

球状のノイズの中から漆黒のアーマーを見に付け翼があり右手に剣を持ったロックマンが出てきた。

3体3（後書き）

オリジナルのバトルカードを出してみました。
感想等よろしくお願いします。

蘇ったノイズの力

スバルを包んでいた球状のノイズが弾けるように消えると共に漆黒のアーマーを身に包み翼がありノイズの剣を持ったロックマンが出てきた。

スバルは自分の姿を見て失敗はしていないこと確認した。

「失敗せずにうまくできたな。それにしてもブラックエースか」

暁は成功したことうれしく思つていていたが同時に嫌な様子だった。ファイナライズの二つの姿はどちらも協力だ。そのうち機動力に特化しているのが今のスバルの姿、ブラックエース。

「（・・すゞい。前とはまるで違う。体がとても軽く感じる）」

スバルはブラックエースの機能が前とはまるで違い強化されることを感じていた。ヒカルはスバルの姿、ブラックエースの力を雰囲気で感じているようで体が震えていた。しかし、その震えは恐怖ではなくむしろ興奮しているようだ。

「つへ、ノイズの力、どんな物か見せてもらつぜ」

ヒカルは叫ぶとエレキソードを構えた。ツカサはヒカルの様子を見ると少し呆れていふよつだつた。

「（はあ～。いつからヒカルはバトルマニアになつたんだろう？それにもスバル君のあの姿、すごい力が感じる。気を引き締めていかないと）」

ヒカルはスバルとの距離をある程度取るとスバルに向かつて駆け出した。水はすでに止まっており部屋はひざの高さまで水が溜まっていた。ヒカルに合わせてツカサも駆け出した。

スバルはヒカルが向かつてくるのを見ると剣を構えた。すると、スバルは一瞬でヒカルの目の前に移動していた。

「！！」

ヒカルはとっさにエレキソードをガードに回した。スバルのノイズの剣はエレキソードによつてガードされたがヒカルは後ろに押されていた。足で踏ん張るのがやつとのようで地面にはひびが入りだした。

「暁さん見てないで手伝つてください」

ツカサはエレキソードをだし、遠くでデータを取つていた暁に叫ぶとヒカルの援護にまわつた。暁はアシッドブラッスターを構えると戦闘に加わつた。

スバルはツカサと暁が向かつてきているのを見ると剣を振りヒカルを吹き飛ばした。スバルはすぐに追い討ちをかけるように斬撃を飛ばした。その斬撃はノイズで出来ているようで先ほどスバルを包んだのと同じ色をしていた。

ヒカルは空中で身動きが取れないため周波数変換でかわしツカサと暁も同様に周波数変換でかわした。斬撃はそのまま壁にぶつかり壁はえぐれたように大きな穴が開いていた。

「・・・すごい威力だね」

「おいおい、加減なしか」

ツカサと暁はそれぞれの感想を言った。

「おい、スバル。今どんな技だ?」

暁はスバルに聞くとスバルは途惑つたような感じだつた。

「え、えつと・・今の普通に剣を振つただけなんですけど・・・」

「・・・・・は?」

スバルのまさかの答えに三人は奇妙な声を上げた。

スバルの答えに驚いているのは暁たちだけではなかつた。

「剣を振つただけであれはないと思つけど」

照矢は未だに砂煙がたつてゐる壁を見ながらいつた。

「・・・・まづいな」

雪島はエアーディスプレイを忙しそがしそうに操作してゐた。

「何がまづいの?うまくファイナライズできているみたいだし、力もすごいと思うけど」

「ファイナライズできたのは良いとして、問題はあの力の方だよ

照矢は雪島のほうに視線を変えると雪島は話しかけた。

「さつきのは大半がノイズによる攻撃みたいなんだけど、濃度が濃すぎるんだよ。さつきの空気中のノイズ率は200%で、スバルがファインライズしたことによつて今はほぼゼロに近いはずなんだけど今の斬撃のノイズ率が300%をゆうに超てるんだよ」

「え、それはないんじゃないの？」

「攻撃が当たつた壁のところを見て」

照矢は攻撃が当たつた壁を見ると赤黒い形のものがへばりつ正在のものもあれば浮かんでいるのがあつた。

「あれは・・クリムゾン?」

「うん。だけどそれだけじゃないんだよ。スバルのハンターに引き寄せられるようにノイズがスバルの周りに集まっているんだよ」

「それであれだけの攻撃力があるんだ。すごいね」

照矢が空中を浮かんでいるスバルを見ながら言つと雪島が静かに言った。

「ノイズが集まるだけなら良いくだけね」

暁たちはスバルのノイズの力の大きさを知りうかつに攻撃を仕掛けたことが出来なくなつた。

「行きますよー」

スバルは翼を羽ばたかせ暁たちのほうに向かつた。

「（普通の攻撃だけであれば、ノイズフォースピックパン NFBが来るとまずいな）」

暁はすばやく対策を立てるとツカサとヒカルに指示を出した。

「ヒカルとツカサは自分たちのフォーメーションを保ちながら攻撃。常にお互いを援護しあえるようにお互いの周りをしつかり見ろ」

「分かりました（分かつたぜ）。」

ツカサとヒカルは固まらないように距離を取りスバルの方を見た。スバルは向きを変え急上昇した。ある程度上に来ると剣を暁たちの方へ向けた。

「NFB・・・」

「必殺技が来るぞ」

暁の言葉を聞くとツカサとヒカルの顔が険しくなった。

「（今までスバルが使つてきた必殺技の対処方は頭に入ってる。さあ、どれが来る・・）」

暁もどんな技が来ても対処できるように構えた。スバルの周りには無数の小さい青い光が輝いていた。

「ティセンド・サーベル」

スバルが叫ぶと小さな光が円錐上の剣に変わり暁たちに向かつて

飛んでいった。

「『』の技は見たことがないぞ！－！」

「ツカサ！迎え撃つぞ！」

「え、分かつた」

「ヒカル！迎え撃つのは止めておけ！」

ヒカルは飛んでくる剣の速さを確認すると十分迎え撃つことが出来ると判断したらしく、ジロミー・サンダーを撃とうとした時に暁の声が聞こえた。一人が振り向こうとすると剣が地面に刺さっていた。ツカサ達がいた場所は砂煙が立ち上り状態が確認できなかつた。

「言わんこっちゃない」

「暁さん。まだ終わってませんよ」

暁はスバルの声が後ろから聞こえて振り向くと片手には黒い球体が現れていた。スバルは暁に対処する時間を与えず黒い球体を暁に向かつて投げた。球体は大きくなり暁を包み込んだ。そのときにはスバルは剣を後ろに引き攻撃の態勢をとつていた。

「ブラックエンド・・・ギヤラクシ－！－」

スバルは高速で暁が入っている球体を真つ二つに斬り、球体は爆発した。爆発が止むと暁が地面に倒れていた。電波変換は解けてはいなかつた。

「はい、終了。スバル君たちの勝利。スバル君は悪いけど気を失っている三人をここに連れてきてね」

突然エアディスプレイが突然現れたと思うと雪島が戦闘終了を伝えた。それから、暁、ツカサ、ヒカルをつれてくるように頼むと消えた。

スバルは電波変換をときウォーロックヒュードー、アシッドたちに協力してもらい練習場から出て行つた。

ウォーロックとアシッド

スバルが雪島と照矢のいる部屋に入ると中にはミソラとアオイもいた。しかし、アオイは雪島と内容は分からないが言い合っているようだ。

「私もスバル君たちのようなバトルカード作つてよ」

「ダメ。アオイちゃんは戦闘経験がまだ少ないのでしょう。だからダメ」

「何で戦闘経験が少なかつたらダメなのよ」

「うまく制御出来なくなるかもしないから。それに、さつきも言つたけどスバル君たちに渡したカードは初めて作ったやつだからうまくいくか分からないんだよ」

「うまくいってたよね。一枚とも」

「だから・・・」

一人のループ会話で話の内容は大体把握できたようだが会話に入ることが出来ないようだ。スバルが入り口に立つていると端の方で二人の会話を見ていたミソラと照矢がスバルに気づいたようでスバルの方へ歩いてきた。

「スバル君お疲れ様。私は途中で負けちゃつたけどスバル君の戦いすごかつたよ」

ミソラはツカサを椅子に座らせて言った。

「ありがとう。でも、これはいつたい」

「ははは・・・アオイちゃんがスバル君とツカサ君だけいいの貰つてゐることで、今交渉中みたいなんだけど・・止めてもらつていい?」

「え、僕が?」

「うん」

スバルと照矢が話しているとツカサが目を覚ました。

「・・あれ?どうしたの?」

「あ、気がついたツカサ君」

「うん。といふでどうなつてるの?雪島君とアオイちゃんがいろいろ言い合つてるけど」

「交渉中らしいよ」

ツカサはスバルたちに聞くとミソラが変わりに答えた。ツカサも二人の話を少し聞いて納得したようだ。ここで、不思議に思ったのかミソラがスバルに聞いた。

「あれ?スバル君、暁さんは?」

「え、ウォーロックたちに頼んでいるはずなんだけど・・」

スバルが自分が入ってきた入り口を見るとドアが開きウォーロックとアシッドが入ってきた。というよりドアを突き破つて入ってきた。

「ビーストスイング！」

「ギルティスラッシュ！」

お互いの攻撃がぶつかり合い火花が飛んでいた。それを見たスバル達は一瞬状況が判断できなかつたがすぐにとめに入つた。雪島とアオイも話を止めウォーロック達を止めに入つた。

「ちょっと、ウォーロック、何やつてんのさ。やめなよ

「アシッドも戦うのはやめなよ」

スバルとツカサが止めるように言つたが一人とも聞く耳を持たず止めようとしたがつた。

「おらー、ビーストスイング！」

「あまいですよ。ギルティスラッシュ！」

ウォーロックとアシッドの争いのせいで部屋に置いていた机や椅子がいくつか破壊されており、無事な椅子なども投げあいスバル達は机などの物陰に隠れた。

「ちょっと、ウォーロックいい加減にしてよ！」

「聞いてないね」

「・・・スバル君。ちょっと、ウォーロックにお仕置してもいいかな?」

「止めるんならいいよ」

スバルは未だに飛んでくる椅子や机などから身を守りながら言った。雪島は飛んでくるものに当たらないように姿勢を低くするとHディスプレイを操作した。すると、斬りあっていたウォーロックとアシッドを囲うように光の棒が立つとあつという間に檻ができ争いは終わった。

スバル達は物が飛んでこないことを確認するとウォーロックとアシッドを叱った。

「もうー何やってるのーー部屋が無茶苦茶じゃない」

アオイは荒れ果てた部屋を見回しながら言った。

「あーあ、部屋の始末が大変だね」

「まあ、ここは原因であるウォーロックとアシッドに任せよう」

「照矢君の意見に賛成」

それからスバルたちもソラに続く廊下に賛成した。ウォーロックとアシッドはそんな話は聞く余裕がないようだった。なぜなら・・

「(なぜ、檻に剣が・・)」

「（しかも、俺は何本かに斬られたぞ）」

捕らえである檻にはウォーロックとアシッドの姿をかたどるよう
に剣が隙間なくあつた。刃先に向けて。なので、迂闊に動くことも
出来ない状態であった。

スバル達は気づいてはいるだろうが見なかつたことにして話を進
めた。

「どこひで暁さんは？ウォーロック達が連れてきてるんじゃなか
ったの？」

「そりだよ。ウォーロック、暁さんは？」

照矢がウォーロックに聞くとスバルも聞いた。

「えつとな、・・」

「そもそも何で暴れてたの？」

アオイが戦いではなく暴れてたと聞くと少し落ち込んだようだ。
アシッドがスバルたちに説明を始めた。

-回想-

「くそ、ジエリーのやつ逃げやがって」

「口を動かす暇があるならじつかり持つてください」

ウォーロックたちは暁をひこするように運んでいた。

「お前はいちいちうるせんだよ」

「何ですか？何も考えずただ突っ込んでいくだけの戦い方しか出来ず、何も学ばないウォーロックに言われたくないませんね」

「あんだとーてめえ、俺が何も考えてないと思つてるのか！？」

「違うんですか？」

ウォーロックは切れ氣味になつており、アシッドは冷静で言つた。

「はん！俺より弱いやつがいちいち言つてんじゃねえぞ」

「それはあなたの方ではないんですか？」

「何だとー？」

「何ですか？」

一人は言い合いになり、二人から忘れられた暁は地面に倒れていった。

「（いてて・・少し痛むな。お、アシッドとウォーロックがいるじゃないか）おーい、二人とも・・」

「上等だー匕つちが強いか、今から戦つてみようじゃないか

「良いですよ。まだ決着が付いてないですからね」

さつきの戦いで疲れていたためあまり大きな声が出せないが、暁の精一杯の声はむなしくウォーロックたちに届いてはいないようだ。ウォーロックとアシッドはもはや暁のこととは忘れておりお互いの間に火花が散っていた。

先に動いたのはウォーロックだった。

「ぐらえービーストスティング！」

「そんなの当たりませんよ」

アシッドはウォーロックの攻撃を軽々よけた。ウォーロックの攻撃はどのまま壁に当たり辺りに破片が飛び散った。

「いて。お、おい、アシッドにウォーロック、戦うなら外でやれ。それより、俺を忘れ・・・」

「ギルティスラッシュ！」

「当たるかよ」

暁の叫びに近い言葉も、もはやウォーロックたちには聞こえてないようだ。また、破片が暁の方に跳んだ。ウォーロックとアシッドはそのまま偶然なのかスバルたちが集まっている部屋の方へ行きながら斬りあつていた。

「お~い、アシッド、ウォーロック。俺を忘れるな~」

暁が叫んだときにはウォーロックたちはもつといなかつた。

-回憶終了-

「それで暁さんを置いてきたんだ」

「「はー（ああ）」」

ミフライはウォーロックとアシッドに確認すると頷いた。

「じゃあ、探しに行こう」

スバルは部屋から出て暁を探しに行った。それに続いてツカサ、ミソラ、雪島、アオイ、照矢の順に部屋から出て行った。

「おい、ひょっと待て！」の檻ビリビリかしろ！スバル、雪島…」

ウォーロックは身動きが取りずらい中で叫んだ。アシッドはうるさそうに見ていた。ドアが閉まり少しするとアオイが入ってきてハンターを操作すると檻が消えた。

「二人はこの部屋を掃除してから追いかけてきてね。じゃあ

アオイは伝えることを伝えるとドアを閉め走つていった。ウォーロックとアシッドは改めて部屋を見渡した。部屋は机や椅子があちこちに倒れていて、花の入った花瓶が割れてあり、壁も傷だらけだった。

「……それを俺たちが掃除するのか？」

「みたいですね」

「・・・アシッド。後は任せた

「逃がしませんよ」

アシッドは逃げようとするウォーロックを捕まえると掃除を始めた。ウォーロックはその後何度も逃走を図ったようだがアシッドに止められそのたびにぶつぶつと言っていたそうだ。

「あれ? いないね。何処に行つたんだろう?」

スバル達はウォーロックたちの話で暁のいた場所に来ていた。周辺はウォーロックたちのせいで壁は傷だらけで破片がそこら辺に飛んでいた。

「ううん。ちょっと、暁さんの部屋をのぞきに行こうよ」

「いいよ」

スバル達は暁の部屋に向かつた。

「あ、いた」

ミソラが最初に入ると部屋の隅で暗いオーラを放ちながらしづくまっていた。ミソラが部屋に入るとスバルたちも中に入った。

「どうしたんですか暁さん。暗くなつすぞですよ」

「アオイちゃん。多分聞けないと困りますよ」

「暁さん。落ち込んで話しかけてしまつたまま

スバルが暁に声をかけてもため息を付くだけですべてまたま
だつた。

「はあ、暁ちゃんついとあるよね」

「やつが、ニギヒツカツの時せつかりしてこの辺で供みたいな
ときあるよね」

「それに、つまに棒を沢山食べて後始末してないし」

「大人なのにヒーローと言ひたるし」

「ハ、ミソラちゃんとアオイちゃん、それ以上言わない方が。暁
さん、さらに落ち込んでいるよ。ウォーロックたちに忘れられただ
けでも落ち込んでいるんだから」

「スバル君。最後のはいらな」と思つよ

ミソラとアオイの容赦なく言われ深く突き刺さったようだがスバ
ルの一言で元気を直したようだが最後の一言で初めの状態に戻つた。

「どうする?話しあいが始まらないけど

「まあ、氣力が戻るまでもうよ」

照矢と雪島は離れたところでスバルたちを見ていた。

予期せぬ出来事

落ち込んでいた暁が復活するのに30分近くかかった。そのころにはウォーロックとアシッドは掃除をすませ戻つてきていた。

「よし、じゃあ、まず結果を聞こつか」

暁は雪島に話を振ると話し始めた。

「HースノジョーカーPGMはうまく起動し、能力や威力は想像を超える力を發揮していました。ただ・・」

雪島は少し間を置くとニアディスプレイをスバルたちに見えるように出した。

「これを見てください。戦闘中のノイズ率なんですけどここ、急激にノイズ率が減つてますよね。ここで、スバル君がファイナライズしたんですけどその後、ノイズは増えてませんよね」

「みたいだね。ここから先は100%きつてるね」

「発生したノイズは攻撃のために吸収し威力を上げた。ノイズが増えない理由はそんなところだろ」

暁が予想を言った。

「多分そんなところでしょう」

「暁さん、一応自分なりに考えをまとめてたんですね」

アオイが言うと暁は手を組み当たり前だといつよつた態度を取つた。

「一応とはなんだ。俺はサテラポリスのヒースで、ヒーローなんだ。これぐらいは当然さ」

スバル達は苦笑すると照矢が雪島に聞いた。

「じゃあ、スバル君のPGMはもう実戦で使うことができるの？」

「それなんだけど。・・・スバル君、PGMをしばらぐの間、またかしてもらえないかな？」

スバル達は雪島の意外な発言に驚き雪島のほうを見た。

「え、なんで？」

「そうだぞ。PGMもつまく起動した。能力もバツチリだつた。なにか問題でもあるのか？」

暁は真剣な顔で雪島に尋ねた。

「ファイナライズした後のノイズの吸収がPGMや武器にならいんだけど・・暁さん、ノイズでの攻撃や戦いの後で発生したノイズはその後どうなりますか？」

雪島の突然の質問に対しても暁は当然といつよつと話しお出した。

「まず、ノイズでの攻撃だがしばらくたつと使つた分の倍に近い

量のノイズが発生する

「え、 なんですか？ 戦闘が終わってから、 ノイズは感じないから消えるのかと思ってたんですけど」

暁の説明にミソラが興味を持ったようで集中して聞いていた。

「ミソラそう思っているなら氣をつけたほうがいいぞ。 ノイズは数時間経つとクリムゾンに変わるんだ。 そしてさらに数時間経つと特有の磁気を帯びるんだ」

「磁気ですか？」

ツカサが説明の途中で暁に聞いた。

「ああ。 その磁気は発生してから時間が経つほど強くなつてな。 危険なのがここなんだよな、 磁気が強くなると人体に引き寄せられるようになるんだよ」

「え、 人体にしき寄せられるようになるんですか？」

「ああ。 だからミソラは特に氣をつけるよ。 知らないうちにクリムゾンが体内に溜まつているかもしれないぞ。 クリムゾンは体内に吸収されるとノイズに変わり様々な悪影響が発生するからな。 ところで、 雪島それがどうした？」

暁は説明し終えると身を乗り出し雪島を真直ぐ見つめた。

「・・・ファイナライズした後のノイズの吸収が気になりましてね。 あっただけの威力がある攻撃でノイズが100%切っているから吸収

の速度が速すぎると思ったんですよ。だから

雪島が続きを言いかけたとき暁が止めた。

「お前の言いたいことが分かった。スバルはいいか？」

「はい。分かりました」

スバルは頷くと雪島はPGMを渡した。雪島はPGMを預かるとハンターに入れた。

「よし、じゃあこれからみんなで何処かに・・・」

暁が切り上げようとしたときドアが開きクインティアが入ってきた。

「シドウ。長官が呼んでいるわよ」

「ああ、それなら後で・・・」

「だめよ。今すぐ行くのよ。それじゃあ、みんなまたね」

喋り出した暁をクインティアは強引に引きずるように連れて行つた。暁は連れて行かれるとい色々言つていたがそれも空しく連れて行かれた。

「暁さん、お仕事がんばってくださいね」

「やべ、これからどうするの？」

「せつかくだからみんなで、どこか食事に行かない？」

ミソラがみんなに聞くとツカサが提案した。今は一度正午。そろそろお腹もすぐごろだ。

「うん。それもそうだね。どこか良いところがあるかな？」

「それなら、いい喫茶店を知ってるよ。今から行ってみない？」

「いいけど、ちょっとみんなに聞いてほしい事があるんだけど、いいかな？」

アオイが言ひと照矢が不安そうな態度で言った。

「それじゃあ、話も含めてアオイちゃんの言ひ喫茶店でしない？ もう私お腹ペコペコだよ」

「それじゃあ、オアイちゃん案内頼んで良いかな？」

「いいよ。じゃあ、行こ」

アオイを先頭にスバル達は部屋をあとにした。

スバルたちがWAXAの出口まで来ると長官、暁、ヨイリー博士、クインティアが誰かと話していた。スバルたちが近づくと暁たちの話しが聞こえた。

「それでは先ほどのいたいた資料が前回、現時点で分かっている

データーの全てですね

「はい、そうです」

暁たちと一緒に話している人、三谷由人が暁たちに確認を取るようになつた。

「それでは、アドミストの件はそちらに任せましたよ。それでは・ん？」

由人が帰ろうと足を動かしたとき暁の近くで止まって見ていたスバルたちに気がついた。

「そちらの子供たちは？」

暁たちが後ろにいたスバルたちに気がつくと何でここにいる、と無言で訴えているようだった。照矢は由人の顔を見ると顔を見られないように下を向いた。

「ここは子供が自由に出入りしているのではないですね？」

「それはありません。ここにいる子供たちはアドミストの事件のときによくいた学校の生徒たちです。話を聞いていたんですね」

「え、クインティアさんそれって・・・」

ミソラが言いかけたとき照矢がミソラの口を手で塞ぎスバルたちだけに聞こえる声で言つた。

「うめん、今は何も言わないで」

照矢はそう伝えると手を放した。スバル達はなぜかはまったく分かつていないう状況だつたが言われたとおりにした。由人はそうでしたかか、というと照矢に気づいた。

「おや、君はもしかして、空慰君の息子の照矢君ではないのかね？」

由人に名前を言われた照矢はしぶしぶ顔を上げて真直ぐ由人の顔を見た。

「やはりそうか、君もアドミストにいたのかね？」

「はい」

照矢は簡単に由人の質問に答えると由人はスバルたちの顔を順番に見た。最後にスバルの顔を見ると暁たちのほうに向いた。

「それでは私はこれで。何か進展がありましたらそのつど報告をよろしくお願ひしますよ」

由人はそういう残すと外に出て行つた。由人がWAXAの前に止めてあつた黒い車に乗り姿が見えなくなるのを確認すると暁たちは体から力が抜けたようになり息を吐いた。

「何でのタイミングでお前たちが来るかな・・・」

「暁さん、さつきいた人は誰なんですか？」

「政治家の三谷由人よミソラちゃん」

「それよりお前ら、ビニカに行く様子だつたがいいのか？」

暁がスバルたちに言つとミンラとアオイが速く行こう、と駆け出した。残されたスバルたちも後を追いかけた。

スバルたちもWAXAから出て行き姿が見えなくなると長官が言った。

「それにしても、照矢君に助けられたな」

「予想外でしたからね。それより、彼は何で由人のことを知つてたんですか？」

「うーん。暁君何か知つてるかね？海月さんと赤瀬君は素直に色々教えてくれたが彼はあまり話してくれなかつたようだから分からないんだが」

暁は長官に言わるとハンターを操作し、ある画面を出した。長官とクインティアがその画面を見るとなるほどな、と言つた。

「ティア、ジャックのほうはどうなつてる」

「今のところは大丈夫そうよ。うまくいってるわ

「さて、我々も仕事に戻らうではないか」

長官が言つと暁たちは仕事に戻つた。

由人はWAXAから車で移動しており信号と渋滞で止まっていた。車の中には由人と運転手、秘書の瀬長ひさしの二人が乗っていた。

「由人さん、話しあいはありましたか？操作は進んでおりましたか？」

「いや、どうやら進んでないようだ。だが収穫はあった」

由人は窓の外を見ながら不適な笑みを浮かべていた。

「ヒ、言います

「空慰君のところの息子に会った」

「空慰といいますと、あのフレイグタウンのですか？」

「ああ。アドミストにいた、と言つていたが嘘だろうな。ひさし、少し調べておいてくれ。それと・・・分かっているな？」

由人は睨むような目つきでひさしに言つた。ひさしは了解です、と笑みを浮かべて言つた。二人が話している中、由人のハンターの中には暗闇の中、冷たい目をしたウィザードが目を開けた。

- 喫茶店 -

スバル達はアオイを先頭に案内されて、今店の入り口に立つていた。店はコダマタウンから少し離れている場所にあった。喫茶店は木造で作られていて周りには店と同じぐらいの高さの木が数本生えていた。

「ここがその喫茶店?」

スバルは目の前にある店を見上げながら言った。その店の名前は・

「・・・『夕焼け』?」

「そり。まあ、ともかく中に入るつよ」

アオイは店のドアを開け中に入つた。スバルたちも続くよろしく中に入ると喫茶店の中は多くの人がいた。スバルたちが中に入ると店の中からお盆を持ったスバルたちと同い年くらいの男の子が元気にいらっしゃいませ、と言つた。男の子はカウンターに紙を置くとスバルたちの方に小走りで來た。

「野咲君。^{やさき}席開いてる?」

「珍しいね。こんなに大人数で来るなんて。で、何名さまですか?」

「六人だよ」

「六人・・・多分開いてたと思つ。悪いけど自分で席を取つても
らつていい?」

「うん、分かつた」

野咲は申し訳なさそうに言うとカウンターの方に小走りで向かつた。スバル達は店の中を見回すと丁度六人が座れるような席が開いていた。スバルたちが席に座ると野咲が水を持つてきた。

「あれがメニュー表です。決まりましたらお呼びください」

「そんなに固くならなくていいのに」

野咲はお客様だからね、といつとカウンターに向かつた。スバルたちはそれぞれ椅子に座るとメニューを決め始めた。

「みんな料理決めた?」

アオイが聞くとスバル達は頷いた。アオイは忙しそうにカウンターやテーブルを行ったりきたりしている野咲を呼んだ。野咲は注文を取るとまたカウンターの方に向かつた。

「大変そうだね、あの子」

「まあ、丁度昼間だしね。けど、そろそろ減つてくれると思つんだ
けど」

「ねえ、それより照矢君、何か話があつたんじゃないの?」

ツカラサが聞いたとき野咲がサンドイッチと紅茶、コーヒーなどを持つてきた。スバル達は話の前にサンドイッチを食べ始めた。

「で、話つてなんなの？」

スバルはサンドイッチを食べながら聞いた。ミソラとアオイの二人は話より食べる方が優先らしく一皿目、三つ目とパクパクと食べていた。

「・・・僕と同じ小学校に来ていらない同級生がいるんだけど」

「登校拒否の人多いね。スバル君に雪島君も一時なってたし、あまりいないと思ってたんだけどな」

アオイは言ひとサンドイッチを一口食べた。

「悪かつたな、登校拒否で」

雪島は不機嫌そうに言つた。ツカラサは紅茶を飲みながらそれで、と聞いた。

「滝久 楓たきひさ かえつて女の子なんだけどもう一週間ぐらこになるかな」

「それで、その子、今どうしてるの？」

ミソラが食べるのをやめて照矢に聞いた。スバル達は二十個ぐらいあつたサンドイッチが消えていく皿を見て少し驚いていた。

「・・・行方不明なんだ。家にも何処にもいないんだ」

「え、いなくなつたの？」

ツカサが食べていたパンを置いて言った。

「うん。学校では自殺したんじゃないかつて噂もあるんだ」

「じ、自殺？・・」

スバルは飲んでいたコップを置き驚いたように言った。

「うん。けど、そんなはずはないと思つんだ。いや、絶対無い」

「・・何か根拠があるの？」

確信をもつて言つている照矢に雪島が聞いた。

「根拠はないよ。ただ、そんな気がするだけだよ」

照矢はさつきと違ひ表情は暗くなり自信がなさそうに言つた。雪島はしばらく照矢の顔を見ていたがフッと笑うとハンターを操作した。

「ううん。ねえ、スバル君これから時間空いてる？」

「うん、大丈夫だよ」

ツカサがスバルに聞くとミソラとアオイも大丈夫だよ、と言つた。

「僕は無理かな。ジャック君の手伝いしなきゃならないし

「え、みんな、それって」

照矢がスバルたちに聞くとスバルが当然と言つよつに言つた。

「よつするにその子を探しているんでしょ。だつたら、人数は多い方が良いよ」

「本当にいいの？」

「もちろんだよ」

照矢はツカサの言葉で希望をもてたよつに明るくなりありがとう、と言つた。スバル達は席を立つとアオイは野咲を呼んで会計をしにいつた。スバル達は先に喫茶店から出ると雪島はWAXAに戻つていつた。しばらくするとアオイが喫茶店から出でくると伸びびをした。

「さて、まずは何処から探す？」

「照矢君が住んでいるフレイグタウンから探した方がいいと思つけど」

「私もそう思つ」

スバルが言つとソラも賛成した。

「じゃあ、行こうか」

スバル達はフレイグタウンに向かつた。

-フレイグタウン-

ウヨーブライナーが駅に到着すると中からスバルたちが出てきた。スバル達は駅から出ると田の前に山や森など縁が一面に広がっていた。

「う~わ、す"いね」

「」^{ヒコ}がフレイグタウン

「じゃあ、探す前にまず町を案内しようか」

「それもそうだね。町を案内をしてもうつてからの方が効率がいいもんね」

風に当たつていたミンラは照矢に言った。

「それじゃあ、照矢君、町を案内してもらつらてもいい?」

「もちろんだよ」

照矢はスバルたちに言つと町へ歩いていった。

縁に囲まれた町

-フレイグタウン-

スバル達は照矢に町の中を案内してもらっていた。今は小学校の前に来ていた。

「この町は見ての通りだけど周りが山に囲まれていてとても静かな場所なんだけどね。で、ここが僕が通っているフレイグ小学校。こここの町の子供は大抵ここに通っているよ」

「え、大抵つてどういうこと?」

学校の校門に向かつて歩きながら説明した照矢にスバルが聞いた。
「この町には小学校はここにしかないんだ」

「え、ここにしかないの?」

「うん」

フレイグ小学校に入ると校舎に向かつて歩いた。校舎の前まで来ると照矢が言った。

「今日は休日だからもちろん校舎の中には入れないけどね」

「へへえ、二階建てなんだね」

ミソラは小学校を見上げて言った。スバル達はしばらくグランド

や学校の周りを見てまわると学校から出て行った。学校から出た後、町案内を続けた。

「ここがフレイグタウンの公園」

「公園も木や縁が多いいね」

「何だかこりうみつ公園も良いよね」

ツカサとスバルが話していると自転車で誰かが近くに来た。

「じゃんないとこりうみつ何してるので、照矢君」

自転車に乗った女の子が照矢に言つと照矢は嫌そうな顔で言つた。

「麻衣ちゃんこりうみつしたの？」

「珍しく一人じゃないから不思議に思つたのよ。それより、まだ探しているの？いい加減迷惑だから諦めたら」

麻衣と呼ばれた女の子は呆れたように言つと照矢は黙つたままで何も言わなかつた。スバルとツカサ、ミソラにアオイは一人が話している姿を見ていた。

「ま、がんばれば、誰も手伝わないと愚つけど」

麻衣は馬鹿にしたように言つと自転車をこいで去つていつた。麻衣が去つていくのを見るとミソラとアオイが怒つた様に言つた。

「誰なのあの子。何だか聞いてて嫌になつてくるわ

「本当だよ。見下したように言つて気分最悪だよ」

「荒松 麻衣。同級生だよ」

ミソラとアオイが言つたとき照矢がみんなに聞こえるように言つた。ツカサはハンターの時計を見た。

「そろそろ四時になるけど、どうする？今から探し始めても時間がないと思うけど」

「それもそうだね。ごめんね照矢君。探すの手伝おうとしたのに」

「別にいいよ。まだ時間はあるから」

照矢は笑つてはいたがどこか無理をしているようだった。

「じゃあ、序でに後一つ案内したいといふがあるんだけど、いいかな？」

「案内したい」といふ？」

スバルが公園から出て行こうとしている照矢に聞いた。

「うん」

照矢は頷いて言った。スバルは三人の方を見ると三人とも行つてみたい、と言つた。スバル達は照矢に案内されて山の方へ向かつた。

「ねえ、まだなの。いい加減疲れたよ

「私も。後どれくらい歩けばいいの？」

ミソラとアオイは疲れたようで地面に座つた。スバルとツカサも疲れているようだつた。なぜなら・・

「森の中を歩き出して30分になるね」

「え、ツカサ君。本当に？」

スバルも歩くのを止めて休憩していた。ツカサは少し先の方の山道を歩いている照矢を呼んだ。

「お~い、照矢君。後どれくらい歩けばいいの？」

ツカサの声が聞こえたようで後ろ向いて言つた。

「あと少しだよ。この道を抜けたところだから」

その声を聞くとアオイは立ち上がり歩き出した。ツカサも照矢の方へ歩き出した。ミソラまだ歩こうとしている二人を見てえー、と不満そうな声を上げた。スバルはミソラに近づき手をさしだした。

「ほらミソラちゃんも。あと少しだからがんばって」

「スバル君・・・うん」

ミソラは元気に言うとスバルの手を取り立ち上がるとツカサとアオイの後を追いつよつに歩き出した。

スバルとミソラが森を抜けると小学校のグラウンド程の広さに草原が一面に広がっている広場に出た。そこからはフレイグタウンが一望できた。さらに、今は夕方で夕日が草原や町を照らしオレンジ色に輝いていた。ツカサとアオイもその風景に見蕩れていた。

「すゞこ」

「きれい」

スバルたちもツカサたちと同様よつにその風景に見蕩れそれぞれ思つたことを口にしていた。

「どう? 緑に囲まれた町だけの風景。これを見せておきたかったんだ」

「すゞこよ。こんなにきれいなところ初めて見たよ」

「僕も。いろんなところも在るんだね」

アオイとツカサが言つた。一人ともさつきまで疲れていた顔が疲れが取れたように晴れやかだつた。

「ここって、照矢君にとつて特別なところなの?」

ミソラが照矢に聞くと少し前に出ると空を見上げて言つた。

「ここね、楓ちゃんに教えてもらつたんだ」

「楓ちゃんつて今探している?」

スバルは照矢に聞くと照矢は遠くを見ながら頷いた。

「いろいろあつてね。成り行きで教えてもらつたんだ」

スバル達はそれを聞くと何も言えなくなりオレンジ色に照らされている町をしばらくの間眺めていた。

夕日が沈みだし辺りが暗くなつてきていた。

「さて、そろそろ町に戻らないと帰りが大変になるから町に戻ろうか」

座つて風景を見ていた照矢が立ち上がるとスバルたちもつられるように立ち上がった。来た時と同様に照矢が先導して町に戻つていった。途中、スバルが暗闇で足を捕られ何回か転んだが。

スバル達は森から出ると町の中を歩いていた。駅に向かつていると近くの店に置いてあつたテレビのニュースが耳に入つた。

「続きましては、先日に起きた通り魔が再び現れました。被害に遭われたのは十一歳の小学生で刃物で斬りつけられたそうですが命に別状はないようです。今回起きたの合わせるとすでに十数件に上ります。警察では同一人物の犯行と見て捜査をしているようで・・・」

ニュースの内容は近頃起きている通り魔の話だつた。スバル達は

歩くのを止め、コースを聞いていた。大体聞き終えるとツカサが独り言のように言った。

「近頃物騒なことが多いね。何処かの店や公共の遊具とかが壊されたり

「本当だよ。警察は何をしてるんだろうね」

「まあ、僕たちも警戒していただけいいね」

スバルが言つとまた一行は駅へと向かい歩き出した。

・「ゴダマタウンー

スバルとミソラはウェーブライナーでフレイグタウンからゴダマタウンへ戻つてきていた。アオイとはウェーブライナーで別れ、ツカサとは帰り道で別れた。

スバルは今家に戻つていてご飯を食べていた。

「へ～え、友達の町に行つてたのね」

「うん。それでねあかねさん・・・」

ミソラがご飯を食べながら楽しそうに話しているとあかねが止めた。

「今はあかね、じゃなくてお母さんでしょ」

「あ、え、えつと・・それでお母さん」

「うん、なに?」

ミソラは恥ずかしそうに言つとあかねが笑顔で聞いた。

「そこどとも景色がきれいなところを見せてもらつたの」

あかねはミソラが夢中になつて話しているのを笑顔で頷きながら聞いていた。

「（ミソラちゃん、照矢君に見せてもらつた景色が気に入つたんだ）」

スバルは「」飯を食べながら考えていると大吾がただいま、と玄関で言った。あかねは話を中断すると玄関に向かつた。少しするとあかねが大吾と一緒にリビングに来た。

「お、ミソラちゃんいらっしゃい・・じゃなかつたな」

「えつと、お帰り、父さん」

ミソラがまた恥ずかしそうに言つとスバルも続いてお帰り、と言つた。

「おう、ただいま、スバル、ミソラ」

大吾は一人にそう言つと服を着替えるのに部屋に向かつた。

しばらくすると大吾はいつもの服装でリビングに戻ってきた。大吾は空腹だったのか椅子に座るなり置いてある夕食を食べ始めた。

ミソラは大吾も加わったのでまた今日のことを一から話し始めた。話が一息ついてくるころにはスバルとミソラは夕食を食べ終わっていた。

「あ、そうそう。ミソラちゃんは一階に空き部屋を作ったからその部屋を使ってちょうどだいね」

あかねは食器を洗いながらソファーに座りスバルと一緒にテレビを見ているミソラに言った。ミソラはあかねの方を見たがすぐに横を向き不満そうな顔をしてはーい、と言った。スバルは背伸びをすると立ち上がった。

「それじゃあ、僕は先にお風呂に入るね」

スバルそのまま着替えを取りに自分の部屋に行くと風呂場へと向かった。

スバルが風呂から出て自分の部屋に戻るとすぐにベットに直行した。

「今日は疲れた」

「おい、明日は学校だろう。準備しなくていいのか?」

「明日するから。それより、今日は疲れたからもう寝るね。おやすみウォーロック

スバルはウォーロックに言つと布団に潜つた。ウォーロックもハンターに戻りスリープモードに入った。

第三の襲撃

—「ダマタウン・スバル家—

窓から差し込む朝日が部屋の中を照らす。ミソラが眠たそうな顔をして起きた。

ミソラは服を着替えるとコンビングに向かった。ミソラが部屋の中に入るとあかねが朝食を作っていた。

「あ、はい、おはよー、ミソラ。速いわね」

「おはようございます」

「いひ。敬語はなしぽ」

「あ、はい・・じやなくて、うん」

あかねはミソラに向かって素直に頷いた。ミソラは顔を洗つてくると部屋の周りを見た。

「あれ? スバル君は?」

「スバルなら朝早くにルナちゃんに呼び出されたみたいでもう学校に行つたわよ」

「え、やうなの?」

「ええ。はい、今日の朝、はる」

あかねはミンクの前に朝食を並べた。ミンクは箸を持ち食べ始めた。

「（何で速く学校に行つたんだ？）……ま、速く食べて私も学校に行こうと」

ミンクはそんなことを考えながらじりじり飯を食べていた。

・「ダマ小学校・生徒会室」

「……で、なんで僕がこんな朝早くに起こされて、委員長たちの手伝いをしないといけないの？」

スバルはため息をつきとめに忙しそうに動いているルナ、キザマ口、ゴンタに言った。ルナは書類に書かれていることを確かめながら怒鳴った。

「うるさいわねーそんなことゴンタに言になさこー。」

「そうだぞ、スバル！ 口を動かすなら手を動かせよ」

「そもそもゴンタ君が預けていたデーターを消去するからでしょう。バックアップも取つてなかつたんですよ」

キザマ口は隣にいるペティアと一緒にエアディスプレイを操作していた。ゴンタは小さくなりめんぼくねえ、と静かに言った。スバルも何だかんだ言って書類を分けていた。

-数時間前-

外はまだ薄暗くスバルはまだ寝ていた。物音のしない部屋に突然ピリリ・・と音が鳴った。スバルは布団に潜つたまま近くに置いてある時計の目覚ましを止めようと手で触つていると音が止まった。スバルは何もなかつたように布団をかぶりそのまま眠りについた。しかし、一分も経たないうちにまた同じ音が鳴った。スバルはさつきと同じように目覚ましを止めようとしたが音は止まらずなり続けた。

「もう、うるさいな」

スバルはベットから体を起こすとあぐいをしながら音がしている方に歩いていった。音はスバルのハンターから鳴っていた。

「（電話か・・・誰なんだろう、こんなに朝早くから）」

スバルはハンターを操作して電話画面を出した。すると・・・

「もうーー電話に出るのにどれだけ時間が掛かってるのよーー」

電話をかけたのはルナだった。ルナの怒鳴り声に近い声はスバルの耳に入った。

「・・・委員長、今何時だと思つてるの？」

「そんのはどうでもいいわ。スバル君、今すぐに学校に来なさい！」

「な、何で？」

ルナはスバルの言ったことを耳にせずスバルに言った。起きたばかりのスバルはまだ眠たいようで目を擦りながら聞いた。

「ゴンタが今日学校に提出するはずだつた今年の予定表や予算とかをまとめたデータを全て消しちゃつたのよ

「ええ…? どうして?」

「ウイザードのオックスと慣れまわつてその拍子に消しちゃつたらしくじのよ」

ルナは呆れながら言った。

「・・・まさか、委員長たちの仕事を僕にもやれつて言つたじや

「あら、あなたにしては察しがいいわね。その通りよ。それじゃあ、十分以内に来なさい。分かったわね」

「ちよ、ちよっと待つてよ・・・」

スバルが言いかけたときにはすでに電話は切られていた。スバルがため息をつくとウォーロックはあぐびをしながらハンターから出てきた。

「お、珍しいこともあるもんだな。今日は雨か?」

「それどうゆう意味だよ

スバルは不機嫌そうにウォーロックを見た。ウォーロックは苦笑すると改めて聞いた。

「で、いくらなんでも速いな。何かあつたのか？」

スバルは手短にルナとの会話をウォーロックに説明した。話し終ると「ま、がんばりな」と人事のように言つとハンターの中へと戻つていつた。スバルは服を着替え下に降りるご飯を急いで食べると学校へ向かつた。

ゴンタが消してしまつたデータを作り直すためキザマロとペティアは書類の制作、ルナはその書類のチェック、他スバル、ゴンタ、ウォーザード（ウォーロックを除く）はその書類の整理やその他の仕事といゆ分担でやつていた。ルナはなんとしても間に合わせるためトロトロやつているゴンタに容赦なく怒つたりした。

作業し始めて時間が経ち生徒たちの声が外から聞こえてきた。部屋の中は全員燃え尽きたように椅子や床に座つていた。

「キザマロ、今ので最後？」

「はい。今ので最後です、スバル君」

「時間ギリギリですね。お疲れ様でした」

ゆういつ疲れた様子のないウォーザードのペティアはそう言つと周りの掃除をしていた。モードはルナのハンターに完成したデータを

送信していた。

「じゃあ、私は先生に渡していくからスバル君たちは先に教室に行つておきなさい」

ルナは自分のハンターを取りモードをつれて職員室に向かった。スバルたちは荷物を持ち部屋を出ようとすると、リソニア、ツカサ、竜牙が来た。

「あ、ここに居たんだ」

「おはようみんな」

リソニア、ツカサの順にそう言った。スバルは「おはようみんな」と言つと廊下に出た。それに続いてゴンタ、キザマロも出ってきた。

「何してたの？聞いてみたら朝早くから何か作業していたようだけ」

竜牙はスバルたち三人に聞くとキザマロが話した。話し終ると竜牙はゴンタに言った。

「ゴンタ。牛丼の取り合いでデータを全て消去するか？普通

「へへへ。なんか言い返したくなるが何も言えねえ」

「ゴンタは悔しかつてこむと竜牙がさりとめた。

「珍しく朝起きしたなら授業は居眠りするんじやないのか？」

「授業・・・・あ…!」

スバルは突然大きな声を出したのでミソラたちはスバルの方を向くとミソラが聞いた。

「どうしたのスバル君?」

「授業の準備してくるの忘れてたんだよ。委員長に呼び出されてもすぐには来たからするの忘れてた」

スバルは自分の荷物の中身を確認しながら言つてミソラが近づいてきた。

「本當だ。今日の授業のノートや教科書が入つてないよ。なんで、昨日準備しておかなかったのよ」

「仕方ないね。ミソラちゃんに借りるか見せてもらつたら?」

ツカサがスバルに言った。

「スバル君! わざと準備しなかつたんじゃないんですか! ?」

「そ、うだぞスバル! お前わざとだらう! いや、わざとじだ!」

「え、ちょっと待つてよ。わざとじゃないで」

「ゴンタとキザマロはスバルに詰め寄りながら言つてスバルは少しずつ後ずさりしていた。

「ツカサ君、今のわざと言つたでしょ?」

「ん？何のこと？」

竜牙は三人のやり取りを見ながら言つとツカサは笑顔で言つた。ゴンタとキザマロはスバルを壁まで追い詰めていた。

「「さあ、スバル（君）！素直に白状したらどうだ（ですか）」」

スバルは八方塞になつたこの状況を何とかしようと考えを巡らせているとキーン・コーン・カーン・コーンと学校のチャイムが鳴つた。

「あれ？このチャイムって・・・」

「ホームルーム開始のチャイムだね」

竜牙の一言でその場の時が一瞬止まつたように見えた。スバルは荷物をミソラから受け取るとスバル達は教室まで全力で走り出した。

-フレイグタウン・フレイグ小学校-

スバルがルナたちと生徒会室で働いているころ照矢は学校に登校していた。いつものように生徒が自転車をこいで学校に向かっている並木道の下を歩いていた。照矢がボートとして歩いていると頭上から数枚の葉が落ちてくると数本の切られた枝が落ちてきた。照矢に当たることはなかつたが、その後すぐに照矢の頭上から声が聞こえた。

「おい、大丈夫か？」

照矢が見上げると木の枝を支えにして立っている男がいた。男の目の中には真直ぐな切り傷がついていた。その男は照矢の姿を見ると近くに脚立が立てかけているのにもかかわらず飛び降りてきた。照矢はいきなり男が飛び降りてきたので「うあ」、と声を上げ後ずさりした。

「いや、すまなかつた。まさか下に人がいるとは思わなかつたんだ」

男はうまく地面に着地すると照矢に言つた。一方照矢は目が点になつていた。

「ん、お前フレイグ小学校の生徒か？それは悪かつたな」

「い、いえ。べつに大丈夫です。といひで、あなたは？」

「ああ、そうだったな。俺は尾上 おがみ 十郎じゅうろう 植木屋だ」

尾上はそういうと照矢も自己紹介した。

「僕は六年の緋・・照矢です」

尾上は途中で間を開けた照矢に少し不思議そうに見たが「そつか」と言つた。すると学校の方からチャイムの音が聞こえてきた。

「あ、僕もう行きますね。それじゃあ」

照矢は尾上に言つと学校に向かつて走つていった。尾上は照矢が見えなくなると仕事に取り掛かった。

照矢は教室に入ると窓ぎわの自分の席に荷物を置くとため息をつきながら椅子に座つた。教室の中は後ろのロッカーの近くで男子が数人話しており、前の方は麻衣の周りで何処で買つてきたのか雑誌を広げて

話している女子の姿が見えた。

照矢は教科書などを机の中に入れると外を見ていた。

-「コダマ小学校」

ホームルームが終わり一時間目、二時間目と時間が進んでいった。スバルは持つてくるのを忘れた教科の教科書はミソラに見せてもらつていた。そのたびにスバルは周りから視線を感じていたが。

四時間目終了のチャイムが鳴ると給食の準備を始めた。スバルはミソラに教科書を見せてもらうたびに感じる視線のおかげでクタクタだった。

「はあ。疲れた」

「だね」

ミソラは背伸びをしながらスバルに言つた。一人で話しているとルナたちも周りに集まってきた。

「スバル君大丈夫？疲れてるみたいだけど」

「スバル。まあ、お疲れ様」

ツカラ、竜牙の順に言つた。竜牙が言い終わるとスバルは「ハハハ・・・」と言つた。ルナは教室の空いている机を見ながら言つた。

「結局ジャック来なかつたわね」

「そうですね。これで、三日目。何をしてるんでしょうね」

それから給食の準備ができるまで世間話をしていた。

-フレイグ小学校-

照矢の教室では四時間目の授業、国語を受けていた。先生は教科書に書かれている物語を読んでいた。聞いている生徒の大半はうつぶせになつて寝ていた。先生は気づいているようだが起こさずに物語を読んでいた。外では体育の授業で生徒達が楽しそうにサッカーをしていた。

照矢は起きてはいたが先生の話はまったく聞いていなくグランドでサッカーをしている別の学年を見ていた。

「（は〜あ。やつぱりやる気しないな。あと十分で終わりか）」

照矢はふと時計を見てそんなことを考えるとまた外の方に視線を戻した。その時、あることに気がついた。学校から数メートル離れた上空に人が立っていたのだ。

「（ん？あれって人・・・じゃないな。あれは電波体？・・・！』

照矢が見ているとその電波体は歩くような速さで学校に近づいてきていた。照矢がその電波体の姿を確認出来るまで距離が縮まつたとき、目が合いそして息を飲んだ。なぜならその電波体は前に一度見たことがあつたからだ。

「（あの電波体は確かサイレントと戦つたときに来た）』

照矢と目が合つた時にはその電波体、モウメントスワイフトの周りには複数の槍が形成されていた。モウメントスワイフトは手を前に出すと槍はグランドに向かって一直線に飛んだ。そして、大きな音が聞こえたと思うとグランドから悲鳴が聞こえた。

血騒ぐ獣

-フレイグタウン・並木道一

尾上は照矢と別れた後、昼間まで仕事をしていた。

「もう十一時か、そろそろ廻にするか

尾上は服の中に入れていたハンターを取り出し時間を見ると脚立から降り道具を隅にかためると近くの公園に向かつた。道中、ハンターの中にいたウィザードのウルフが出てきた。

「今日はもう終わりか?」

「いや。食べ終わったら残りを終わらせるぜ」

「それより朝お前があつたあの照矢だけ、なんか気になるんだよな・・」

「あれからそればっかりだぞ」

ウルフは何か気になつて居るようすで照矢と別れた後から尾上と話すたびに言つていた。

「あいつと何処かで会つているような気がすんだよな

「じゃあ、何処かで会つたんじゃないのか」

尾上はさうでもここよつてひまつとそのまま公園まで歩いていった。

「地球に来てからじゃなくそれより前に……思い出せねえ」

ウルフは頭を抱えて考えていた。尾上はそんなウルフを見てため息をついた。

「あのはな・・・」

尾上が言いかけたとき大きな爆発音が聞こえた。尾上とウルフは顔を変え音が聞こえた方角を見た。その方角には煙が上がっていた。

「あの場所は確か小学校のあたりじゃ・・・」

「ああ、どうやらその小学校みたいだ。この周波数は・・・」

「ともかく行くぜウルフ。電波変換」

尾上は光に包まれるとウルフフォレストの姿になり小学校に向かつて駆け出した。

-コダマ小学校-

スバルたちが昼食を食べ終わり教室の中でいつもメンバード話しているとスバルのハンターに電話が掛かってきた。スバルは屋上に行き電話画面を出すと暁の姿が映った。

「あれ、暁さん。どうしたんですか？僕たち今学校に来ているんですけど」

「悪いが今すぐフレイグ小学校に行つてくれないか。FM星人が現れたらしいんだ」

「フレイグ小学校つて照矢君のいる?」

「そうだ。もうアオイと宵磨に連絡したからお前たちもすぐに向かってくれ。お前たちの学校には早退ということで話を付けてる」

「暁さんは?」

「悪い。俺は今別件で手が放せないんだ。頼むぞ」

暁はそう言つと電話を切つた。スバルは話が終わると電波変換しフレイグタウンに向かつて駆け出した。道中ウォーロックがあることに気づいた。

「おいスバル。ミソラたちに何も伝えてないがいいのか?」

「あ・・・・ウォーロック、メールを送つといて」

スバルはそのままスピードを落とさずに向かつた。

—フレイグ小学校—

モウメントスウィフトが放つた槍はグラウンドに突き刺さつた瞬間爆発した。大きな爆発音で、うつ伏せで寝ていた生徒は飛び起き

授業をしていた先生も窓のほうにより外の様子を見た。グラウンドには砂煙が上がり遊具は全て爆風で壊れていた。授業でサッカーをしていた生徒たちの数人は怪我をしたようで倒れている生徒もいれば手で頭を抱え地面に伏せている生徒もいた。

「何があつたんだ！？」

「知らねえよ！いきなり外で大きな音がしたんだよ」

外の様子を見た照矢の同級生たちは何事かと騒ぎ出した。授業をしていた先生も何がどうなつているのかと慌てていた。教室の中で唯一冷静でいられたのは照矢だけだった。

照屋が教室から出ようとするとグラウンドの方を見ていたモウメントスワイフトは顔を上げ照矢がいる教室を見た。

「（こっちを見る。何をする気なんだ）」

照矢はそう思つているとモウメントスワイフトの周りにまた槍が形成された。モウメントスワイフトが手を前に出すと槍が教室に向かつて飛んだ。槍を見た生徒たちは「うあああ」と叫びながら伏せるとすぐに窓ガラスが割れ、ガラスの破片があたりに飛び散った。照屋を含め生徒たちが起き上がろうとすると教室を貫通した槍が爆発した。爆風で反対側の窓ガラスも割れ、そのガラスの破片が刺さっている生徒が数人いた。

「う、うあああ！」

「落ち着くんだ。避難訓練と同じように行動するんだ！」

起き上がり辺りの光景を見た一人の生徒が怯え叫ぶと教室を飛び

出した。それに続くよう「我先に」と教室を飛び出しエレベーターに向かつた。先生は落ちつくように叫んだがパニック状態になつておりなんの意味もなかつた。全教室でも同じような状態になつているようで下の方や隣のクラスで叫び声や泣き声が聞こえた。

廊下ではエレベーターに乗ろうと生徒たちが押し合つておりエレベーターに乗れなかつた生徒は階段の方に走り出した。生徒を突き飛ばしたり、ともかく逃げることしか考えてないようで足を挫いたり怪我をし、廊下に座り込んでいる生徒が続出していた。

照矢の教室にはもう照矢以外誰もいなかつた。照矢がモウメントスワイフトと廊下の様子を見ているとハンターからディムネスが出てきた。

「照矢、どうするんですか？」

「どうするって、暁さんにはもう知らせたからそのうちスバル君たちも来てくれると思うけど、速くモウメントスワイフトを何とかしないといけないし、怪我人も安全なところに避難させないとしないし、くそーやることが多いいな」

照矢は教室を飛び出すと廊下で座つていてる生徒の方に向かつた。照矢が廊下に飛び出したのを見るとディムネスはハンターに戻つた。照矢は近くにいた先生を呼ぶと生徒を任せ階段の方に駆け出した。下に降りず屋上に向かつて。

屋上に出ると手すりから身を乗り出すとモウメントスワイフトを見た。モウメントスワイフトは今度は槍ではなく岩を形成していた。

「まさかあの岩も飛ばすきなんじゃあ」

「ん？ 照矢！ あそこ！」

ディムネスがいつの間にかハンターから出てきてグランドの方を見ると足を怪我したようで泣いている生徒を指した。照矢がディムネスが言つた方を見ると驚愕した。

「よ、葉平！…逃げてなかつたのか…？」

照矢がハンターを取り出したとき狼の姿をした電波体が現れた。モウメントスワイフトが気づいたようで後ろを向いた。

「グルル・・血が騒いできやがつた、血を静めてくれ」

そこには闘気を放つているウルフフォレストがいた。モウメントスワイフトは静かに睨むとハンターからスワイフトが出てきた。

「あら、ウルフじゃない。久し振りね。そして、お似合いのパートナーじゃないの」

「スワイフトか。話は聞いていたがお前もアンドロメダを復活させようとしているのか」

「あなたたちが前に失敗したから代わりに私たちがやつてあげているんじゃない」

「止めときな。アンドロメダを復活させても何も変わらないぜ」

「そんなの知らないわよ。ただ復活させたいからやつてるのよ」

ウルフとスワイフトが話しているとモウメントスワイフトが動いた。作り出した岩をウルフフォレストに向かつて飛ばしたのだ。ウルフフォレスト、尾上は雄叫びを上げるとワيدクローとアップバー

クロ一の連續攻撃で岩を破壊した。

「おい、下にはまだガキがいるんだぞ！」

ウルフは尾上に言つた時には遅かつた。碎かれた岩はすぐ下にいる生徒たちに向かつて落ちていた。岩が当たるか当たらないところまで落ちたとき風を纏つた薄緑色の矢が岩を粉々に破壊した。

尾上とモウメントスワイフトは矢が飛んできた方向、学校の屋上を見ると翼があり灰色の電波体、スカイディムネスが弓を構えていた。照矢は翼を羽ばたかせ飛んだ。そのときモウメントスワイフトとそのウイザード、スワイフトが何かに気がつき後ろを向いた。

「ユネクトウォール」

モウメントスワイフトの前に壁が出来るとズガ！、と何かが刺さる音が聞こえた。壁には薄緑色の矢が刺さっていた。

「（落ちた岩を碎いたときに放つた矢を操つて後ろから攻撃。能力を知らなかつたらやばかつたかな）」「

モウメントスワイフトはそう考えながら再び尾上の方を見た。そのときには照矢が来ていた。

「お前は？」

「スカイディムネス。サテラポリス遊撃隊です」

「お前、朝会つた・・」

尾上が言いかけたとき照矢が遮つた。

「あのFM星人を頼んでいいですか？その間に僕が逃げ遅れた生徒を非難させます」

「分かつた。こつちは任せな」

尾上はそう言うとモウメントスワイフトに向き直った。照矢はそれを聞くと一目散にグラントに残された生徒の非難に向かつた。モウメントスワイフトはしばらく照矢と尾上を見ていると尾上が動いた。

「おい、しつかりしろもう大丈夫だ」

照矢は足を押されて蹲っている生徒に駆け寄った。生徒は「怖い、怖い・・」と泣きながら言い恐怖で体が震えていた。照矢とディムネスは手分けをして逃げ遅れた生徒を担ぎ一階の渡り廊下の近くの物陰に連れて行つた。渡り廊下に着いたとき学校の影からこちらの様子を見ていた先生を見つけるとその先生を呼んだ。

「これで全員ですか？」

先生は「おそらく」と言つたとき連れてきた生徒の一人が消えそうな声で言つた。

「よ、葉平君が・・・まだ」

照矢は荒れ果てたグラントをもう一度見渡すと岩の影に人影が見えた。照矢が駆け出そうとしたとき影がその場にいた全員を覆つた。

照矢が生徒の非難に向かつた後、尾上が自慢の爪で斬りかかつた。モウメントスワイフトはバックステップで華麗にかわすと槍を作り出すと尾上に向かつて飛んだ。尾上は素早い動きで横にかわし、槍が真横を通り抜けたときその槍が突如爆発した。

尾上は予想していなかつたようで爆風に吹き飛ばされた。近くのウェーブロードに移動すると涼しい顔をしているモウメントスワイフトを睨んだ。

「どうしたのウルフ。動きが前より雑になつていてるわよ」

スワイフトは余裕と言いたげな顔で言つた。ウルフは尾上に何か言いかけたとき尾上には何も聞こえてなかつた。今の尾上には騒いでいる血を沈めようと田の前のモウメントスワイフトしかもはや見てなかつたからだ。スワイフトはその姿を見ていた。

「どうする？あの物騒な田つきの狼。ほつといたら何しだすか分からぬいわよ」

「・・・うん。少しの間眠つていてほしいけどな。あれじゃあ、簡単にはいかないだろうね」

モウメントスワイフトとスワイフトが話していると、尾上は爪をギラつかせ再び斬りかかつた。モウメントスワイフトはとっさに岩を作り飛ばした。尾上はワideonで粉碎した。

「・・・！」

モウメントスワイフトは岩の破片が飛ぶ先を見ると思を飲んだ。ウルフも見るとその先には後ろを向き、まったく気づいていない照

矢がいた。飛んでいく岩はそれなりの大きさでまともにぶつかれば徒ではすまないだろう。

「後ろだー！」

ウルフは有りつ丈の大声で叫んだ。照矢が振り向いたときには岩はもう目の前まで来ていた。

照矢が葉平を助けに行こうと後ろを向いたとき大人の体の大きさをゆうに越すほどの岩が飛んできていた。

「（ここ）でかわしたら後ろは）・・くそ！」

照矢は『』を使って受け止めた。ディムネスはすぐさま風を使いバラバラにした。

「大丈夫ですか！？」

「心配しなくていいよ。それより行くぞ」

照矢は『』を持っていた左腕を押さえながら言った。
岩の影に隠れている葉平と呼ばれた生徒の場所まで来ると声をかけた。

「何で逃げずにこんなところに居たんだ」

「うう、う・・・・・」

照矢が言つたとき葉平は泣いていた。照矢は「はあ」とため息をつくと葉平を抱いた。

「もう大丈夫だから。泣くな」

泣き止まそうと照矢が言うと先ほど非難させた生徒たちの場所に連れて行こうとした。そのとき後ろから炎が向かってきていた。今

度は気づき」を構え吹き飛ばそつとしたとき照矢の目の前に庇つよう壁が現れた。

「……？」

炎は壁にぶつかるとあたりに広がった。照矢は状況を把握する前に葉平を安全な場所に連れて行つた。先生に葉平を預けると尾上がいる場所に向かつた。

照矢が尾上の隣に来ると辺りを見た。

「おい。何邪魔してくれてんだよ。せつかく殺つたと思ったのに

」

荒々しく言いながらモウメントスワイフトの後ろから赤黒い身体をした電波体、クレイムサイレントが歩きながらやつて來た。

「邪魔したのはびっちょ。わざと消えれば

「何だと！」

スワイフトがそう言つとサイレントが出てきた。一人のウイザードはガミガミと言ひ争いを始めた。

「な、何だ？」

「や、まあ

興奮していた尾上も呆気に取られていた。クレイムサイレント、西杉はサイレントを無視して不気味な笑みを浮かべながら照矢に向けて言った。

「やつと見つけたぜ。お前には借りがあるからな」

「ああ、知らないね。お前に借りを貸した覚えはないけどね」

照矢は思い出したくないよつに顔を顰めて言った。西杉は恐ろしい目つきで一瞬睨むと口を開じていった。

「フツ。だつたら思い出をせんやるよー! 地獄のよつな痛みを『えでな!』」

「(おいおい。何か前より言動が荒くなつてないか)」

照矢がそんな暢気な事を考へていると西杉が一本の短剣を手に持ち駆け出した。照矢は校舎と反対の方向に移動しながらかわした。

「あーあ、余計な物までついて来ちゃつたわね。ただでさえやりすらいつて言ひのこ」

「うん。そうだね」

スイフトのボヤキに静かにモウメントスイフトが答えた。スイフトは尾上達に向きなおるとやつと違つ眼つきが変わつていた。

「やつとかたずけて、あのサソリを追つ払つわよ

「うん」

モウメントスイフトが両手を前に出すと一番初めに作り出した

槍とは比べ物にならないほど量を作り出した。スワイフトは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「ここの槍。全部ヤツキと同じように爆発するわよ。素早いあなたでも全部をかわせるのかな?」

「つち

尾上はスワイフトの言ったことを聞くと舌打ちをした。

「それじゃあ、サヨナラ……かな」

スワイフトがウルフに向けて言つと後ろに形成された無数の槍が四方八方に飛び尾上とウルフに襲いかかった。

照矢と西杉はウルフたちと少し離れたところまで移動していた。西杉は短剣を振り回していた。

「危なつかしいな」

「オラ、オラ!かわしてばかりじゃあ、どうにもならないぜ」

照矢は短剣を振り回しながら迫つて来る西杉を蹴飛ばすと距離を取つた。西杉はチッと舌打ちをすると校舎の方を向いた。

「そういうや、まだあそこでコソコソ見ているガキを助けようとしていたな。ククク・・」

西杉はそう言いながら先ほど照矢が非難させた葉平と先生の方へ歩み寄つていった。少し歩くと西杉のすぐ横を矢が通り抜けた。矢は西杉の頬を掠つただけで致命傷を与えてなかつた。西杉は恐ろしい目で弓を左手で構えている照矢を見るとニヤと笑みを浮かべた。

「相手は僕でしょ」

「そういうことな。もう、終わりだがな」

西杉は右手に持つていた短剣を投げ指を鳴らした。照矢はその行動を見た後、足に何かが刺さつた感覚を覚えた。後ろに振り向くとウィザードオンしたサイレントが尻尾の先を照矢に向けており、右足には液体が付着した数本の針が刺さつっていた。

「（！・・右足の感覚がない）」

「気づいてんだろ？ さあて。思い出すまでいたぶつてやるよ」

西杉は両手に持つた短剣に炎を纏わすと笑みを浮かべたまま駆け出した。短剣を振りかぶり振り下ろすとき照矢は目を瞑つた。

少し間を空け照矢はゆっくり目を開けると・・・

「危機一髪かな？ 危なかつたね」

鉢で西杉の短剣を受け止めているアイスユニコーン、アオイがいた。

「誰だ、テメエ？」

「うーん。スカイデイムネスと同じサテラポリス遊撃隊、だよ！」

アオイは短剣を受け止めていた鉾を力一杯振り西杉を吹き飛ばした。西杉は数メートル吹き飛ばされたが体勢を立て直しアオイを睨みつけていた。

「それじゃあ、サヨナラ……かな」

尾上とウルフに向かつて無数の槍が四方八方に飛び、襲いかかった。

尾上は一か八かで全ての槍をかわそつとしていると田の前に炎の柱が壁を作るよう地面から噴き出した。炎は飛んでくる槍を爆発する前に全て焼き尽くした。やがて炎は消えると中からアレスレオパルド、宵磨がいた。

「・・・アレスレオパルド」

「もう来たのね。思つてたよりお速い」到着だとこと

モウメントスウィフトとスウィフトがそう言つと宵磨は持つていた両手剣を構えた。

「そつちは俺たちのこと全て把握済みつてことかよ

「誰だが知らねえが助かつたぜ」

「おーあの犬つこるウルフじゃないか」

「・・・ディムネスが来てるって分かったとき、すげく嫌な予感がしたがやつぱりか」

ウルフはアレスの姿を見ると面倒くさい奴に会つたと言つ顔でため息をついた。

「アレス、話は後にしてくれない。それより、ウルフフォレスト。ちょっとドバリアとか防御系のバトルカード使っていいください」

尾上は宵磨の言つことを聞いた後、言われたとおり防御系のバトルカードを使つた。モウメントスワイフトは宵磨が笑つている顔を見ると自分を囲むように壁を作り出した。スワイフトは「ちょ、ちよつと」と言つたがその声は壁によつて消された。

「おい、そこの女ー今すぐそこをどいた方が身のためだぜ」

「そうかな? それより周りを見てなくて良いのかな?」

アオイは西杉の言葉にあまり動搖せず言い返した。西杉は「ああん! ?」とドスの利いた声で言つたとき紫色の炎が落ちた。西杉は上方を見ると黒い四枚羽がある電波体、ジャックコーヴァスがいた。

「ペインヘルフレームーー！」

ジャックはそのまま巨弾の紫色の炎を乱射した。その様子は尾上

も気づいたようで当たらぬようにかわすので必死だつた。紫色の炎は見境なく降り注いだ。照矢は矢で、アオイはフリーズボールで自分に飛んでくる炎を消していた。

「これで何発目だよ」

「うん。十発近くは来たかな？」

「加減と言つことを知らないの？学校が燃えるよ」

「ジャック君も放火はしたくないだろうから大丈夫じゃない」

照矢がボヤいているのを簡単に答えた。炎の落ちてくる数が減つてくると地面に落ちた炎が消え煙が辺りから空へ上つていた。

宵磨とウルフはモウメントスワイフトが中にいるはずの壁に歩み寄つていると突然、壁が消え中には誰もいなかつた。

「つち、逃げられたか」

宵磨は舌打ちすると西杉の方を見た。照矢とアオイは無事だつたようだ煙の中にいる西杉の方を見ていた。煙に人影が映ると中から火傷を負つた西杉が出てきた。

「よくも、よくも、よくも・・・よくもやつてくれたな！――！」

西杉は恐ろしい形相でそう叫ぶと短剣を持ち直し照矢、アオイ、宵磨、尾上、ジャックの順に睨みつけると赤紫色の肉眼で見える闇気を放つた。

「テメエら全員生きて帰れると思うなよ！――」

その場にいた照矢たち全員は恐怖を感じ体が無意識に震えていた。

「テメヒら一生目を閉じてな！！邪光消ま・・」

西杉が技を放とうとしたとき数発の弾丸が当たった。西杉は振り向くとロックマンがウェーブロードの上に立っていた。

「貴様・・・俺の邪魔ばっかりするんじゃねえ！！」

「おい、西杉。まだやるつもりか」

「当たり前だ！！」のまま帰れるか！』

「少しば周りを見る！一回退くぞ」

サイレントは西杉の受け答えを一切聞かず強引に連れて行つた。スバルは照矢たちが集まつている場所に行くと全員疲れきついていた。

「みんな大丈夫だつた？」

「あ、スバル君。さつきは助かつたよ」

「あ～あ、あんな奴一度と会いたくな」

アオイはグランドに座り冒険は空を見上げながら言つた。

「あれ？ジャック。いつの間に來ていたの？」

「ん？あ、ちょっとノイズウェーブを調べててな。今サテラポリ

スに連絡したから暁もそのうちに来るだろ?」

ジャックはそう言いながらハンターを仕舞つた。空を見上げていた宵磨は何か見たようでスバルを呼んだ。

「スバル。あれって、ミソラちゃん達じゃない?」

スバルは宵磨が指を指した方を見ると電波変換したミソラたち三人が向かってきていた。ミソラたちグランドに降りると電波変換を解いて辺りを見回した。

「あれ?もう終わっちゃったの?」

「ミソラちゃん、スバル君と一緒に来てなかつたんだ」

アオイはスバルを見ながらミソラに言つとミソラが思い出したよう腕を組んだ。

「そなんだよ。スバル君、メールだけ送つてきて自分は先に現地に向かっているんだから」

それを聞いた照矢、ジャック、アオイ、宵磨はジト目でスバルを見た。スバルは視線を感じると慌てていた。

「え、え?僕なんか悪いことした?」

「いや。気にしなくて良いよ」

アオイは首を横に振るいながら言った。

しばらくするとサテラポリスが到着し操作が始まった。フレイグ小学校の生徒はすでに先生たちが下校さし自宅待機の指示を出した。スバル達は操作の邪魔にならないようグランドの隅で座っていた。サテラポリスの操作の様子を見ていると暁が歩いてきた。

「よ。みんなお疲れ様。疲れているところ悪いがちょっと手伝ってくれないか?特に照矢には状況を詳しく聞きたいから・・・ん?」

暁はスバルたちに歩み寄り話していると照矢に近づきしばらく見ると左腕を掴んだ。暁はそのまま照矢の左腕の袖を捲つた。

「ツツ」

「おいおい、腫れてるじゃないか。どうしたんだ?」

「・・・あの時か?」

近くの茂みで寝ていた尾上が起き上がりスバルたちに叫んだ。

「あの時って何ですか?尾上さん」

暁が尾上に聞くと話し始めた。

「俺がモウメントスワイフトとやりあつていた時そいつは生徒を非難させていてな。そのとき流れ弾が飛んで生徒を庇つて受け止めてたぜ」

暁が照矢に聞くと静かに頷いた。暁は辺りを見回すとスバルたちの方に向き直った。

「よし。スバル、ミソラとツカサは照矢を自宅まで連れて行ってくれ」

「い、いいですよ。自分でいけますから」

「無茶をするな足もだろ?」

暁は照矢の肩に手を置くとスバルたちに聞こえないように言った。

「スバルには素直に話しても大丈夫だ。俺が保障してやるよ」

照矢は暁の顔を見ると暁はフッと笑うとスバルに「それじゃあ頼んだぞ」と言い現場の指示をするため校舎に向かって歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263w/>

流星のロックマン 連鎖する運命

2011年12月31日18時52分発行